

## 南海トラフ地震関連解説情報について

### －最近の南海トラフ周辺の地殻活動－

現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時<sup>(注1)</sup>と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

(注1) 南海トラフ沿いの大規模地震(M8からM9クラス)は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が70から80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から既に70年以上が経過していることから切迫性の高い状態です。

#### 1. 地震の観測状況

(顕著な地震活動に関係する現象)

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

(ゆっくりすべりに関係する現象)

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震(微動)のうち、主なものは以下のとおりです。

- (1) 紀伊半島西部：9月28日から10月3日
- (2) 紀伊半島北部：9月30日から10月5日
- (3) 東海：10月14日から26日
- (4) 四国東部：10月16日から23日

#### 2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)から(4)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られています。

GNS S観測によると、2019年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。また、2020年夏頃から九州南部で観測されている、それまでの傾向とは異なる地殻変動は、2021年夏頃から停滞し、その後収束していたとみられます。<sup>(注2)</sup>

(注2) 九州南部で観測されている、それまでの傾向とは異なる地殻変動について、時系列データの処理手法を改良して得られた結果によって、表現を変更しています。

(長期的な地殻変動)

GNS S観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

### 3. 地殻活動の評価

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)から(4)の深部低周波地震(微動)と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2019年春頃からの四国中部の地殻変動及び2020年夏頃からの九州南部での地殻変動は、それぞれ四国中部周辺及び日向灘南部のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。このうち、日向灘南部の長期的ゆっくりすべりは、2021年夏頃には停滞し、その後停止していたとみられます。<sup>(注3)</sup>

これらの深部低周波地震(微動)、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

(注3) 日向灘南部のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりについて、時系列データの処理手法を改良して得られた結果によって、表現を変更しています。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

以上を内容とする「南海トラフ地震関連解説情報」を本日16時00分に発表しました。

添付の説明資料は、気象庁、国土地理院、防災科学技術研究所及び産業技術総合研究所の資料から作成。  
気象庁の資料には、防災科学技術研究所、産業技術総合研究所、東京大学、名古屋大学等のデータも使用。  
産業技術総合研究所の資料には、防災科学技術研究所及び気象庁のデータも使用。

---

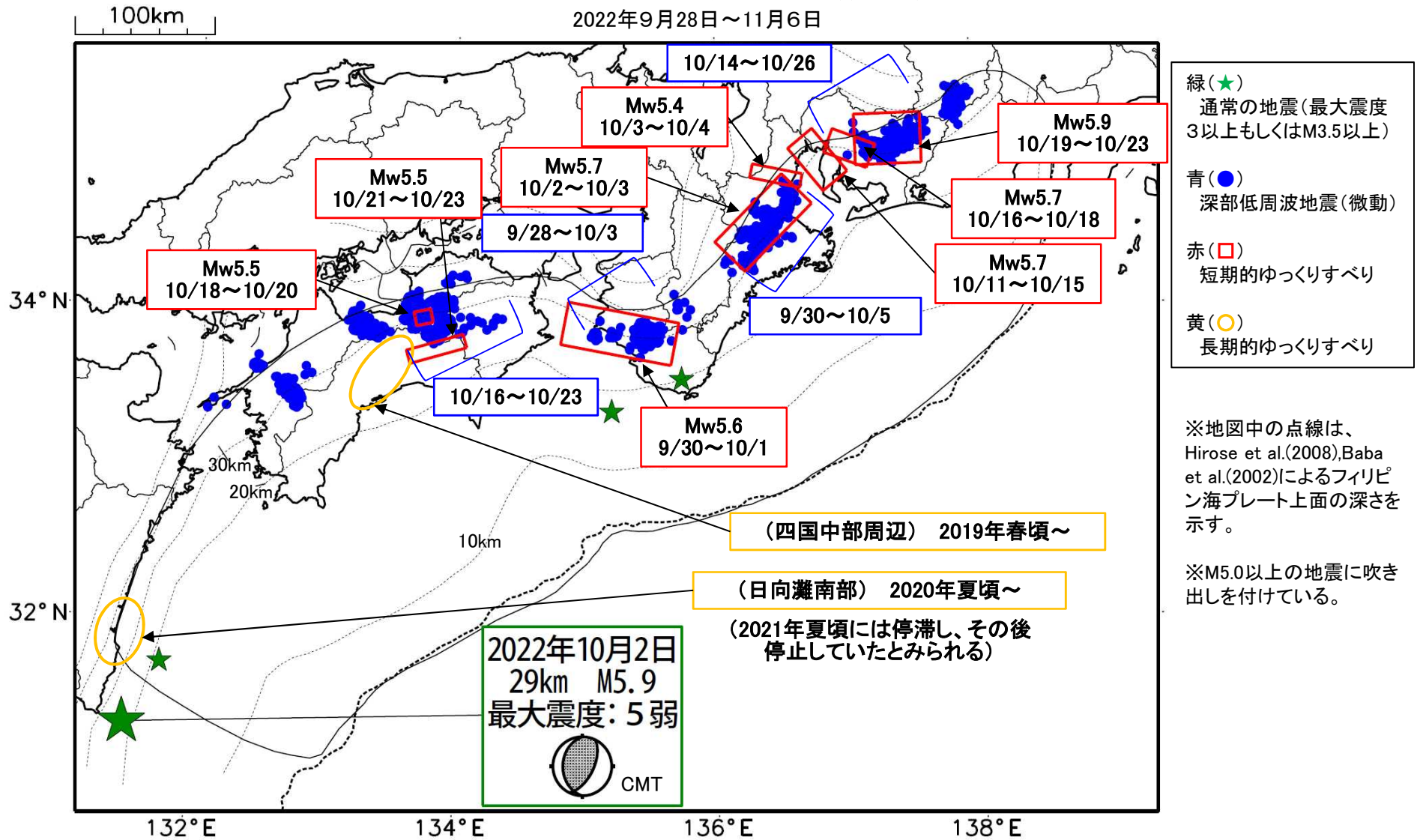
気象庁では、大規模地震の切迫性が高いと指摘されている南海トラフ周辺の地震活動や地殻変動等の状況を定期的に評価するため、南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会、地震防災対策強化地域判定会を毎月開催しています。本資料は本日開催した評価検討会、判定会で評価した、主に前回(令和4年10月7日)以降の調査結果を取りまとめたものです。

なお、日時のデータなど、精査後修正することがあります。

問合せ先：地震火山部 地震火山技術・調査課 大規模地震調査室 担当 青木 電話 03-6758-3900 (内線 5244)
---

# 最近の南海トラフ周辺の地殻活動

2022年9月28日～11月6日



- 緑(★)  
通常の地震(最大震度3以上もしくはM3.5以上)
- 青(●)  
深部低周波地震(微動)
- 赤(□)  
短期的ゆっくりすべり
- 黄(○)  
長期的ゆっくりすべり

※地図中の点線は、Hirose et al.(2008), Baba et al.(2002)によるフィリピン海プレート上面の深さを示す。

※M5.0以上の地震に吹き出しを付けている。

2022年10月2日  
29km M5.9  
最大震度: 5弱  
CMT

通常の地震(最大震度3以上もしくはM3.5以上).....気象庁の解析結果による。  
 深部低周波地震(微動).....(震源データ)気象庁の解析結果による。(活動期間)気象庁及び防災科学技術研究所の解析結果による。  
 短期的ゆっくりすべり.....【東海】気象庁の解析結果を示す。【紀伊半島北部、紀伊半島西部、四国東部】産業技術総合研究所の解析結果を示す。  
 長期的ゆっくりすべり.....【四国中部周辺、日向灘南部】国土地理院の解析結果を元におおよその場所を表示している。

## 令和4年10月1日～令和4年11月6日の主な地震活動

○南海トラフ巨大地震の想定震源域およびその周辺の地震活動：

【最大震度3以上を観測した地震もしくはM3.5以上の地震及びその他の主な地震】

月/日	時:分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	発生場所
10/1	08:42	和歌山県南部	28	3.8	2	フィリピン海プレート内部
10/2	00:02	大隅半島東方沖	29	5.9	5弱	フィリピン海プレートと陸のプレートの境界
11/3	21:10	和歌山県南方沖	29	3.5	1	フィリピン海プレート内部
11/6	00:32	日向灘	33	3.8	1	

※震源の深さは、精度がやや劣るものは表記していない。

※太平洋プレートの沈み込みに伴う震源が深い地震は除く。

○深部低周波地震（微動）活動期間

四国	紀伊半島	東海
<p>■四国東部</p> <p>10月6日～10日</p> <p>10月13日～14日</p> <p><b>10月16日～23日</b> . . . (4)</p> <p>10月25日</p> <p>10月29日～30日</p> <p>11月4日～5日</p> <p>■四国中部</p> <p>10月7日～10日</p> <p>10月14日～15日</p> <p>10月21日</p> <p>■四国西部</p> <p>10月1日～2日</p> <p>10月4日～5日</p> <p>10月8日～10日</p> <p>10月13日</p> <p>10月17日～20日</p> <p>10月25日～26日</p> <p>11月4日</p>	<p>■紀伊半島北部</p> <p><b>9月30日～10月5日</b> . . . (2)</p> <p>10月9日～10日</p> <p>10月13日～15日</p> <p>11月5日</p> <p>■紀伊半島中部</p> <p>11月3日～5日</p> <p>■紀伊半島西部</p> <p><b>9月28日～10月3日</b> . . . (1)</p> <p>10月8日～10日</p> <p>10月14日</p> <p>10月18日</p> <p>10月20日～21日</p> <p>11月1日～2日</p> <p>11月5日～（継続中）</p>	<p><b>10月16日～24日<sup>注1)</sup></b> . . . (3)</p> <p>10月26日～27日</p> <p>10月30日</p> <p>11月1日～（継続中）</p>

※深部低周波地震（微動）活動は、気象庁一元化震源を用い、地域ごとの一連の活動（継続日数2日以上または活動日数1日の場合で複数個検知したもの）について、活動した場所ごとに記載している。

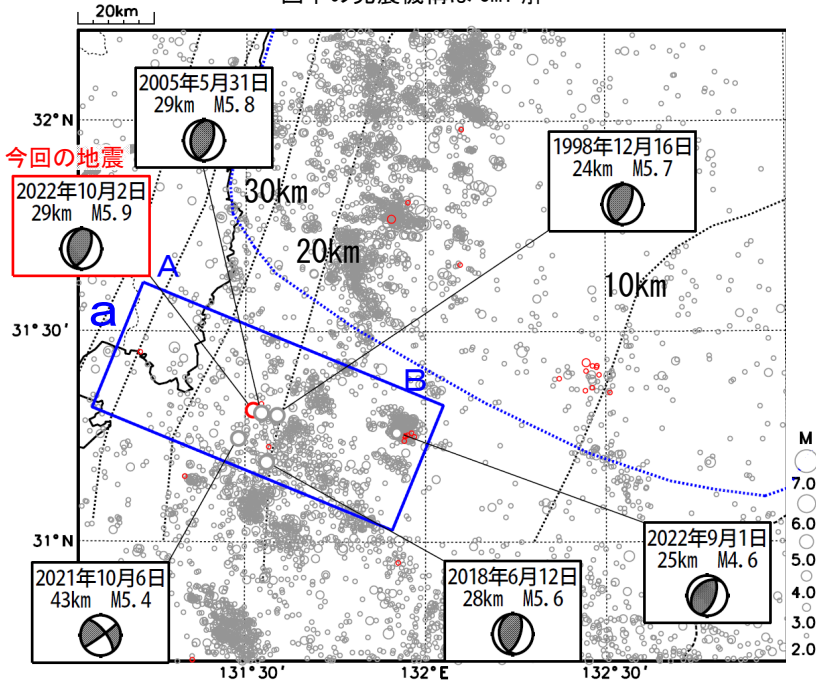
※ひずみ変化と同期して観測された深部低周波地震（微動）活動を**赤字**で示す。

※上の表中（1）～（4）を付した活動は、今期間、主な深部低周波地震（微動）活動として取り上げたもの。

注1）防災科学技術研究所による解析では、10月14日から26日頃にかけて、活発な微動活動が見られた。

# 10月2日 大隅半島東方沖の地震

震央分布図  
 (1997年10月1日~2022年10月31日、  
 深さ0~90km、 $M \geq 2.0$ )  
 2022年10月2日以降の地震を赤く表示  
 図中の発震機構はCMT解

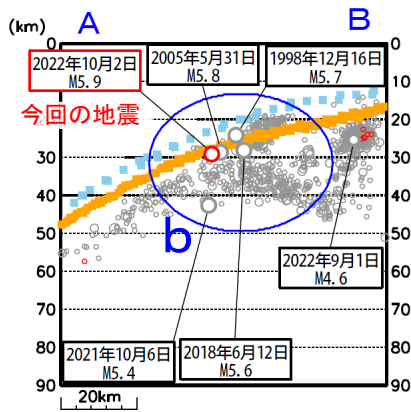


2022年10月2日00時02分に大隅半島東方沖の深さ29kmでM5.9の地震(最大震度5弱)が発生した。この地震は、発震機構(CMT解)が西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した。

1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近(領域b)ではM5.0以上の地震が時々発生している。そのうち、2005年5月31日にはM5.8の地震(最大震度4)が発生している。

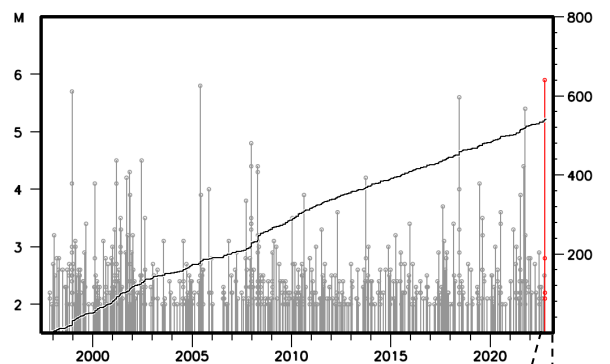
- ※ 黒色の点線は Hirose et al. (2008)、Baba et al. (2002) によるフィリピン海プレート上面のおおよその深さを示す。
- ※ 青色の点線は南海トラフ地震の想定震源域を示す。

領域 a 内の断面図 (A-B 投影)

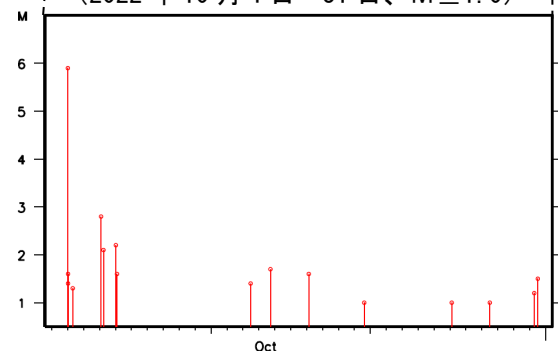


- ※ 水色の点線は Hirose et al. (2008)、Baba et al. (2002)、橙色の点線は内閣府 (2011) によるフィリピン海プレート上面のおおよその深さを示す。

領域 b 内の M-T 図及び回数積算図



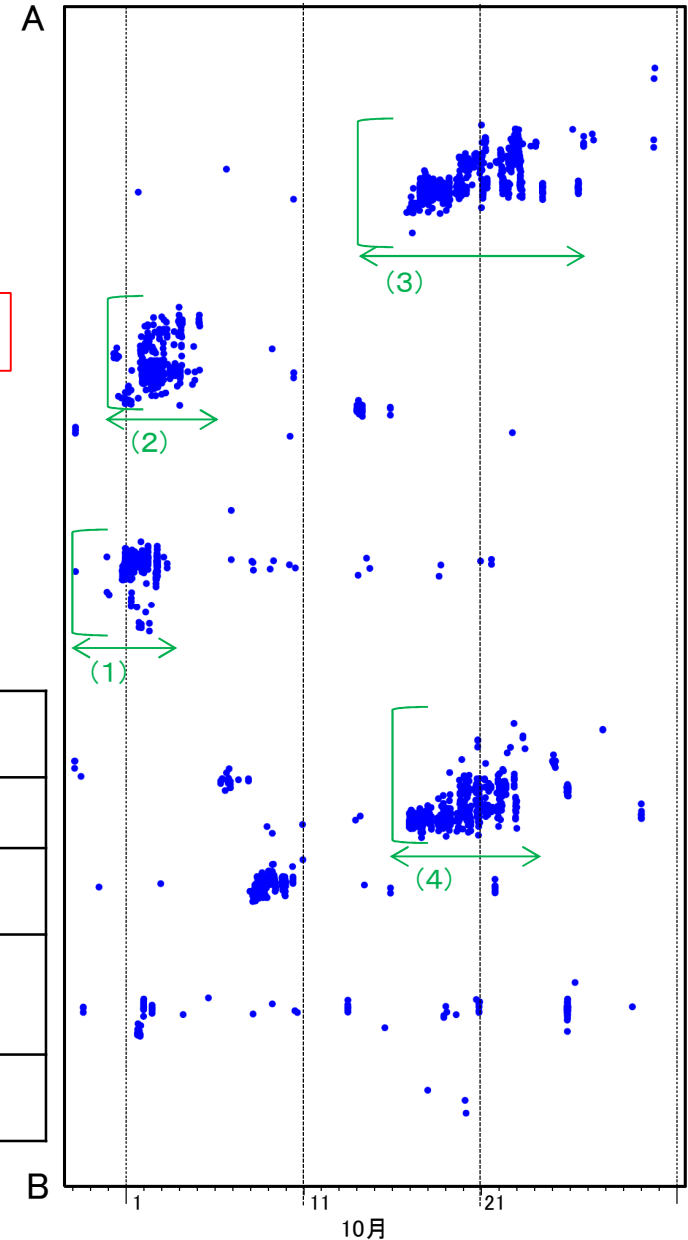
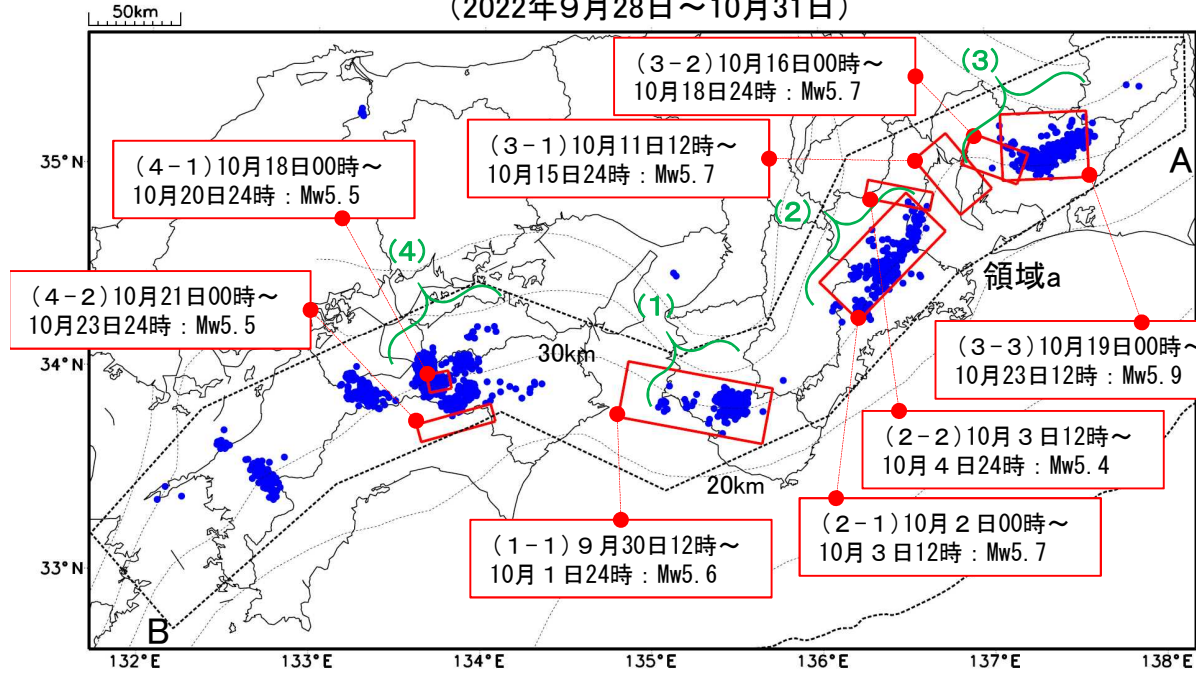
M-T 図のみ  
 (2022年10月1日~31日、 $M \geq 1.0$ )



# 深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべりの全体概要

深部低周波地震(微動)の震央分布図と短期的ゆっくりすべりの断層モデル  
(2022年9月28日～10月31日)

領域a(点線矩形)内の深部低周波地震(微動)の時空間分布図(A-B投影)



主な深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

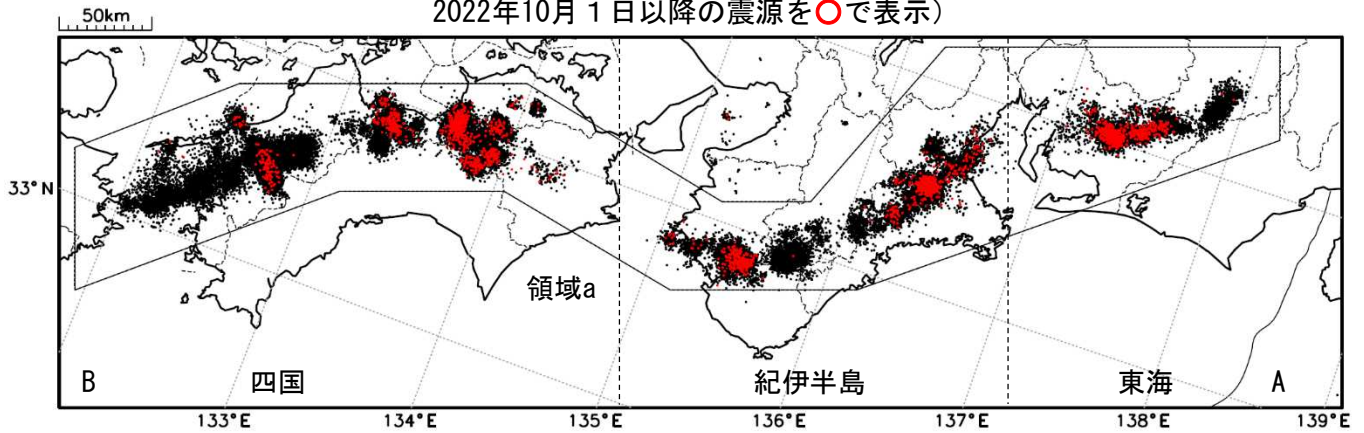
活動場所		深部低周波地震(微動)活動の期間	短期的ゆっくりすべりの期間と規模
(1)	紀伊半島西部	9月28日～10月3日	(1-1) 9月30日12時～10月1日24時 : Mw5.6
(2)	紀伊半島北部	9月30日～10月5日	(2-1) 10月2日00時～10月3日12時 : Mw5.7 (2-2) 10月3日12時～10月4日24時 : Mw5.4
(3)	東海	10月14日～10月26日	(3-1) 10月11日12時～10月15日24時 : Mw5.7 (3-2) 10月16日00時～10月18日24時 : Mw5.7 (3-3) 10月19日00時～10月23日12時 : Mw5.9
(4)	四国東部	10月16日～10月23日	(4-1) 10月18日00時～10月20日24時 : Mw5.5 (4-2) 10月21日00時～10月23日24時 : Mw5.5

●: 深部低周波地震(微動) 震央(気象庁の解析結果を示す) 期間(気象庁及び防災科学技術研究所の解析結果を示す)  
 □: 短期的ゆっくりすべりの断層モデル(東海: 気象庁の解析結果を示す。  
 紀伊半島北部、紀伊半島西部、四国東部: 産業技術総合研究所の解析結果を示す。)  
 点線は、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるフィリピン海プレート上面の深さ(10kmごとの等深線)を示す。

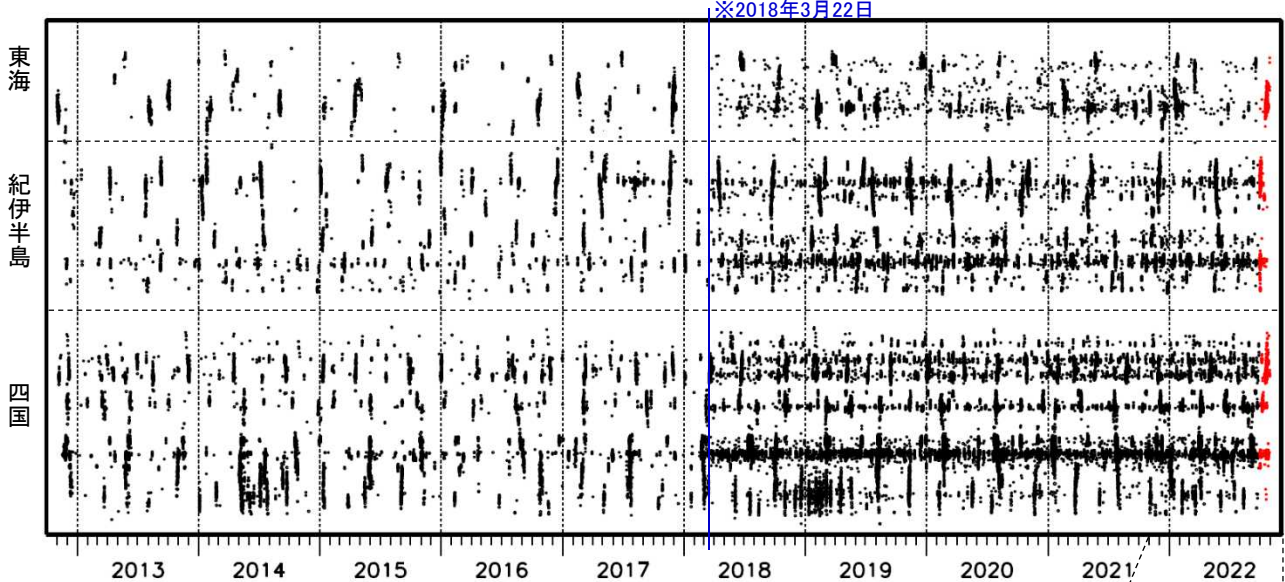
# 深部低周波地震（微動）活動（2012年11月1日～2022年10月31日）

深部低周波地震（微動）は、「短期的ゆっくりすべり」に密接に関連する現象とみられており、プレート境界の状態の変化を監視するために、その活動を監視している。

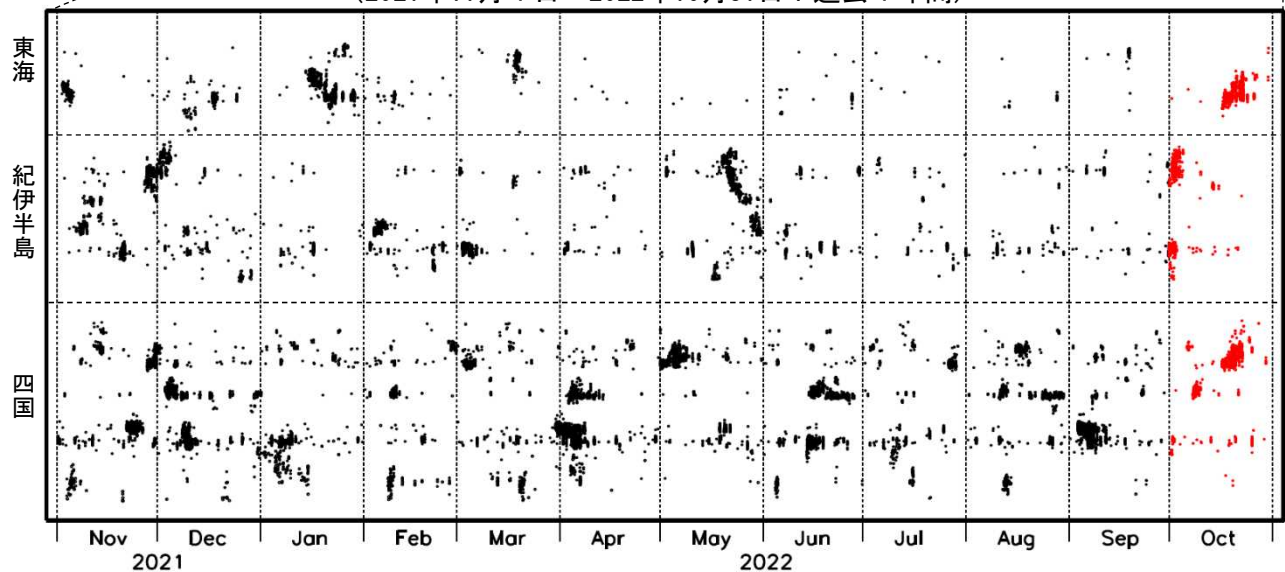
震央分布図（2012年11月1日～2022年10月31日：過去10年間  
2022年10月1日以降の震源を○で表示）



上図領域a内の時空間分布図（A-B投影）



（2021年11月1日～2022年10月31日：過去1年間）



※2018年3月22日から、深部低周波地震（微動）の処理方法の変更（Matched Filter法の導入）により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

(2022年10月)

- 9月30日～10月5日頃に紀伊半島北部において、やや活発な微動活動.
- 10月14～26日頃に東海地方において、活発な微動活動.

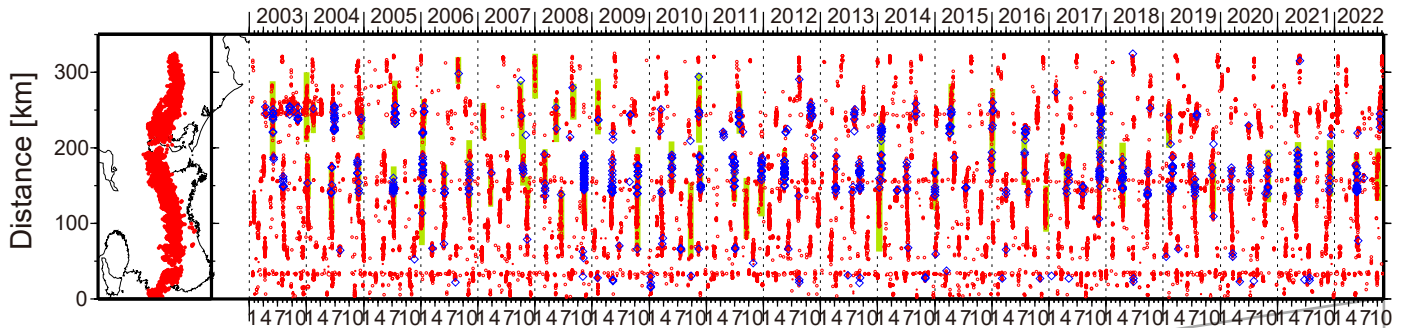
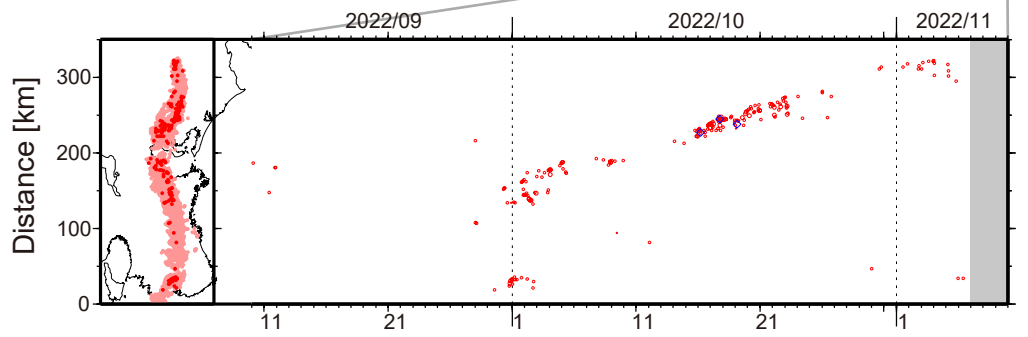


図1. 紀伊半島・東海地域における2003年1月～2022年11月6日までの深部低周波微動の時空間分布(上図). 赤丸はエンベロープ相関・振幅ハイブリッド法 (Maeda and Obara, 2009) およびクラスタ処理 (Obara et al., 2010) によって1時間毎に自動処理された微動分布の重心である. 青菱形は周期20秒に卓越する超低周波地震 (Ito et al., 2007) である. 黄緑色の太線はこれまでに検出された短期的スロースリップイベント (SSE) を示す. 下図は2022年10月を中心とした期間の拡大図である.



9月30日～10月5日頃には、三重県中部から北部においてやや活発な微動活動がみられ、北東方向への活動域の移動がみられた。この活動に際し、傾斜変動から短期的SSEの断層モデルも推定されている。10月14～26日頃には、愛知県西部から愛知・長野県境付近において活発な微動活動がみられた。この活動では東方向への活動域の移動が23日頃までみられた。9月30日～10月2日頃には和歌山県中部において、10月7～9日頃には三重県北部において、11月1～5日頃には長野県南部において、それぞれ小規模な活動がみられた。

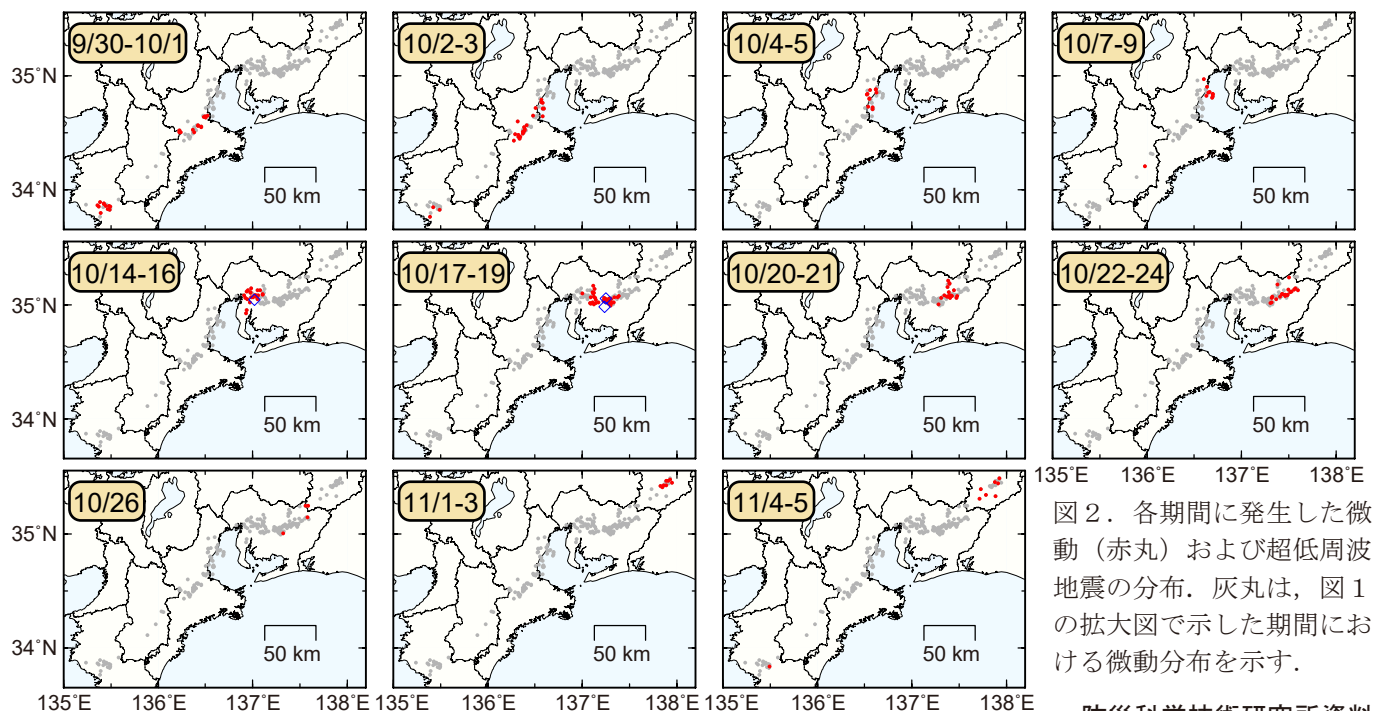


図2. 各期間に発生した微動(赤丸)および超低周波地震の分布. 灰丸は、図1の拡大図で示した期間における微動分布を示す.



# 東海の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

10月16日から24日にかけて、東海で深部低周波地震(微動)を観測した。

深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

## 深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2018年4月1日~2022年10月31日、

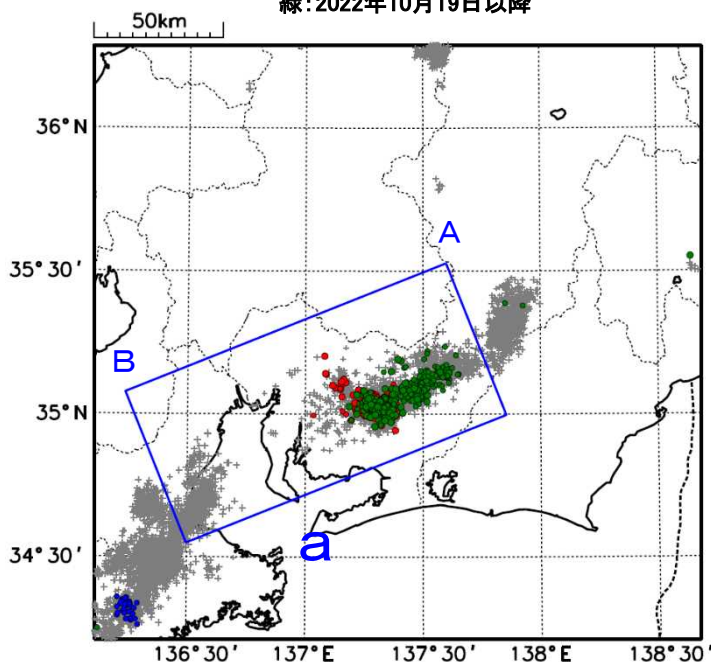
深さ0~60km、Mすべて)

灰: 2018年4月1日~2022年10月10日、

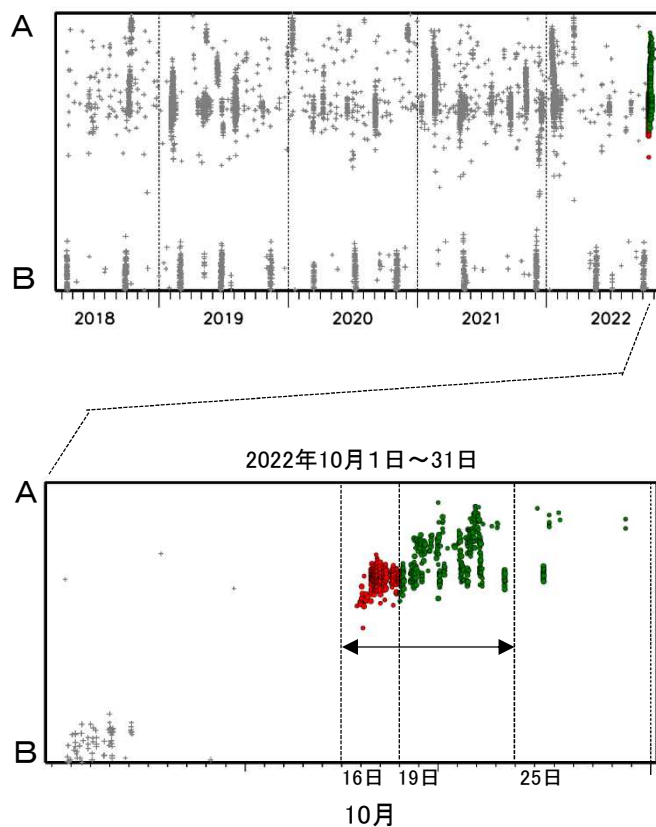
青: 2022年10月11日~15日

赤: 2022年10月16日~18日

緑: 2022年10月19日以降



領域a内の時空間分布図(A-B投影)

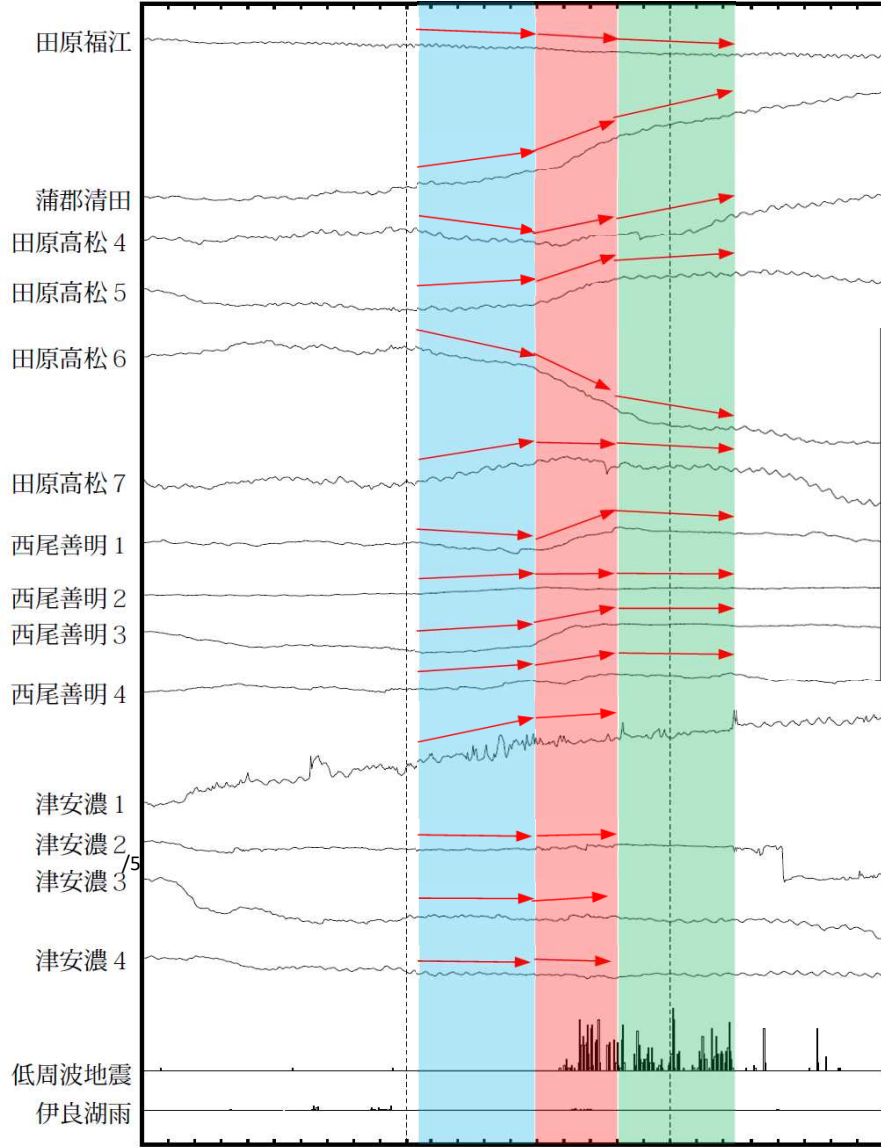


# 東海で観測した短期的ゆっくりすべり(10月11日～23日)

静岡県から三重県で観測されたひずみ変化

2022/10/01.00:00 ~ 2022/10/29.00:00

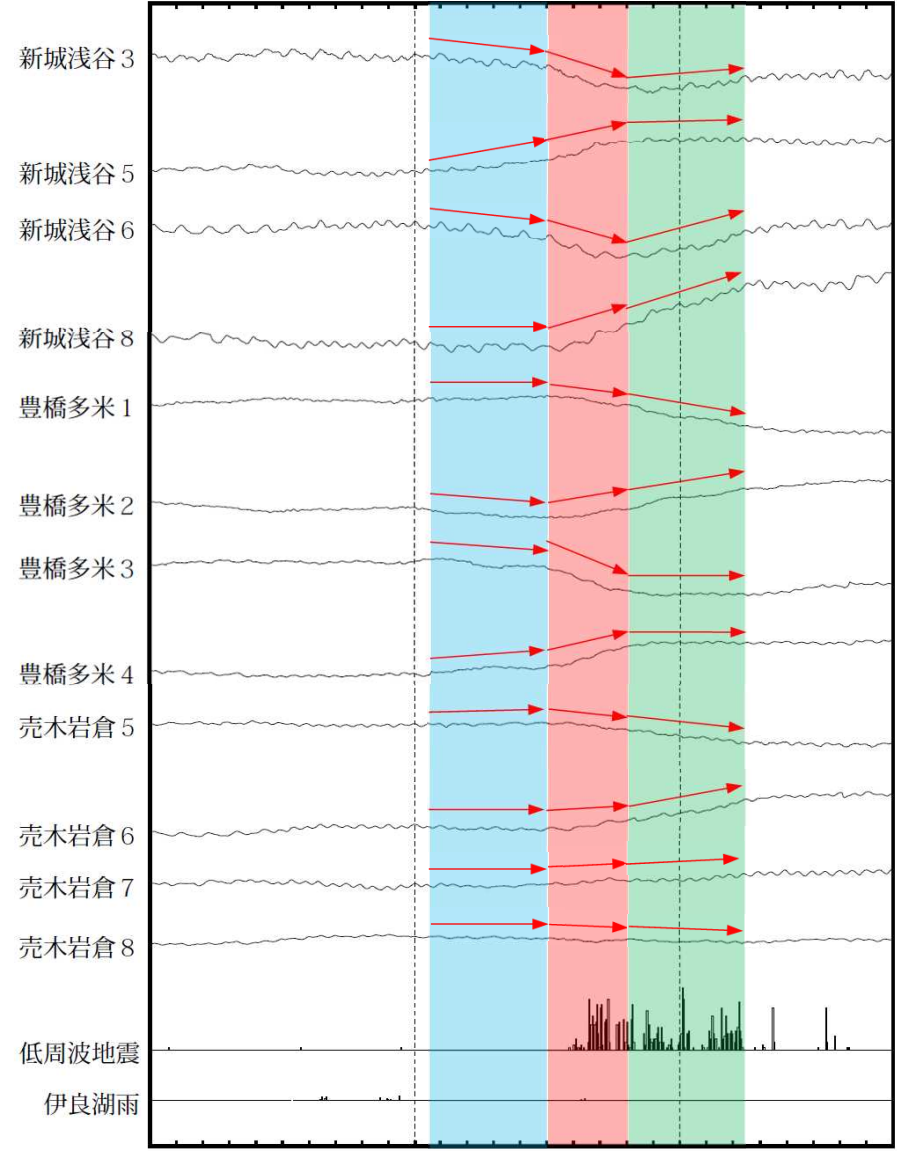
↑ 100 nstrain  
20 count/Hour  
50 mm/Hour



10/11 ← すべり推定期間 → 10/21

2022/10/01.00:00 ~ 2022/10/29.00:00

↑ 100 nstrain  
20 count/Hour  
50 mm/Hour

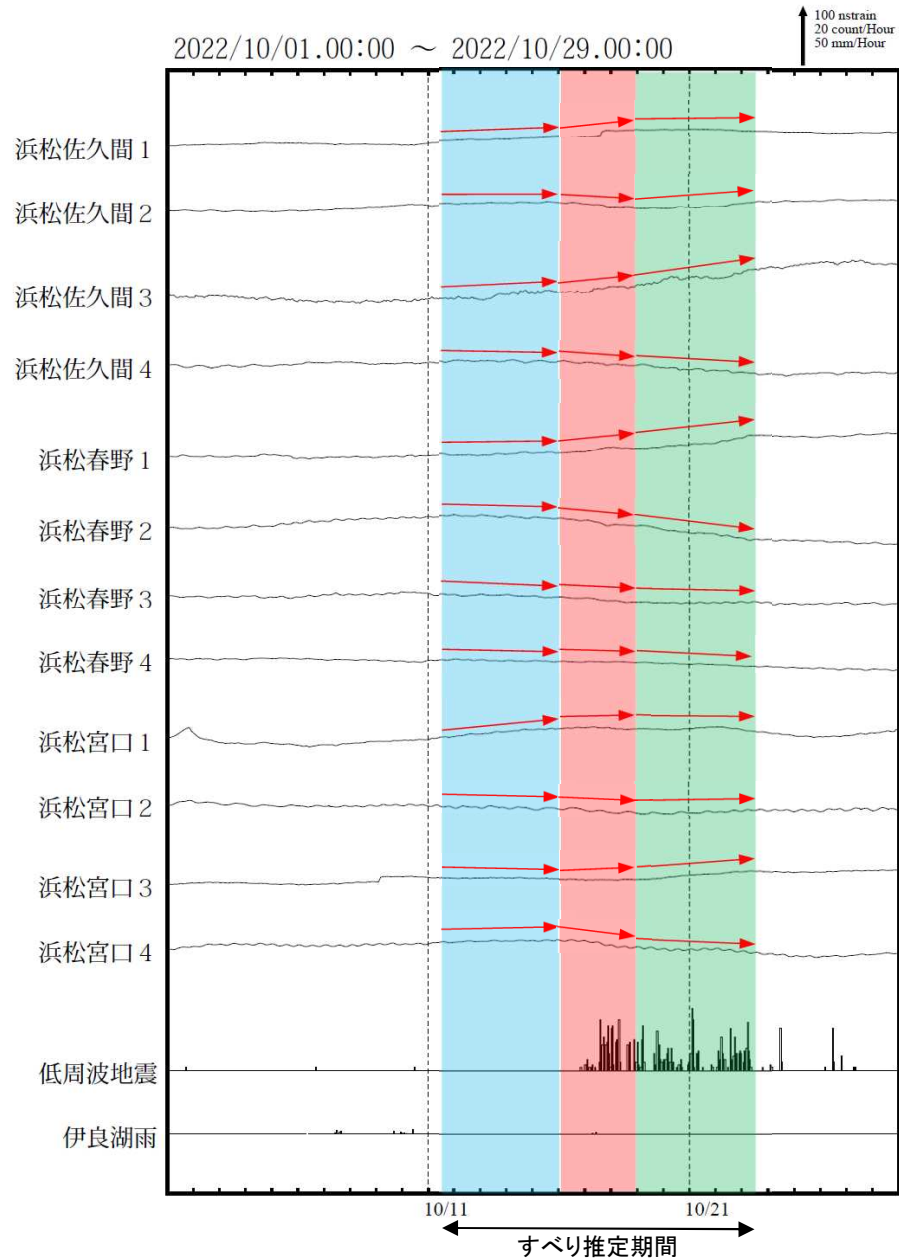


10/11 ← すべり推定期間 → 10/21

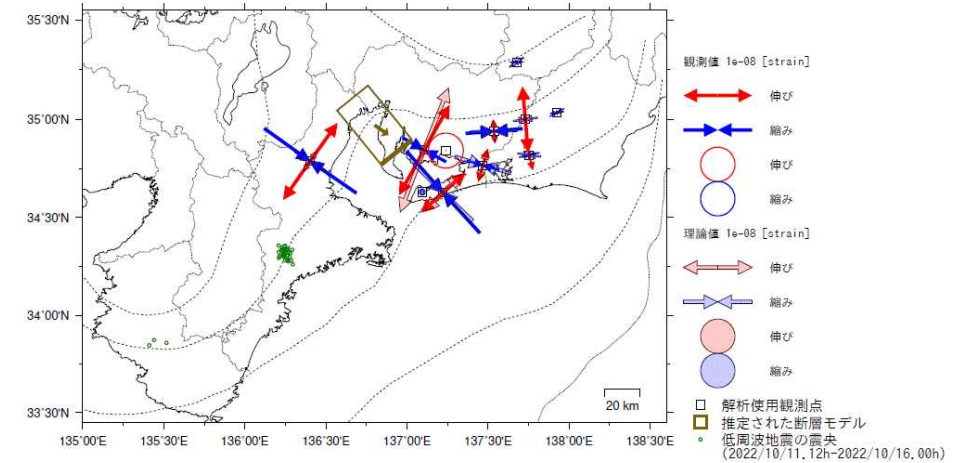
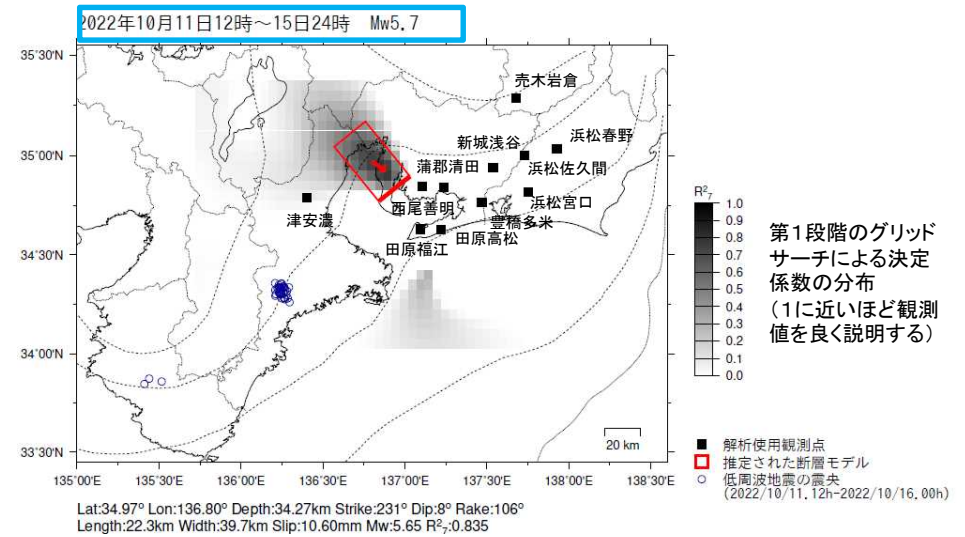
西尾善明、津安濃及び豊橋多米は産業技術総合研究所のひずみ計である。

気象庁作成

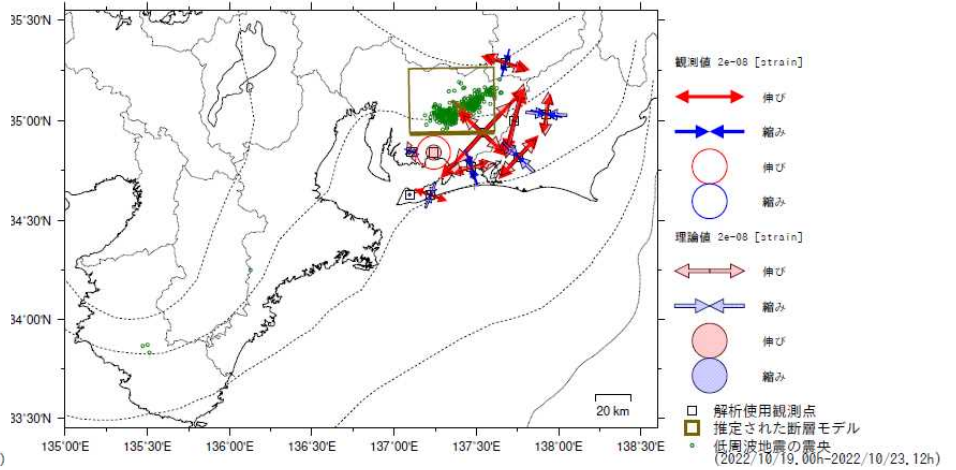
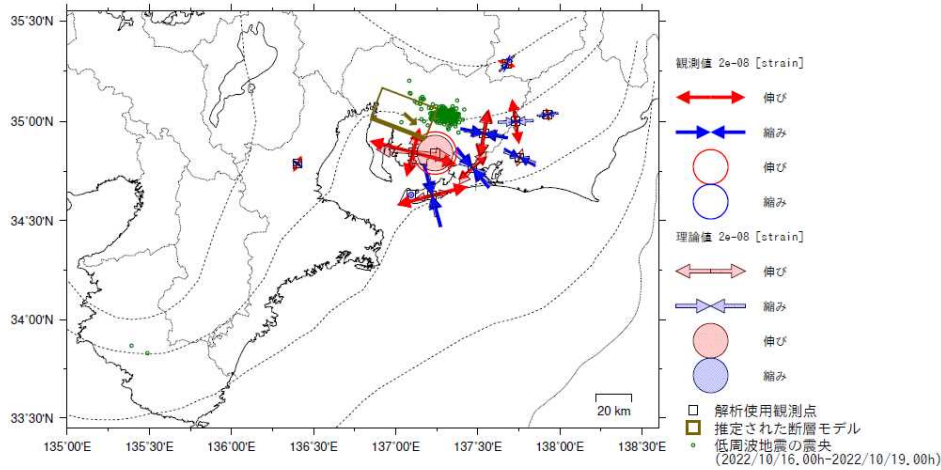
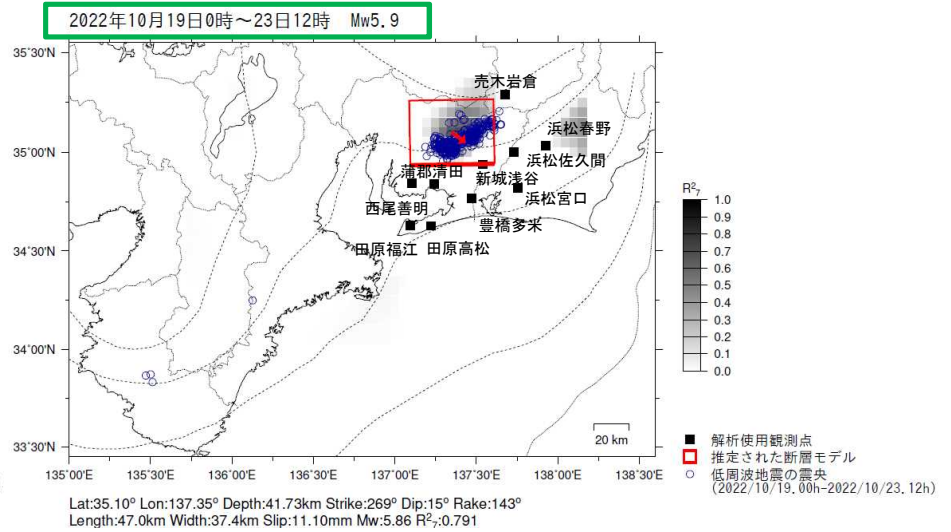
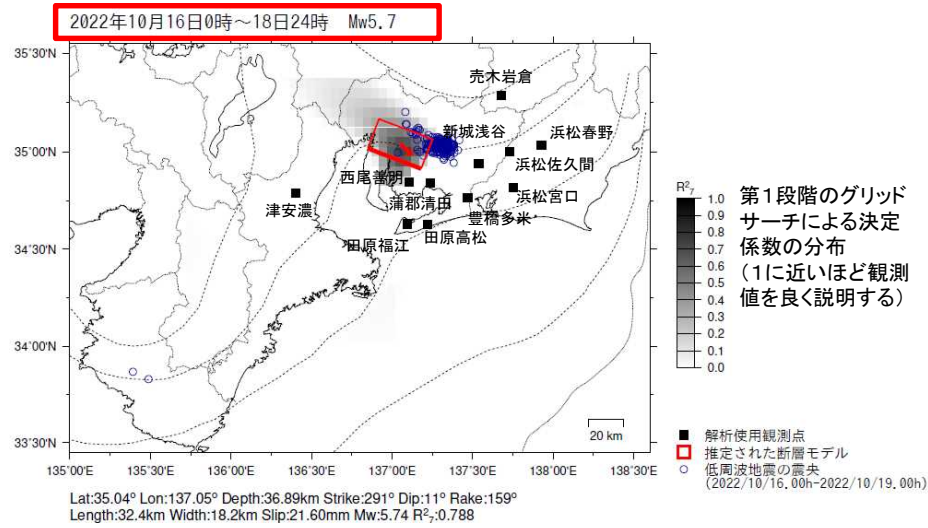
# 東海で観測した短期的ゆっくりすべり(10月11日～23日)



浜松春野は静岡県のひずみ計である。



# 東海で観測した短期的ゆっくりすべり(10月11日～23日)



前図に観測されたひずみ観測点での変化量を元にすべり推定を行ったところ、図の場所にすべり域が求まった。

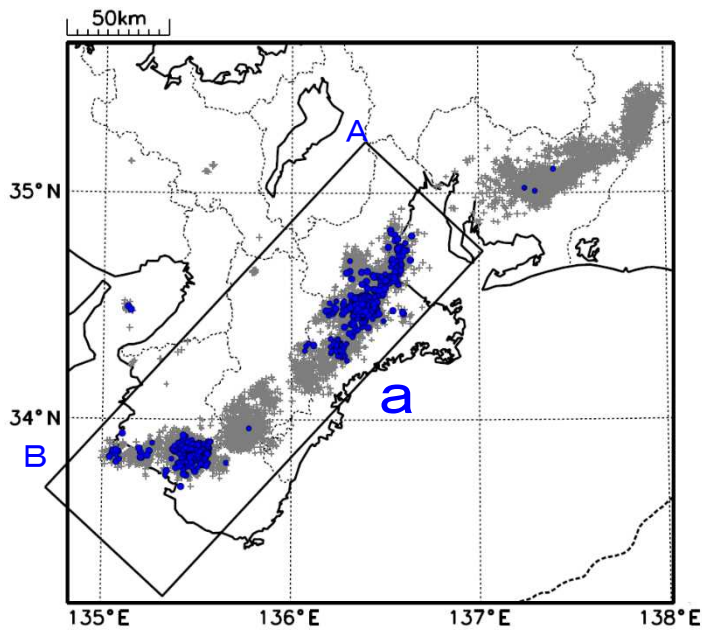
断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。  
 ・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。  
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

# 紀伊半島北部及び紀伊半島西部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

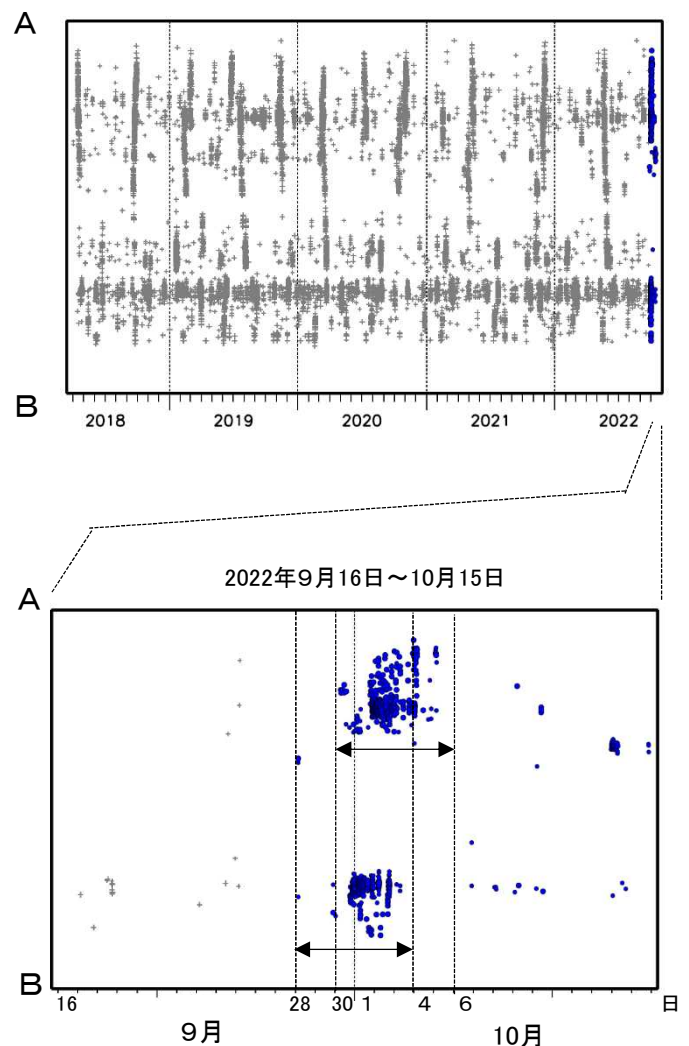
9月28日から10月3日にかけて、紀伊半島西部で深部低周波地震(微動)を観測した。  
また、9月30日から10月5日にかけて、紀伊半島北部で深部低周波地震(微動)を観測した。  
これらの深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

## 深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2018年4月1日~2022年10月15日、  
深さ0~60km、Mすべて)  
灰: 2018年4月1日~2022年9月27日、  
青: 2022年9月28日以降



領域a内の時空間分布図(A-B投影)



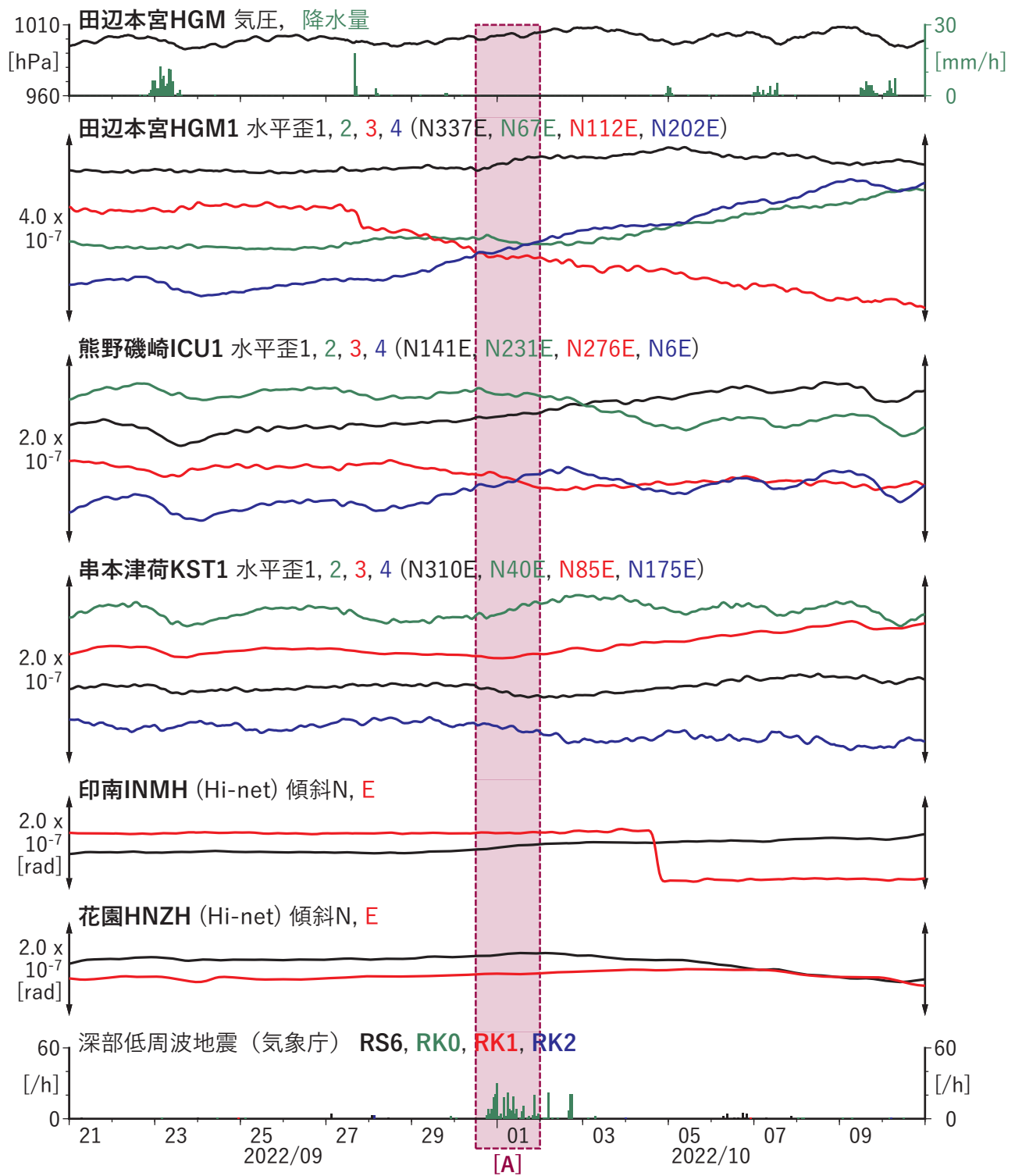
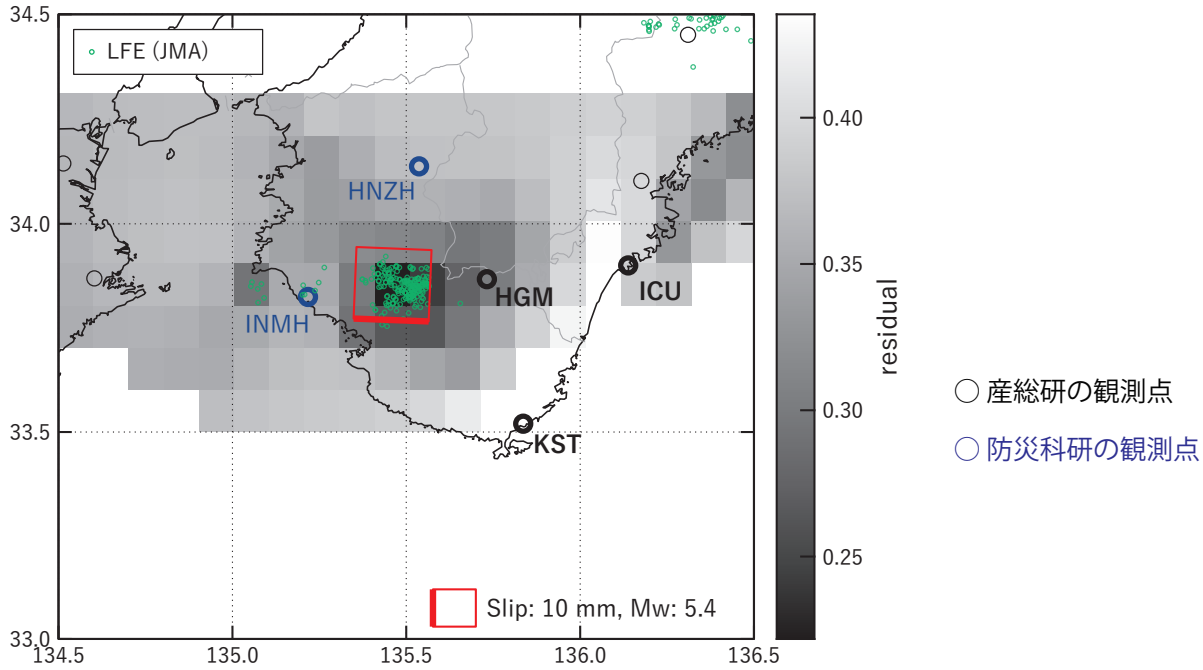


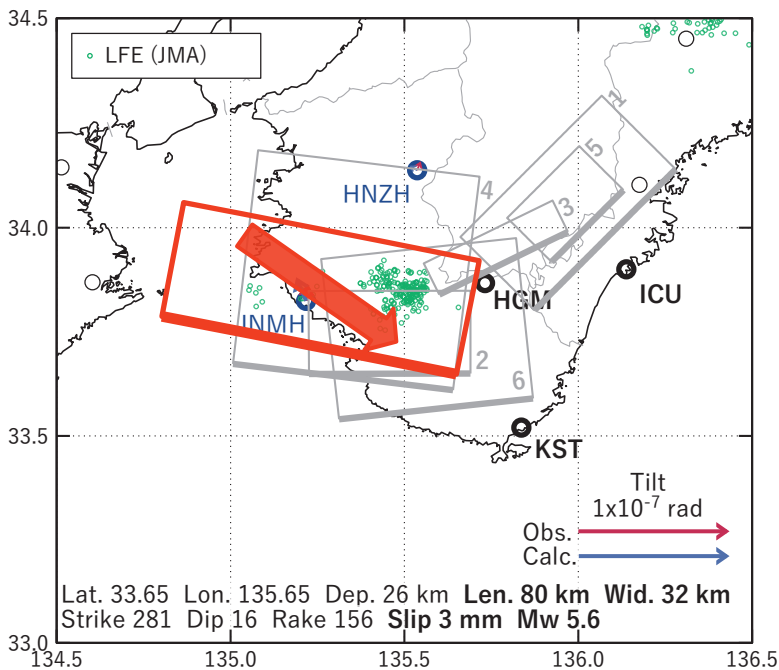
図2 紀伊半島における歪・傾斜の時間変化 (2022/09/21 00:00 - 2022/10/11 00:00 (JST))

[A] 2022/09/30PM-10/01

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

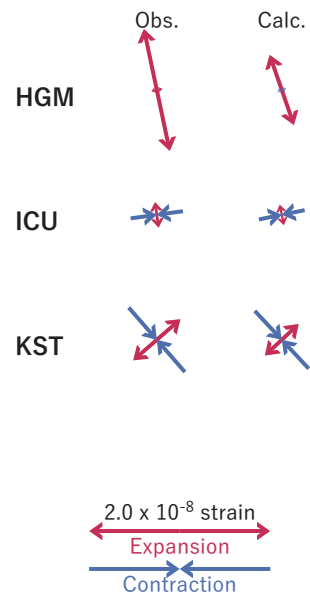


図3 2022/09/30PM - 10/01 の歪・傾斜変化 (図2 [A]) を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って分布させた20×20kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小とするすべり量を選んだ時の残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

1: 2022/05/28-30 (Mw5.8), 2: 2022/03/02-05 (Mw5.4), 3: 2022/02/04-07AM (Mw5.6),

4: 2021/11/19PM-21AM (Mw5.6), 5: 2021/11/07PM-11 (Mw5.4), 6: 2021/03/16PM-17AM (Mw5.4)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

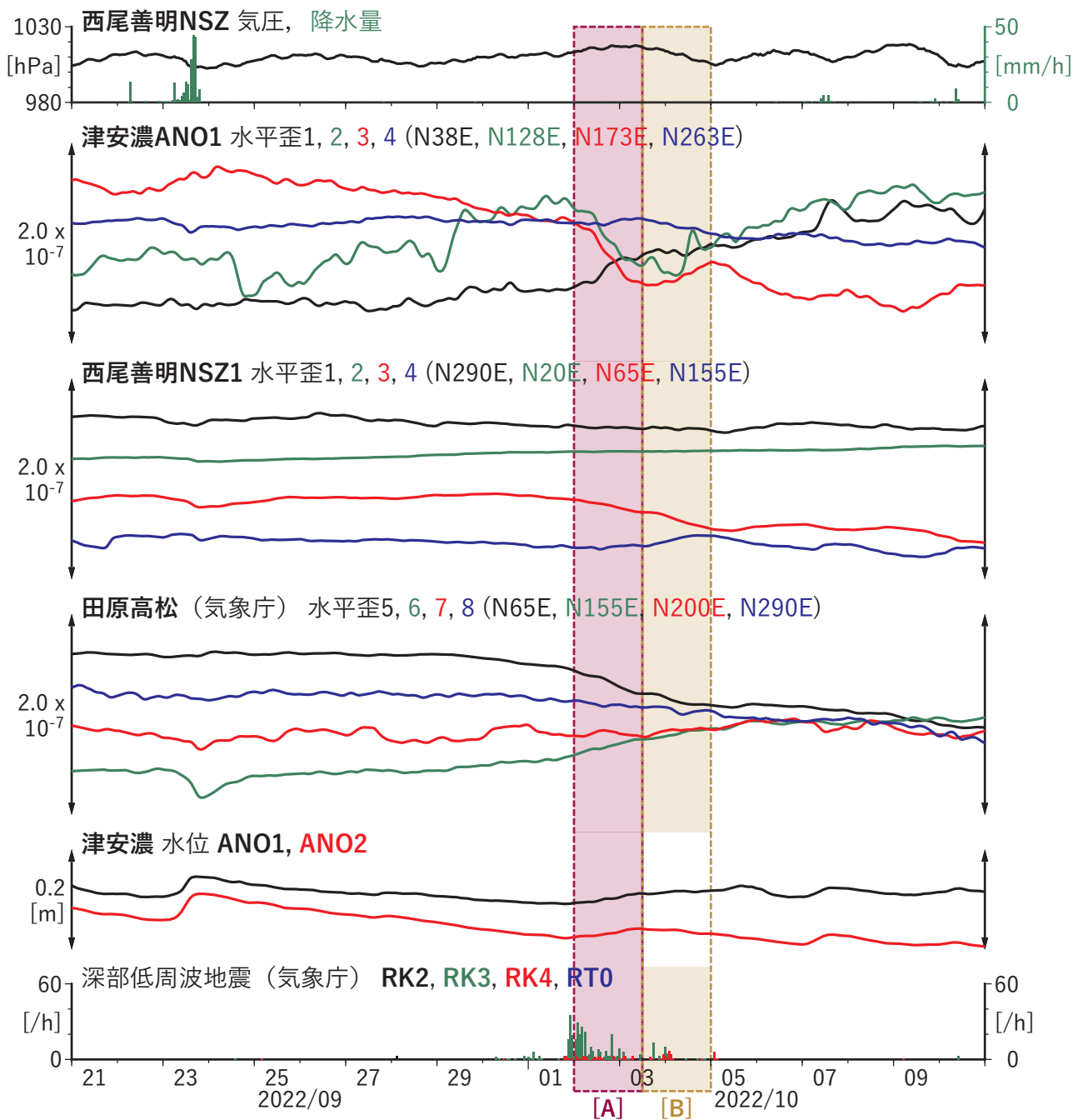


図5 紀伊半島から東海地方における歪・傾斜の時間変化 (1)  
(2022/09/21 00:00 - 2022/10/11 00:00 (JST))



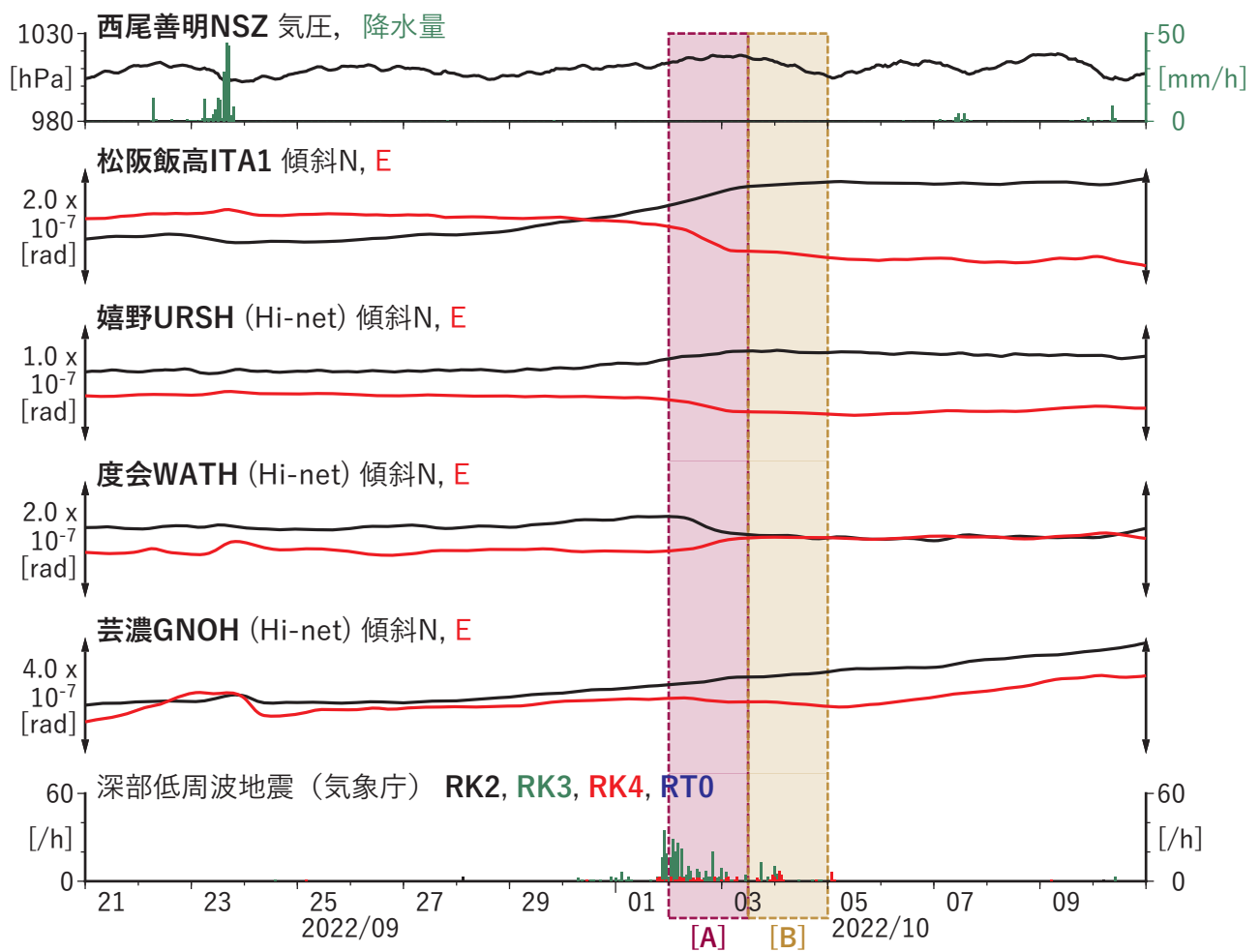
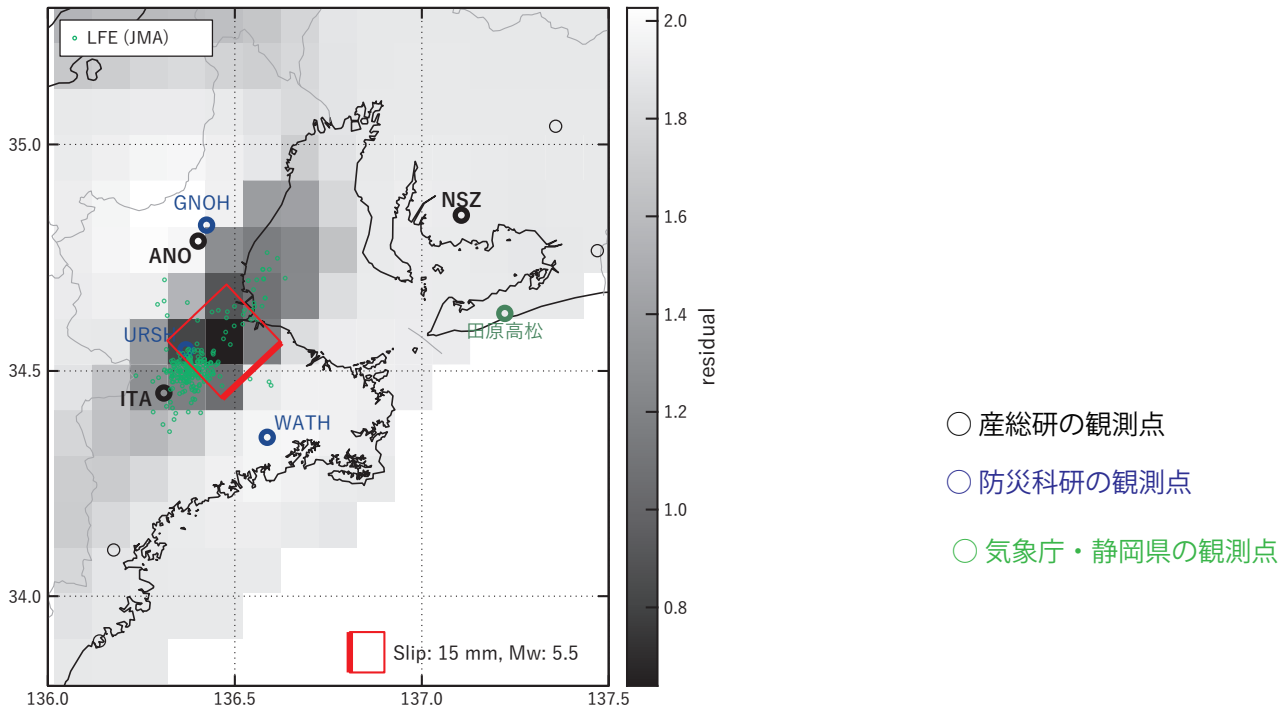


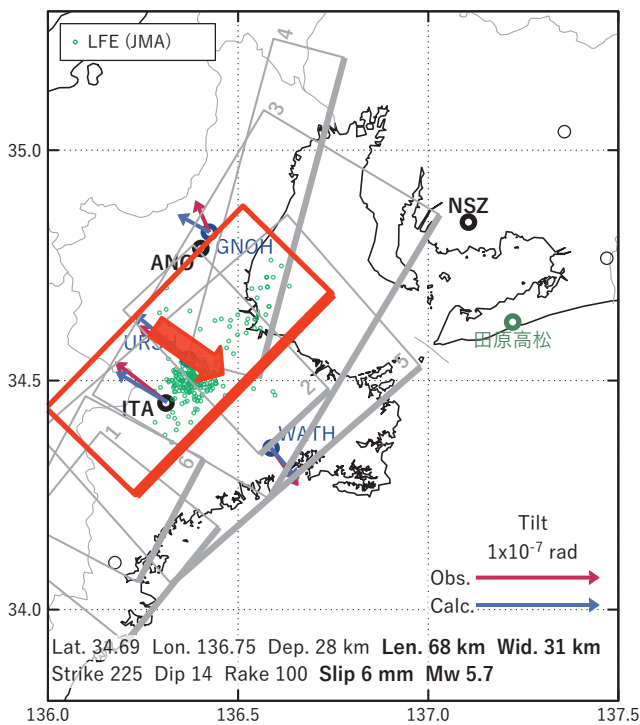
図6 紀伊半島から東海地方における歪・傾斜の時間変化 (2)  
 (2022/09/21 00:00 - 2022/10/11 00:00 (JST))

[A] 2022/10/02-03AM

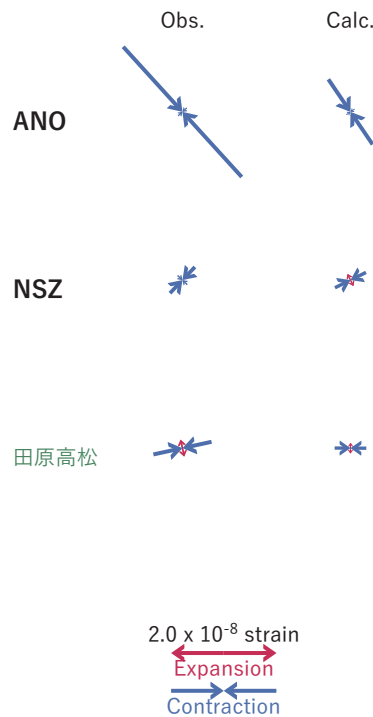
(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪



(b3) 体積歪

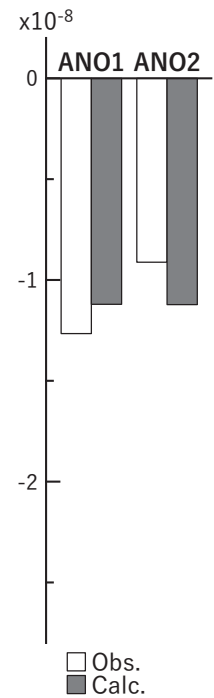


図7 2022/10/02 - 03AM の歪・傾斜変化 (図5, 6 [A]) を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って分布させた20×20kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小とするすべり量を選んだ時の残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

1: 2022/05/22PM-27 (Mw5.9), 2: 2022/05/20-22AM (Mw5.8), 3: 2021/12/03-04 (Mw5.8),

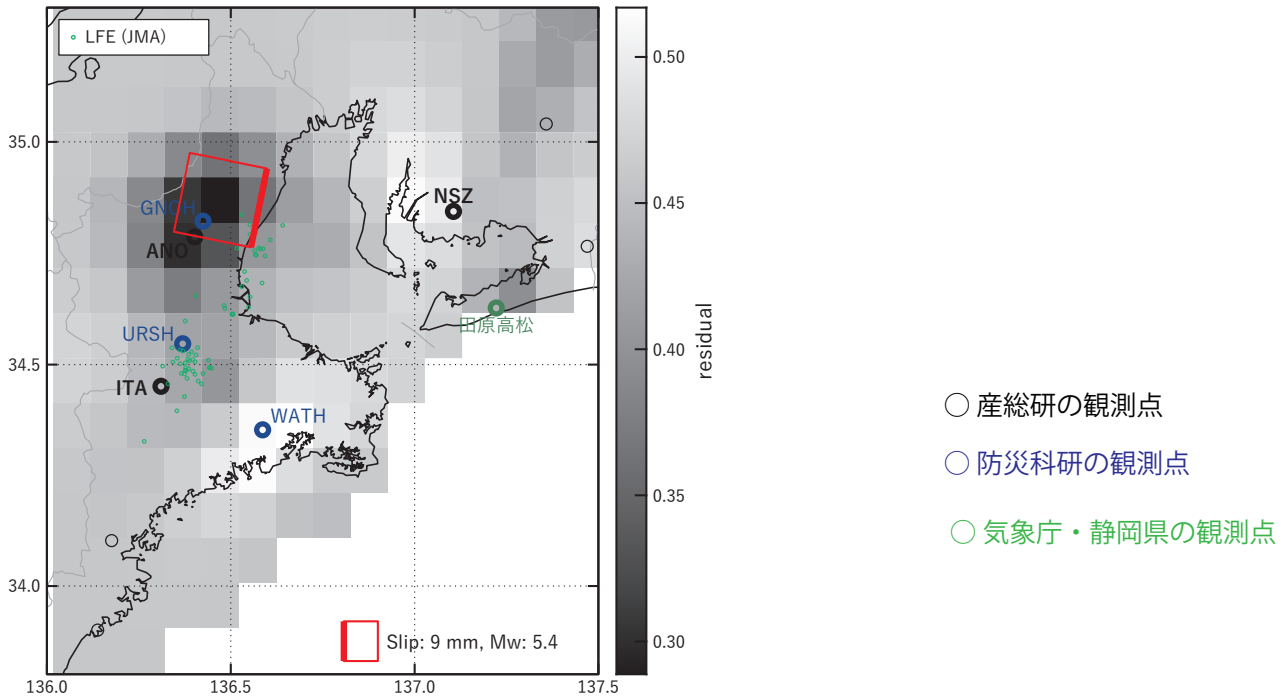
4: 2021/12/01-02 (Mw5.7), 5: 2021/11/27-30 (Mw5.9), 6: 2021/04/29PM-05/02 (Mw5.7)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

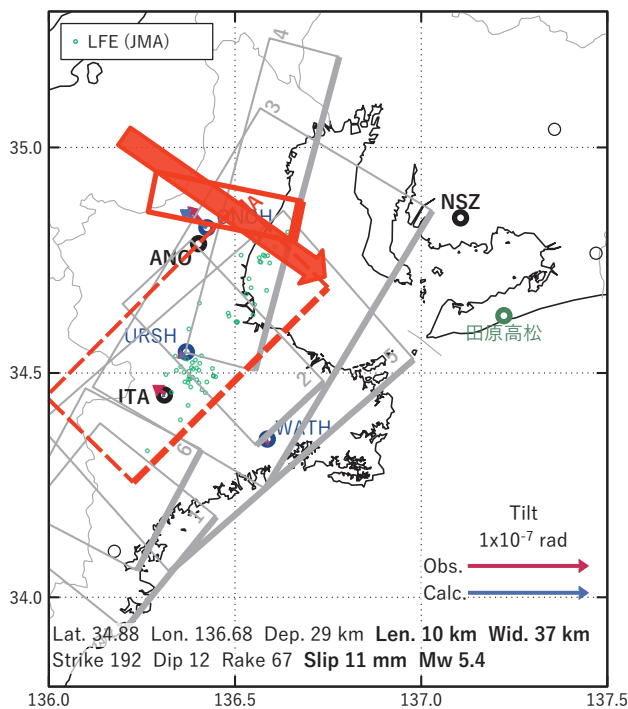
(b3) 体積歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

[B] 2022/10/03PM-04

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

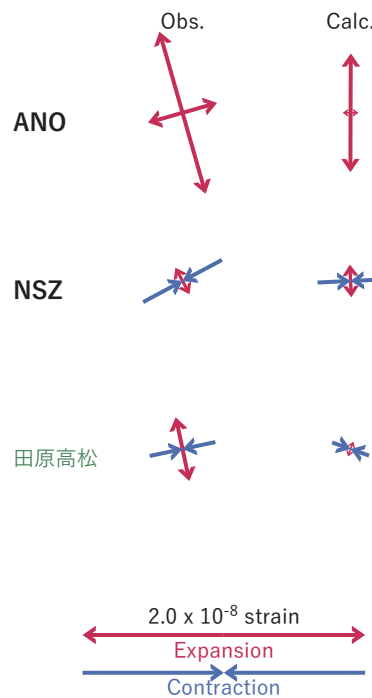


図8 2022/10/03PM-04 の歪・傾斜変化 (図5, 6 [B]) を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って分布させた20×20kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小とするすべり量を選んだ時の残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

1: 2022/05/22PM-27 (Mw5.9), 2: 2022/05/20-22AM (Mw5.8), 3: 2021/12/03-04 (Mw5.8),

4: 2021/12/01-02 (Mw5.7), 5: 2021/11/27-30 (Mw5.9), 6: 2021/04/29PM-05/02 (Mw5.7)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

# 紀伊半島北部の短期的スロースリップ活動状況 (2022年9~10月)

・紀伊半島北部を活動域とする短期的スロースリップイベント ( $M_w$  6.0)  
 ・2022年5月 ( $M_w$  6.0) 以来約4ヶ月ぶり

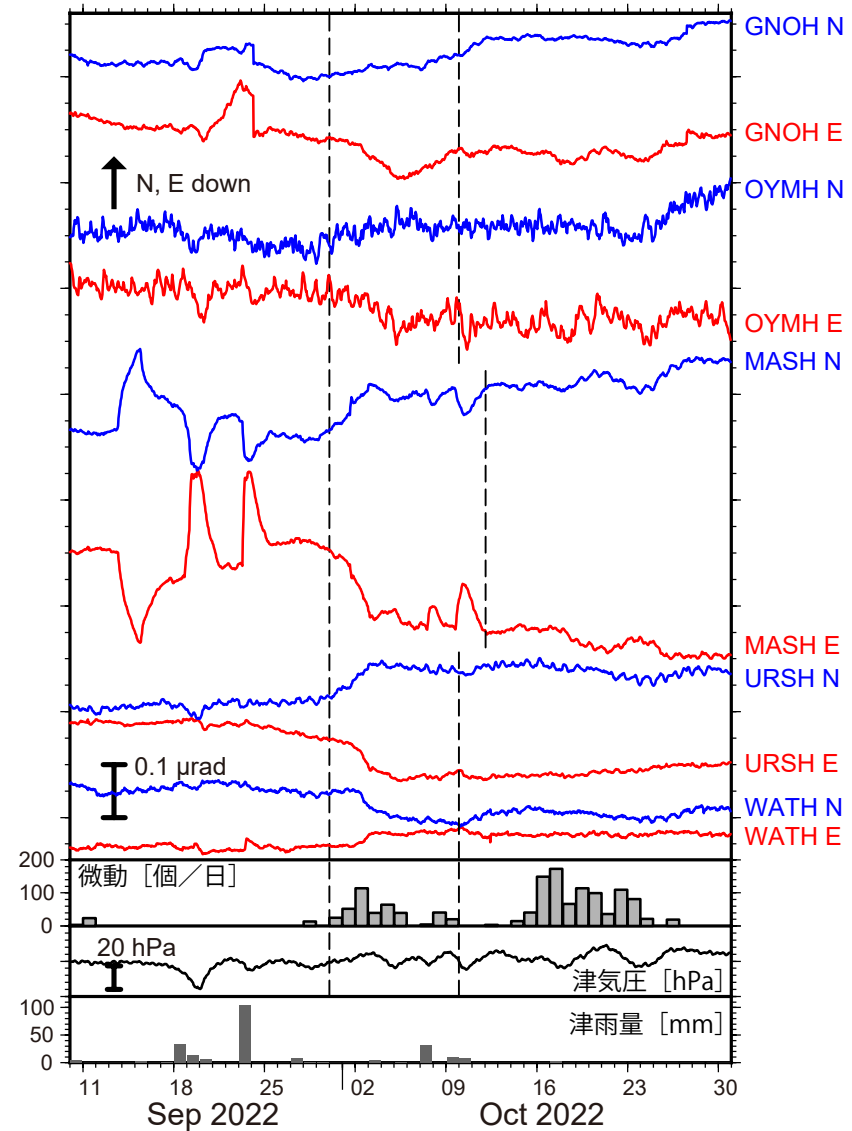


図1: 2022年9月10日~10月30日の傾斜時系列. 上方向への変化が北・東下がり傾斜変動を表し, BAYTAP-Gにより潮汐・気圧応答成分を除去した. 9月30日~10月9日 (MASHのみ10月11日)の傾斜変化ベクトルを図2に示す. 紀伊半島~愛知県での微動活動度・気象庁津観測点の気圧・雨量をあわせて示す.

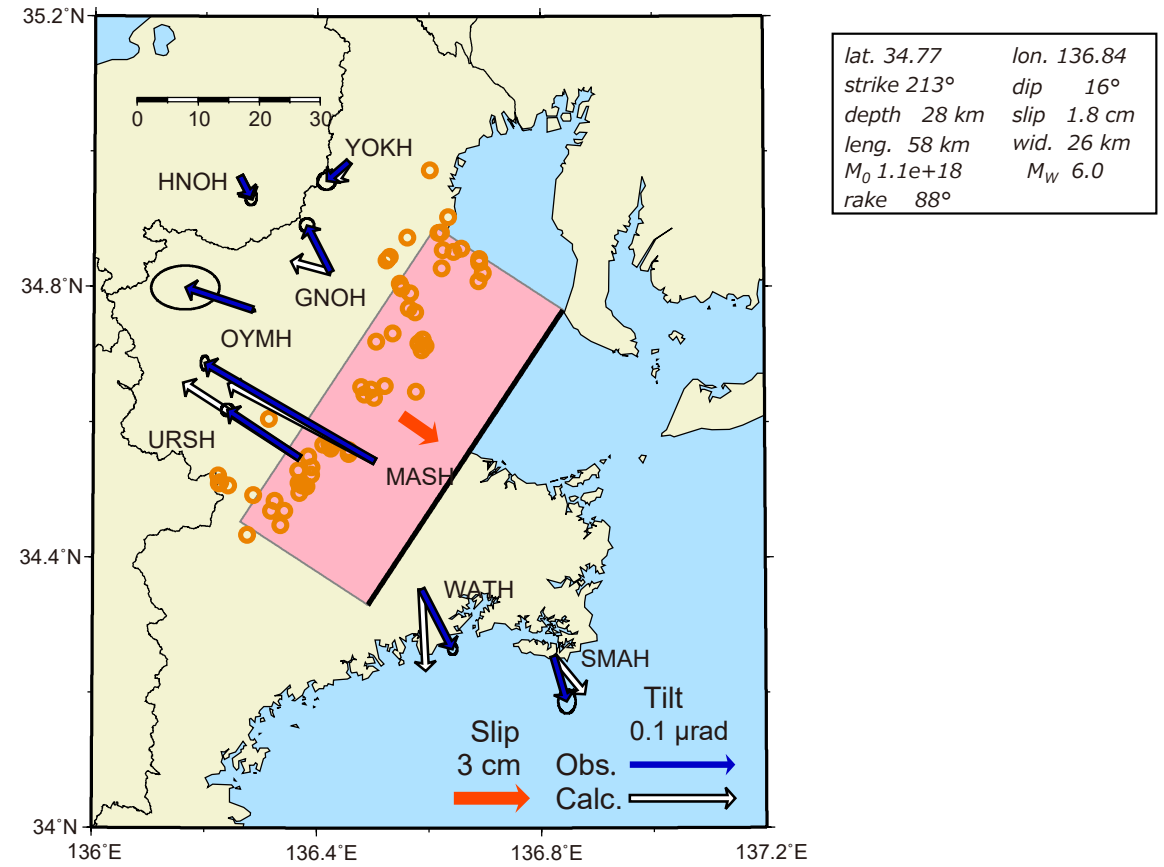


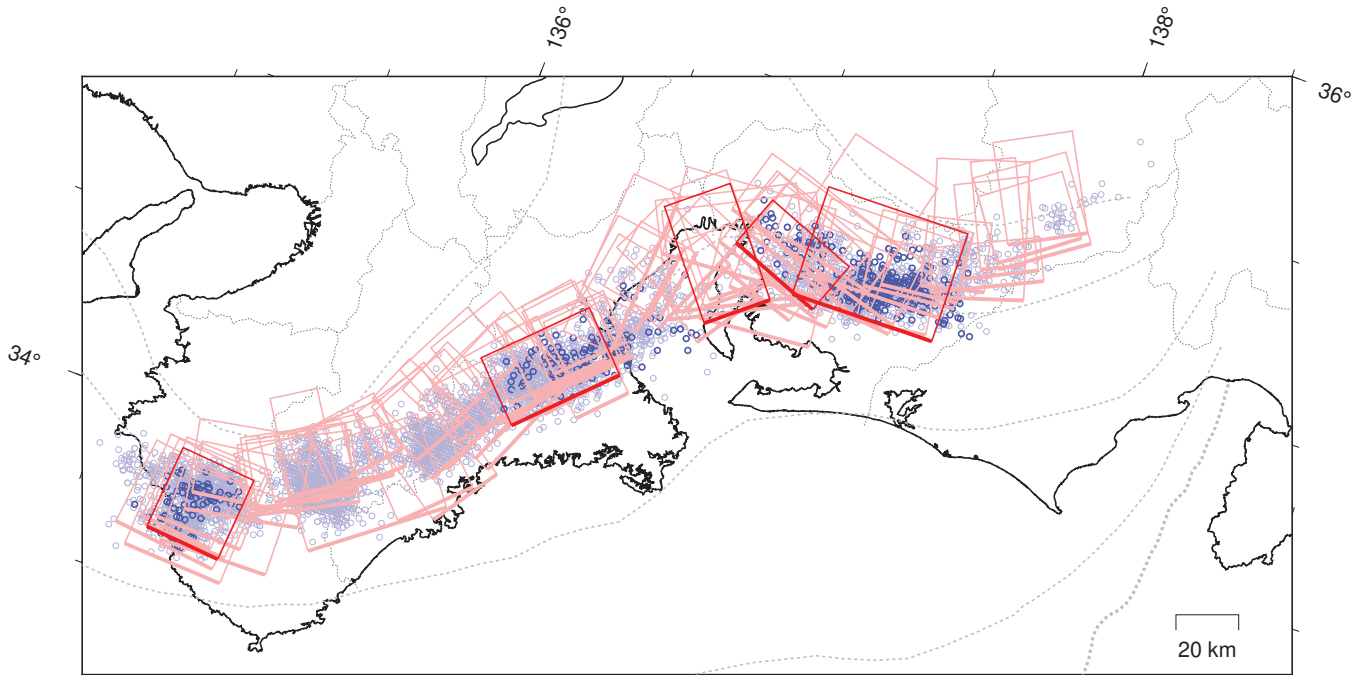
図2: 9月30日~10月9日 (MASHのみ10月11日)に観測された傾斜変化ベクトル (青矢印), 推定されたスロースリップイベントの断層モデル (赤矩形・矢印), モデルから計算される傾斜変化ベクトル (白抜き矢印)を示す. 1時間ごとの微動エネルギーの重心位置 (橙丸)もあわせて示す. すべり角はプレート相対運動方向に固定している.

謝辞  
 気象庁のWEBページで公開されている気象データを使用させて頂きました. 記して感謝いたします.

# 東海～紀伊半島 短期的ゆっくりすべりの活動状況

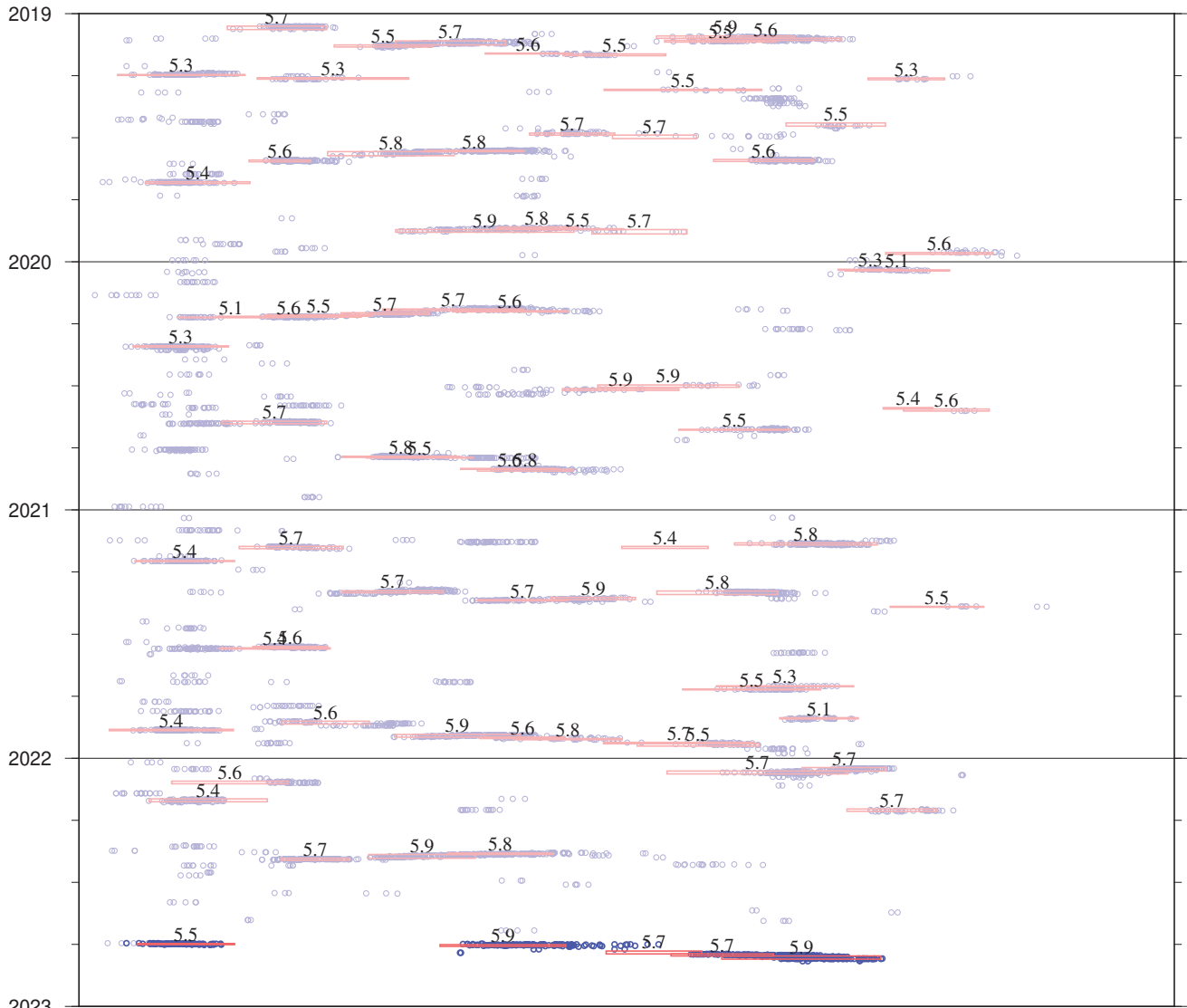
2019年1月1日～2022年10月31日

(2022年9月30日以降を濃く表示)



※破線は、フィリピン海プレート上面の等深線を示す。  
 ※赤矩形は、気象庁による短期的ゆっくりすべりの断層モデル（参考解を含む）を示す。

## 上図の時空間分布図



※短期的ゆっくりすべりの解析には、気象庁、産業技術総合研究所及び静岡県データのデータを用いている。

※赤矩形の上に表示されている数字は解析されたMwを示す。

※青丸はエンベロープ相関法（防災科学技術研究所、東京大学地震研究所との共同研究による成果）で得られた低周波微動の震央を示す。

気象庁作成

● 10月16～23日頃に四国東部において、活発な微動活動。

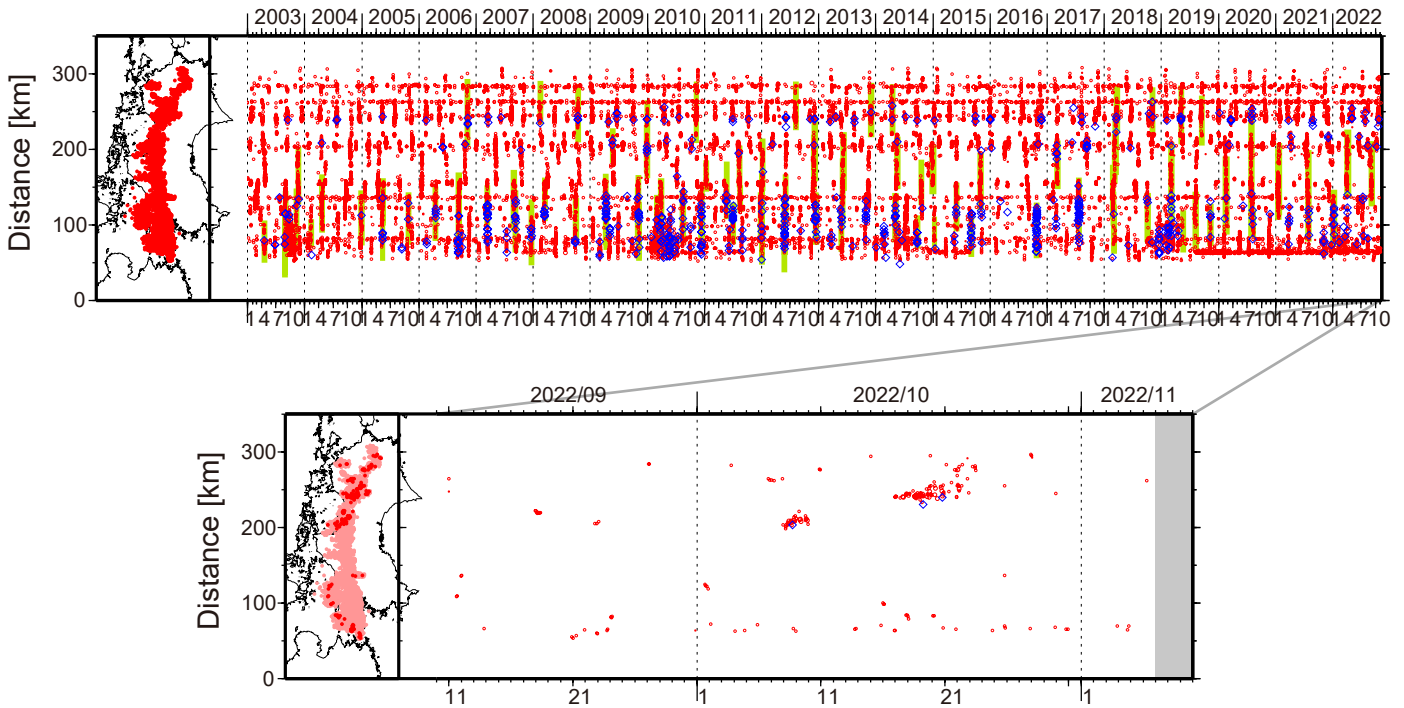


図1. 四国における2003年1月～2022年11月6日までの深部低周波微動の時空間分布(上図). 赤丸はエンベロープ相関・振幅ハイブリッド法 (Maeda and Obara, 2009) およびクラスタ処理 (Obara et al., 2010) によって1時間毎に自動処理された微動分布の重心である. 青菱形は周期20秒に卓越する超低周波地震 (Ito et al., 2007) である. 黄緑色太線は、これまでに検出された短期的スロースリップイベント (SSE) を示す. 下図は2022年10月を中心とした期間の拡大図である. 10月16～23日頃には愛媛・香川・徳島県境付近から徳島県東部において、活発な微動活動がみられた. この活動は愛媛・香川・徳島県境付近で開始し、東方向への活動域の拡大がみられた. 10月7～9日頃には愛媛県東部において、10月16～18日頃には愛媛県西部において、それぞれ小規模な活動がみられた. 10月1日頃および10月20日頃には愛媛県西部において、10月10日頃には徳島県中部において、10月27～28日頃には徳島県東部において、それぞれごく小規模な活動がみられた.

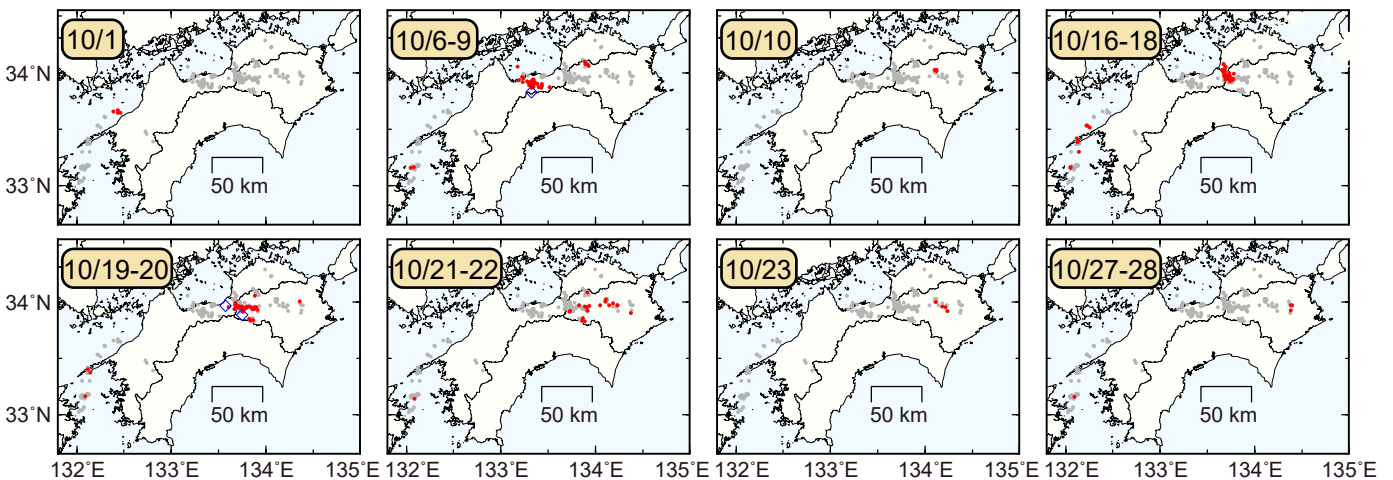


図2. 各期間に発生した微動 (赤丸), および深部超低周波地震 (青菱形) の分布. 灰丸は、図1の拡大図で示した期間における微動分布を示す.

# 四国東部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

10月16日から23日にかけて、四国東部で深部低周波地震(微動)を観測した。

深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されているひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

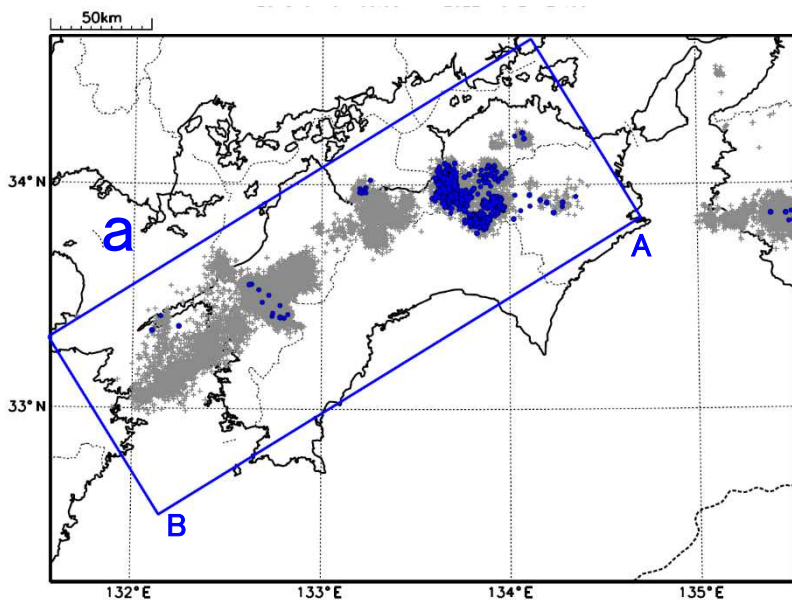
## 深部低周波地震(微動)活動

### 震央分布図

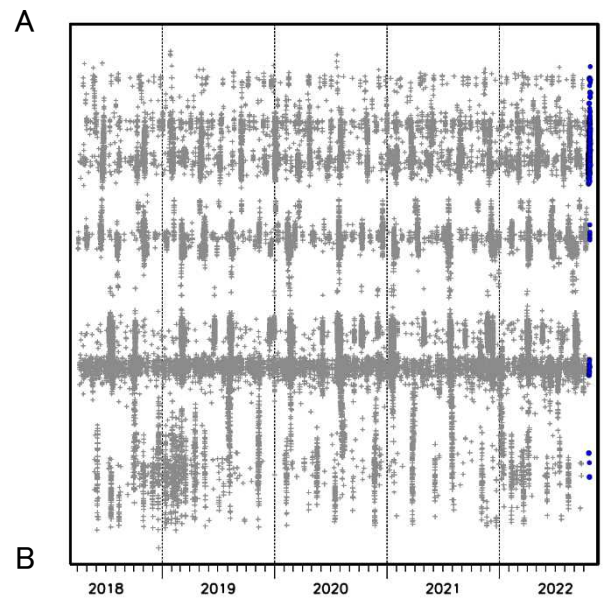
(2018年4月1日～2022年10月24日、深さ0～60km、Mすべて)

灰: 2018年4月1日～2022年10月15日、

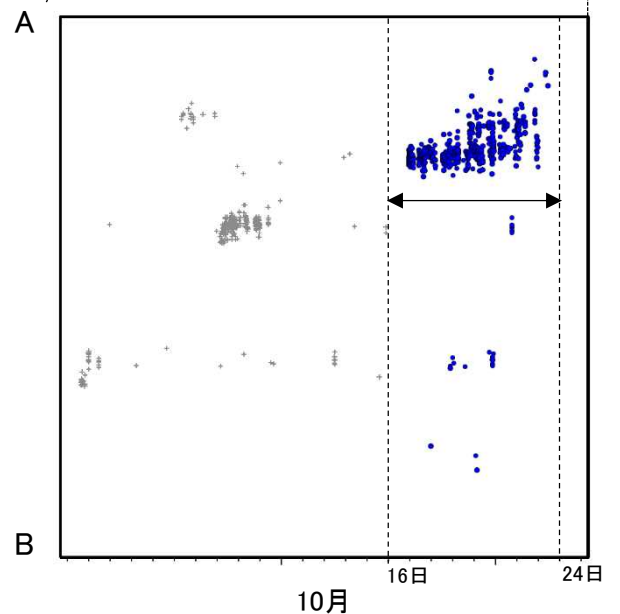
青: 2022年10月16日以降



### 領域a内の時空間分布図(A-B投影)



### 2022年10月1日～24日



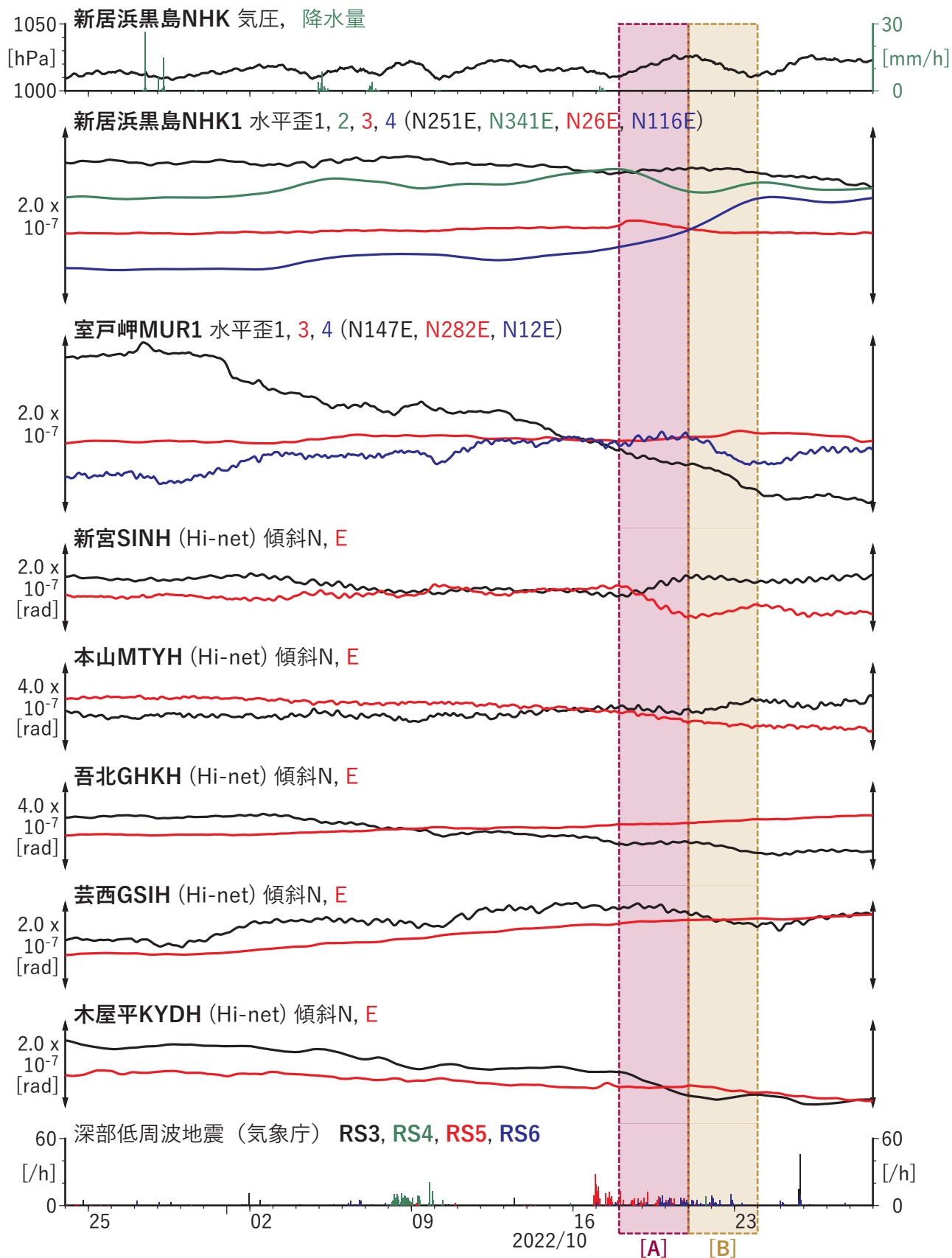
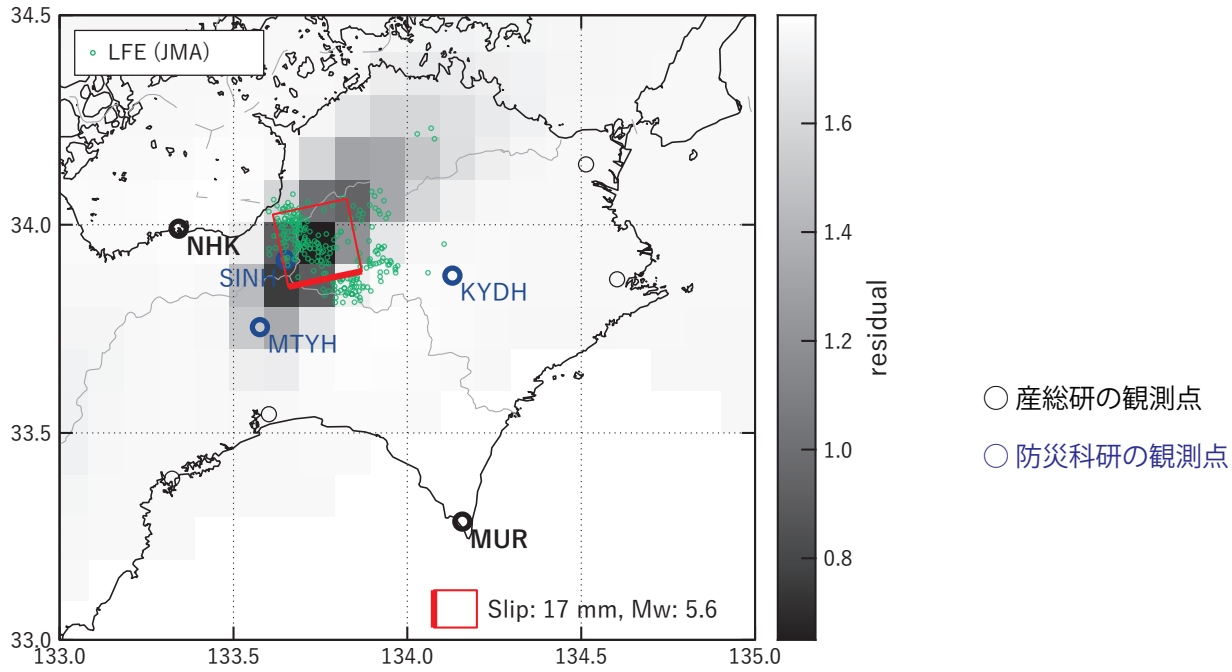


図17 四国地方における歪・傾斜の時間変化 (2022/09/24 00:00 - 2022/10/29 00:00 (JST))



[A] 2022/10/18-20

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル

(b2) 主歪

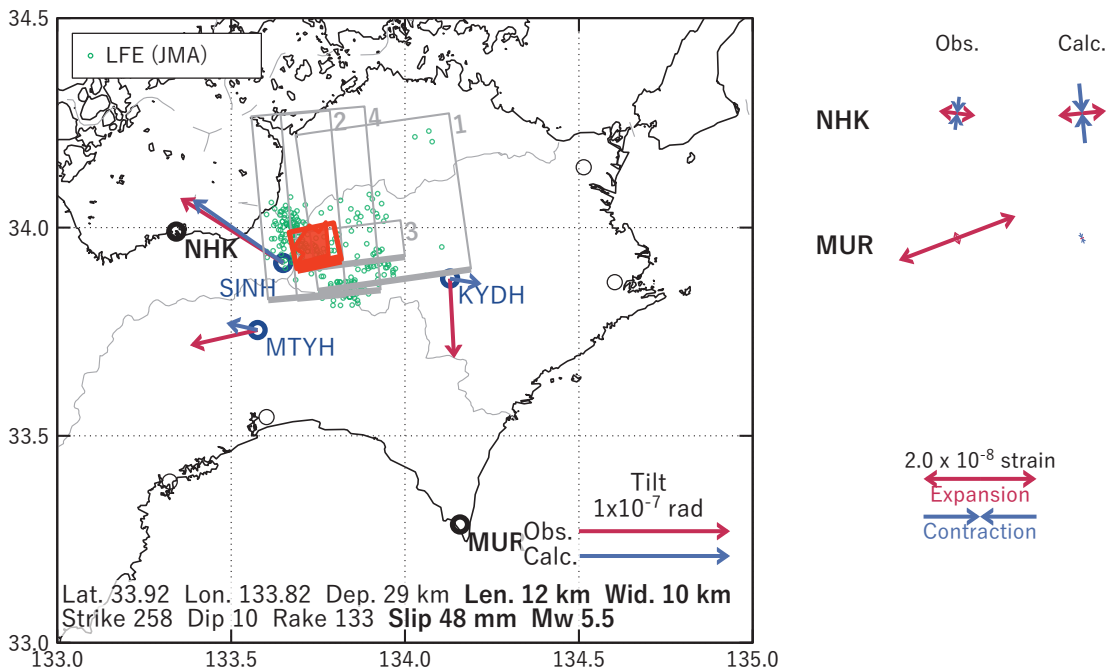


図18 2022/10/18-20 の歪・傾斜変化 (図17 [A]) を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って分布させた20×20kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小とするすべり量を選んだ時の残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

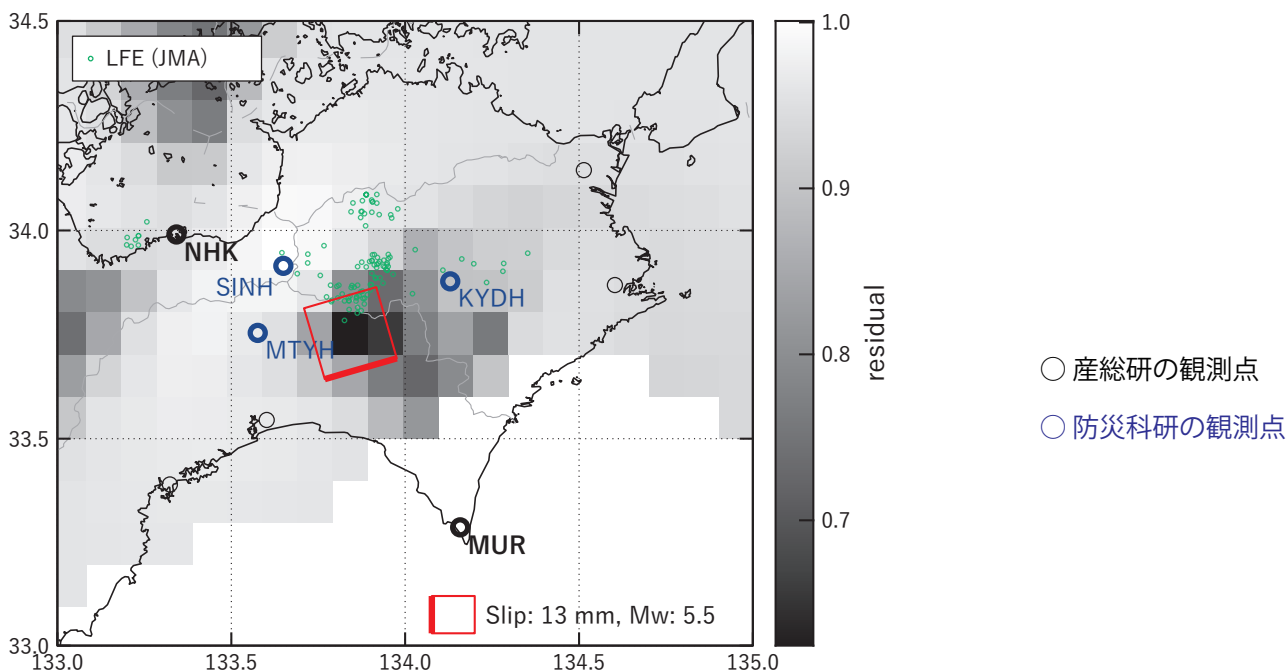
1: 2022/08/15-19 (Mw5.7), 2: 2022/07/26PM-28 (Mw5.4), 3: 2022/05/05-07 (Mw5.6),

4: 2021/05/20PM-22 (Mw5.6)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

[B] 2022/10/21-23

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル

(b2) 主歪

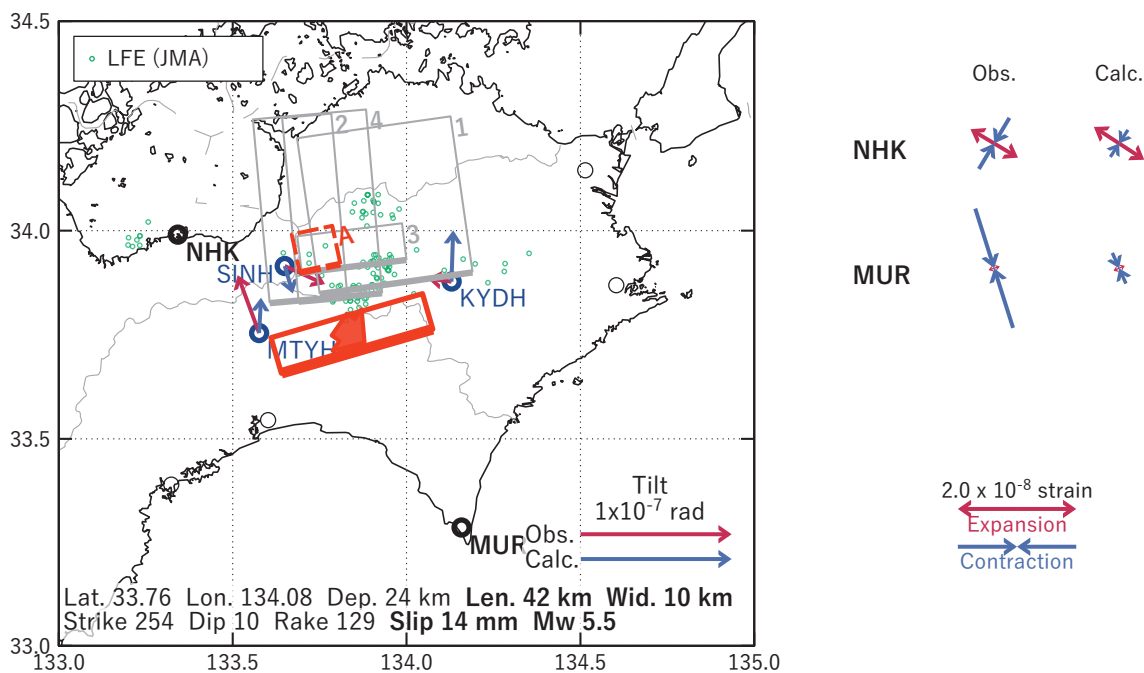


図19 2022/10/21-23の歪・傾斜変化(図17 [B])を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って分布させた $20 \times 20$ kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小とするすべり量を選んだ時の残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

1: 2022/08/15-19 (Mw5.7), 2: 2022/07/26PM-28 (Mw5.4), 3: 2022/05/05-07 (Mw5.6),

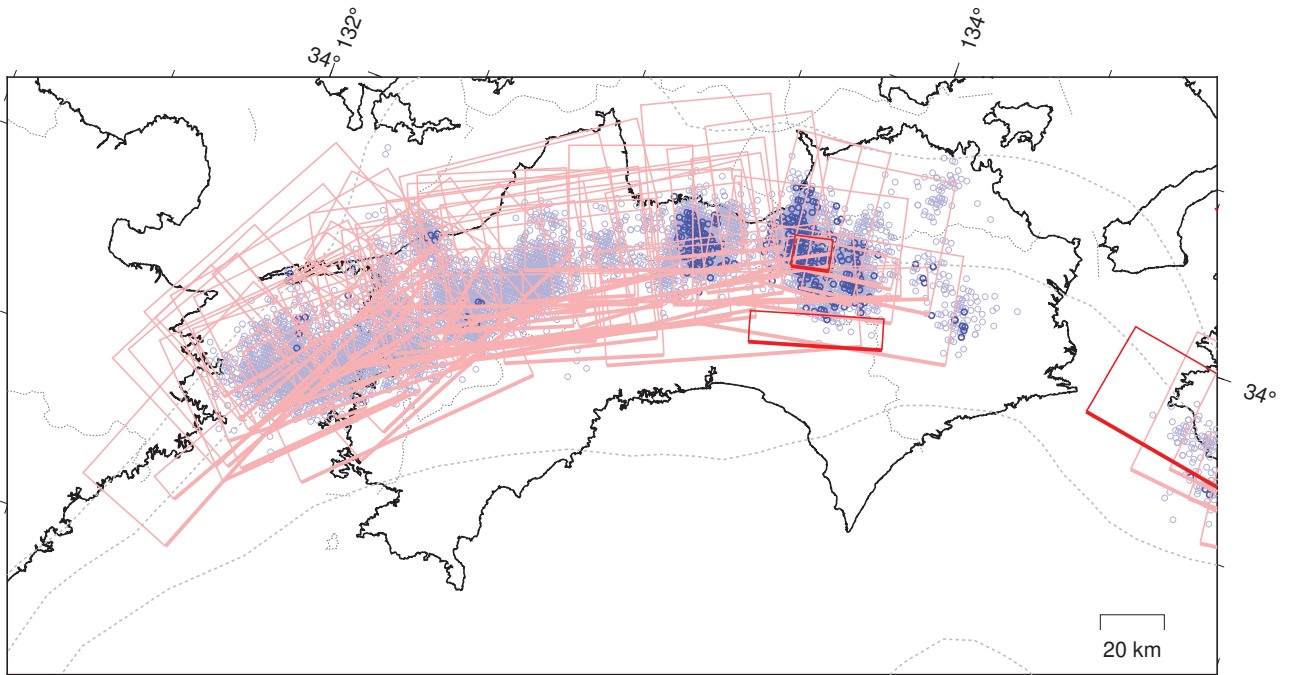
4: 2021/05/20PM-22 (Mw5.6)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

# 四国 短期的ゆっくりすべりの活動状況

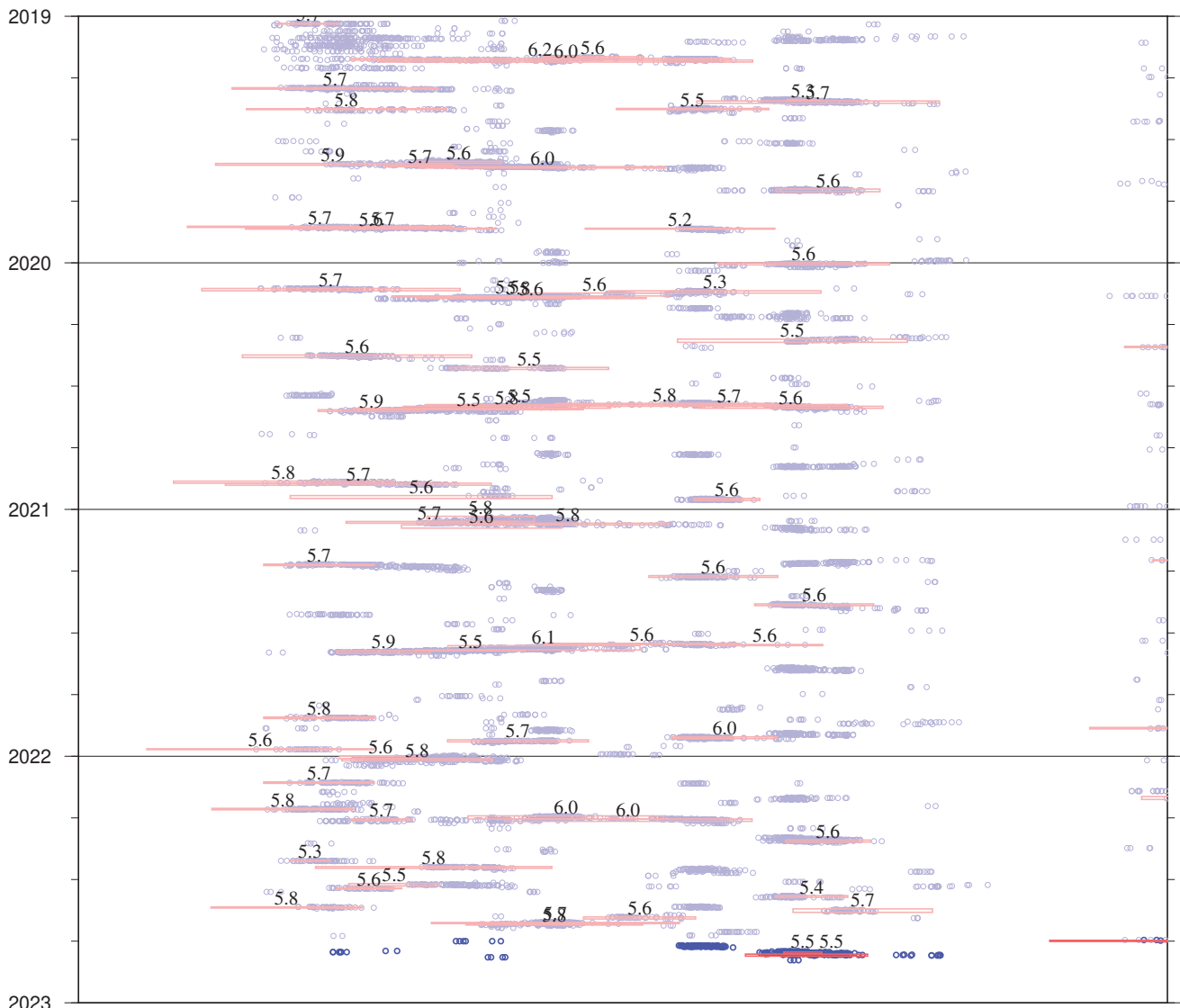
2019年1月1日～2022年11月6日

(2022年9月30日以降を濃く表示)



※破線は、フィリピン海プレート上面の等深線を示す。  
 ※赤矩形は、産業技術総合研究所による短期的ゆっくりすべりの断層モデルを示す。

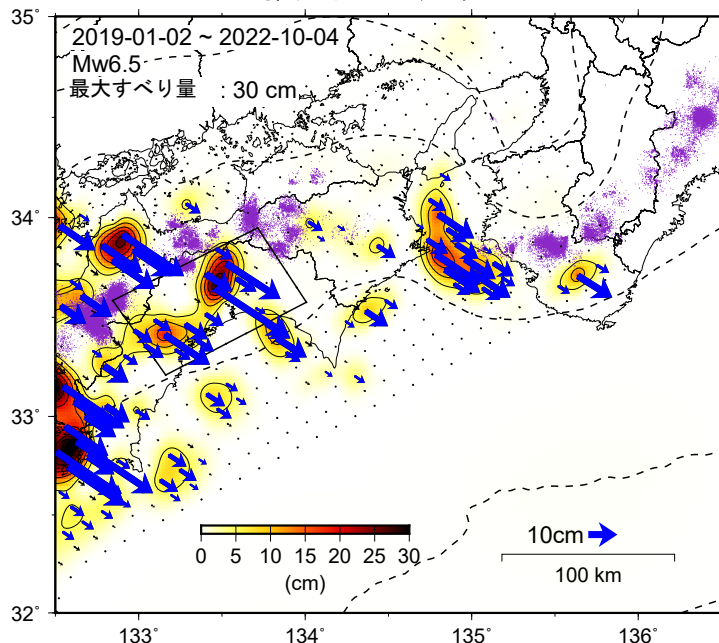
上図の時空間分布図



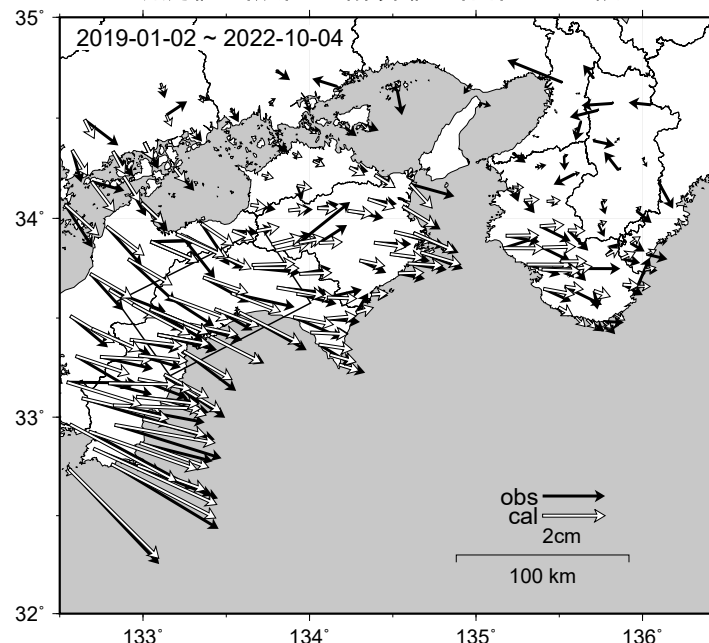
※短期的ゆっくりすべりの解析には、産業技術総合研究所及び防災科学技術研究所のデータを用いている。  
 ※赤矩形の上に表示されている数字は解析されたMwを示す。  
 ※青丸はエンベロープ相関法（防災科学技術研究所、東京大学地震研究所との共同研究による成果）で得られた低周波微動の震央を示す。

# GNSS データから推定された四国中部の長期的ゆっくりすべり (暫定)

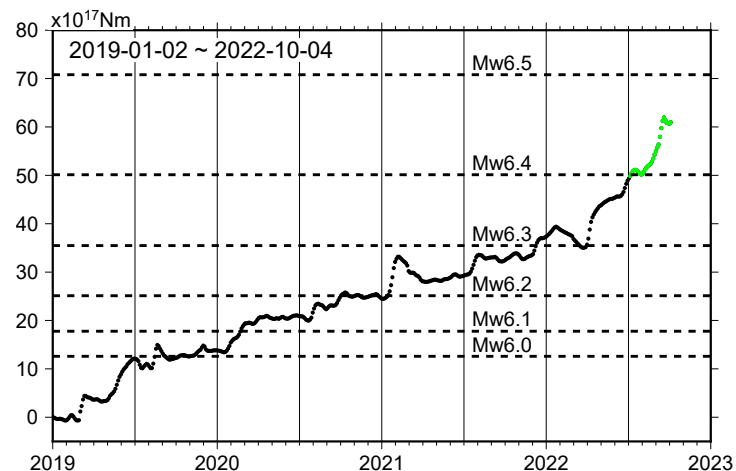
## 推定すべり分布



## 観測値 (黒) と計算値 (白) の比較



## モーメント ※ 時系列 (試算)



Mw 及び最大すべり量はプレート面に沿って評価した値を記載。  
すべり量 (カラー) 及びすべりベクトルは水平面に投影したものを示す。  
推定したすべり量が標準偏差 ( $\sigma$ ) の3倍以上のグリッドを青色表示している。

紫丸：低周波地震 (気象庁一元化震源) (期間：2019-01-02~2022-10-04)  
黒破線：フィリピン海プレート上面の等深線 (Hirose et al., 2008)

使用したデータ：GEONET による日々の座標値 (F5、R5 解)

※電子基準点の保守等による変動は補正済み

トレンド期間：2017-01-01~2018-01-01

(年周・半年周成分は2017-01-01～最新のデータで補正)

モーメント計算範囲：左図の黒枠内側

観測値：3日間の平均値をカルマンフィルターで平滑化した値

すべり方向：プレートの沈み込み方向と平行な方向に拘束

固定局：網野

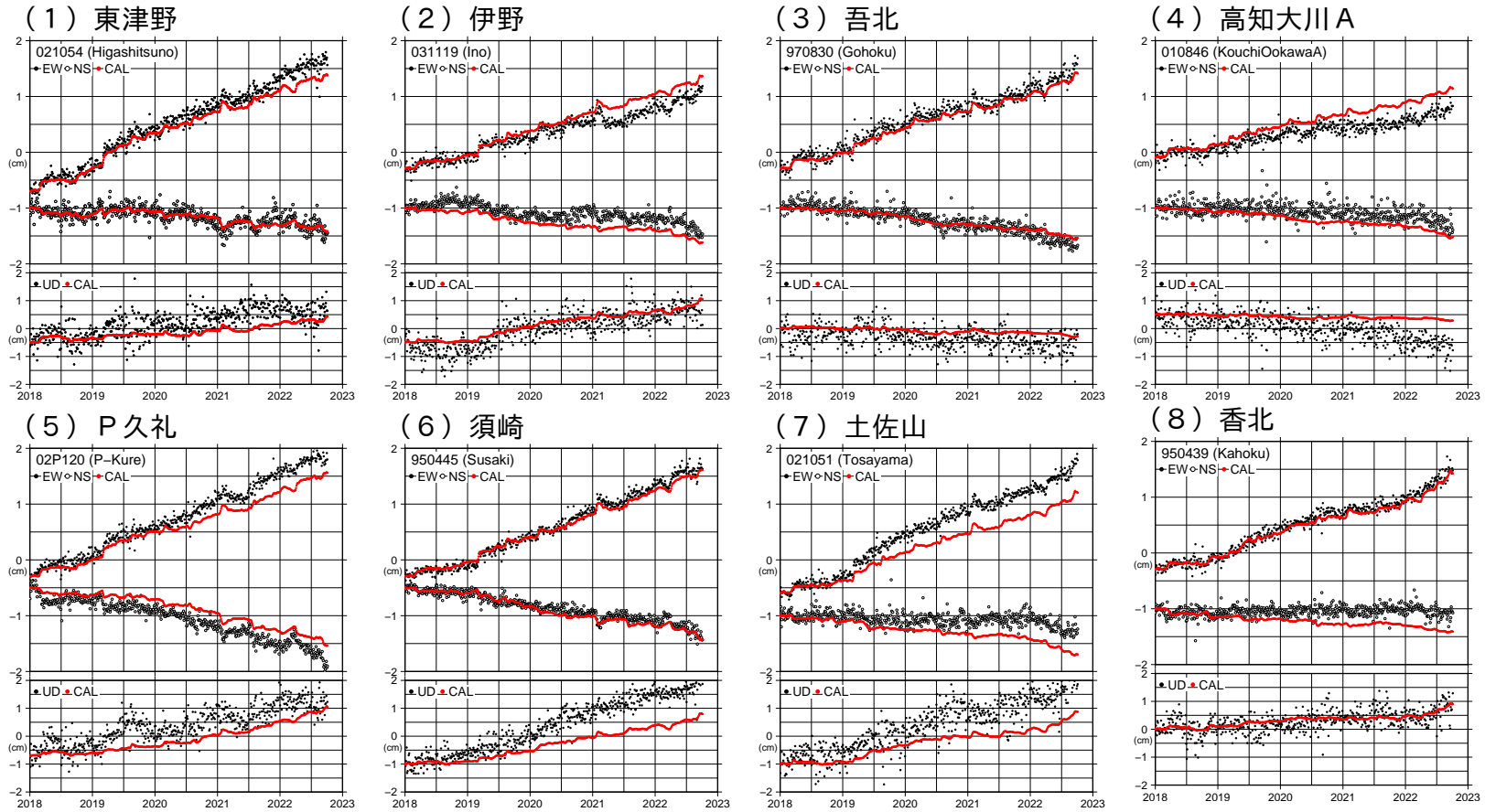
※共通誤差成分を推定

※モーメント

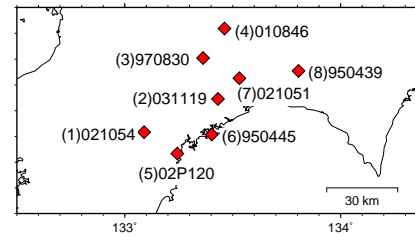
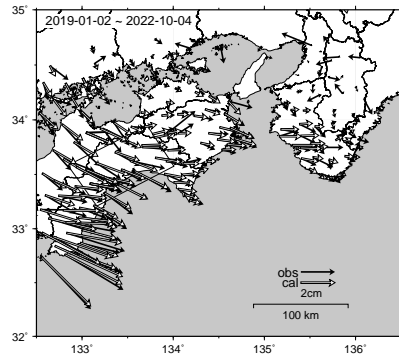
断層運動のエネルギーの目安となる量。

地震の場合の Mw (モーメントマグニチュード) に換算できる。

# 四国中部の観測点の非定常地殻変動時系列と計算値

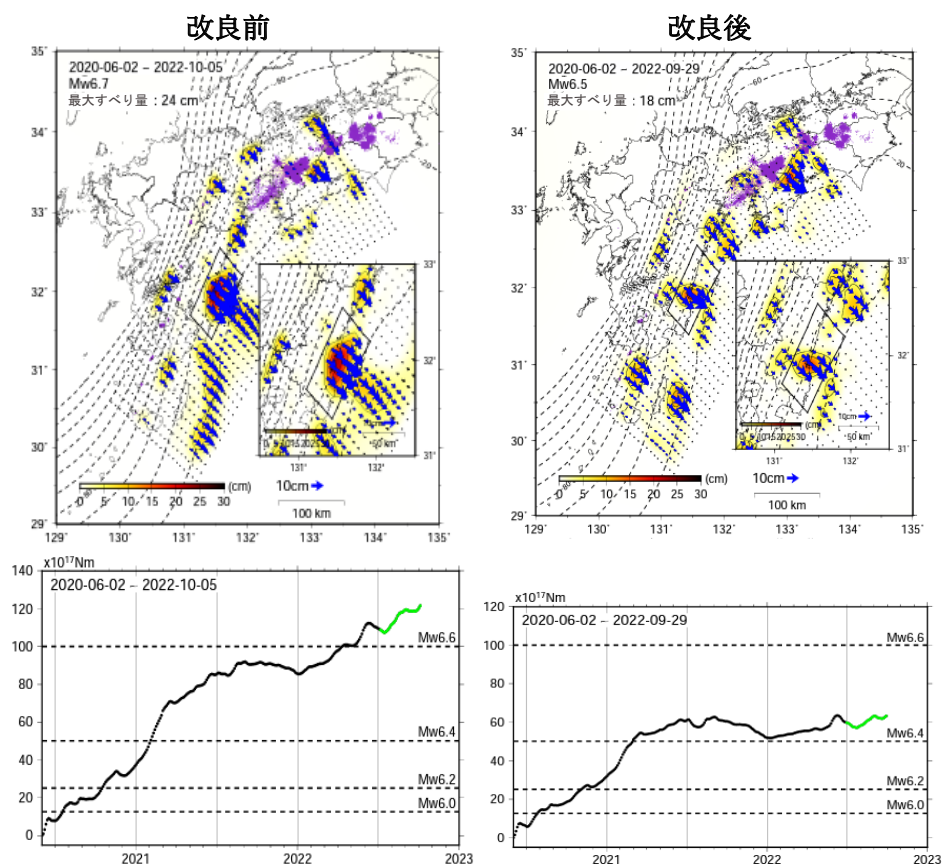


観測値 (黒) と計算値 (白) の比較



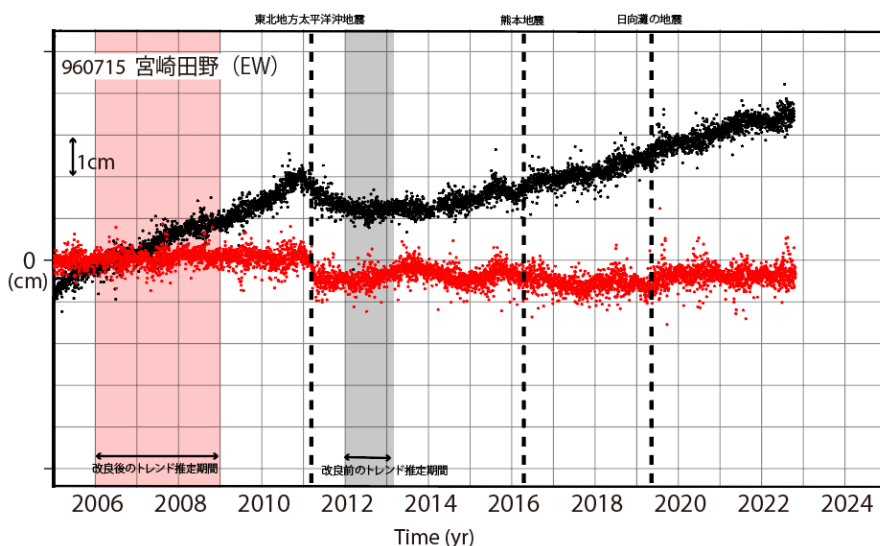
日向灘南部で2020年夏頃から発生していた長期的SSEについて、今回時系列データの処理手法を改良したところ、2022年春以降のすべりの増加傾向は見られなくなった。

累積のすべり分布図とモーメント時系列図【固定局：三隅】



(上) すべり分布図 (下) モーメント時系列図

非常常地殻変動時系列【固定局：三隅】



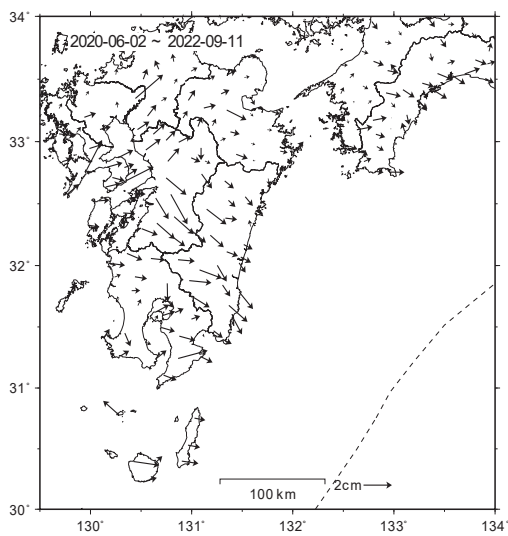
黒丸 (従来解析) : トレンド推定期間 2012年1月~2013年3月

赤丸 (改良後の解析) : トレンド推定期間 2006年1月~2009年1月

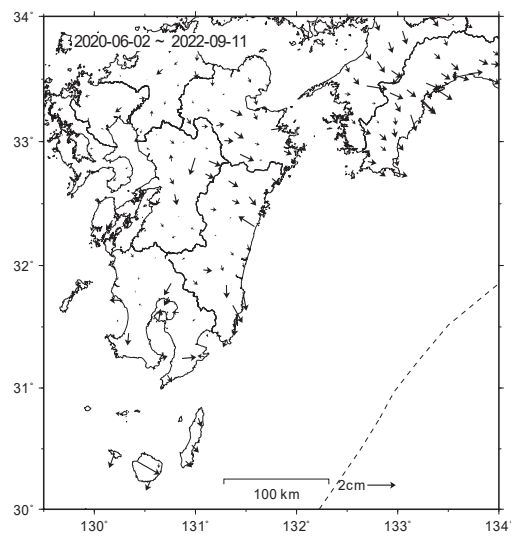
東北地方太平洋沖地震および熊本地震の余効変動をモデル計算により求め除去

累積の非定常地殻変動ベクトル図【固定局：三隅】

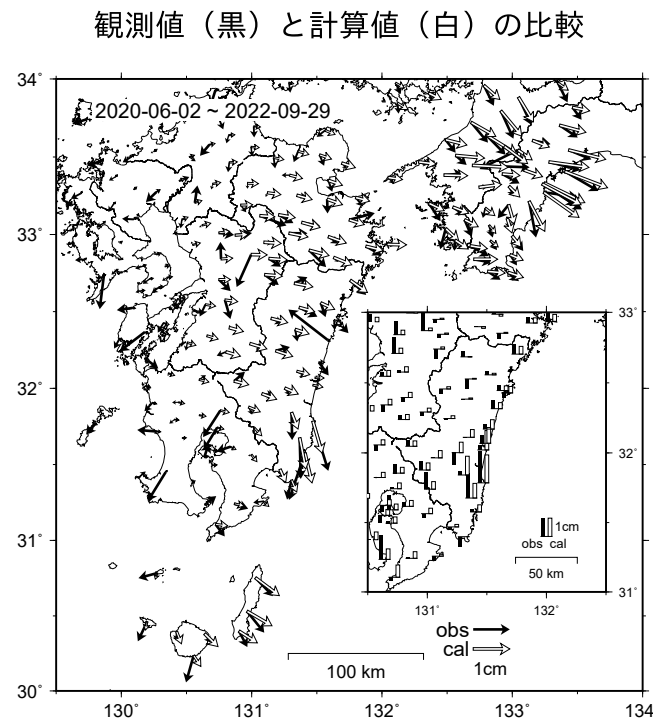
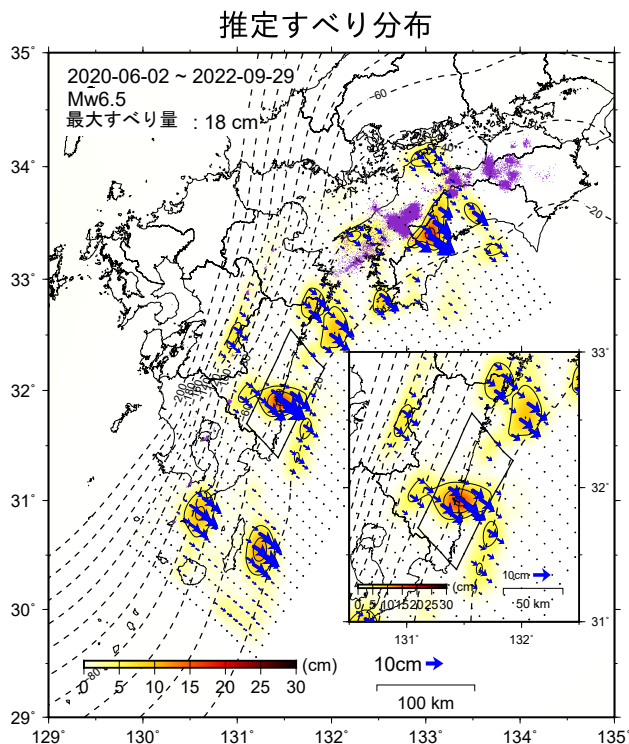
改良前



改良後



# GNSS データから推定された日向灘南部の長期的ゆっくりすべり（暫定）



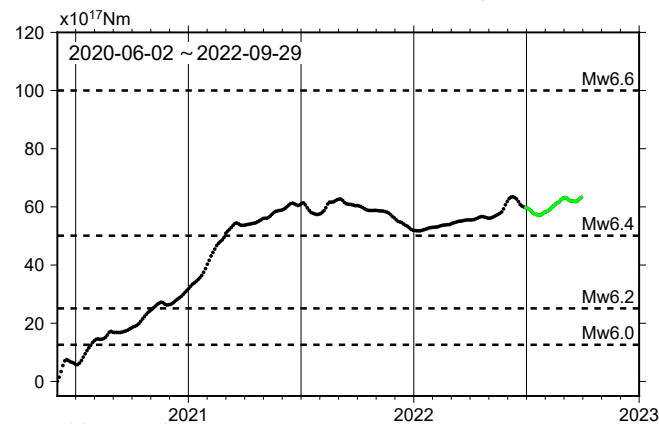
Mw 及び最大すべり量はプレート面に沿って評価した値を記載。  
すべり量（カラー）及びすべりベクトルは水平面に投影したものを示す。  
推定したすべり量が標準偏差（ $\sigma$ ）の3倍以上のグリッドを青色表示している。

紫丸：低周波地震（気象庁一元化震源）（期間：2020-06-02~2022-09-29）  
黒破線：フィリピン海プレート上面の等深線（Hirose et al., 2008）

使用したデータ：GEONET による日々の座標値（F5、R5 解）  
※電子基準点の保守等による変動は補正済み  
※平成 23 年東北地方太平洋沖地震および平成 28 年熊本地震の粘性緩和による変動を補正している。  
※日向灘の地震（2022-01-22, Mw6.6）の地震時変動を除去している。  
トレンド期間：2006-01-01~2009-01-01（年周・半年周成分は補正無し）  
ただし、宮崎平野周辺は 2007-10-01~2009-03-01、  
種子島周辺は 2008-03-01-2011-03-01。

モーメント計算範囲：左図の黒枠内側  
観測値：3 日間の平均値をカルマンフィルターで平滑化した値  
すべり方向：プレートの沈み込み方向と平行な方向に拘束  
固定局：三隅  
※共通誤差成分を推定

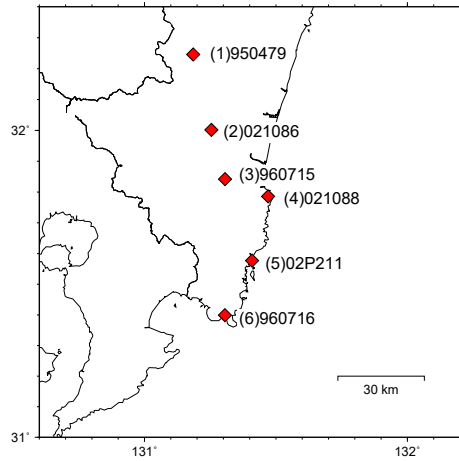
## モーメント ※ 時系列（試算）



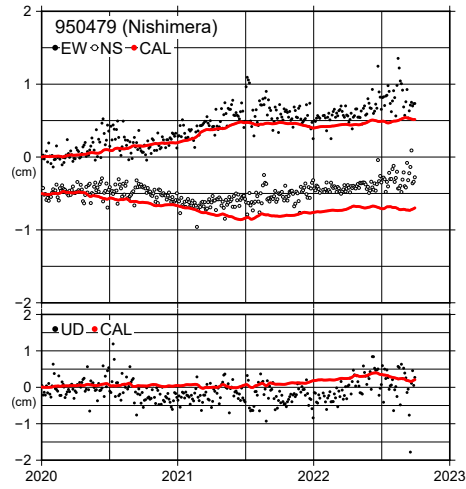
※モーメント  
断層運動のエネルギーの目安となる量。  
地震の場合の Mw（モーメントマグニチュード）に換算できる。



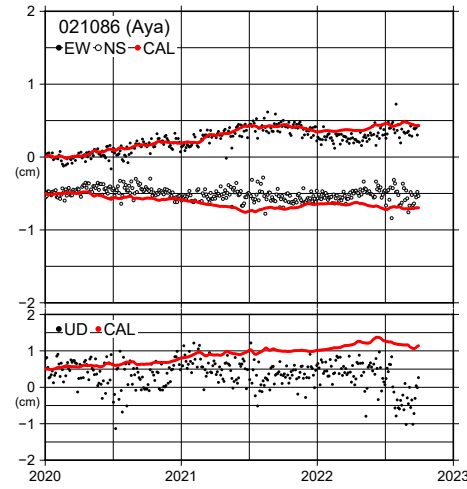
# 九州地域の観測点の非定常地殻変動時系列と計算値



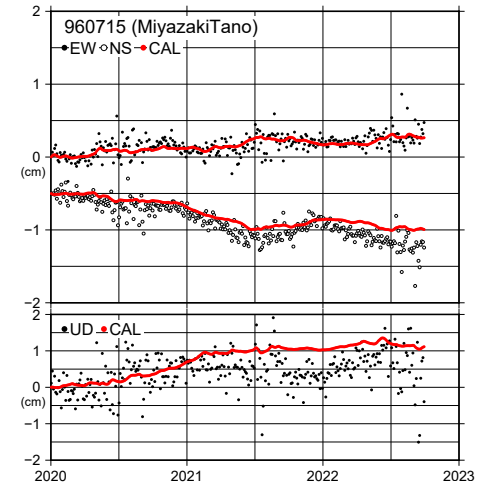
(1) 西米良



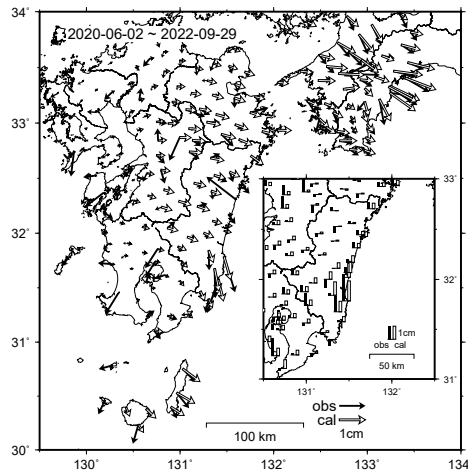
(2) 綾



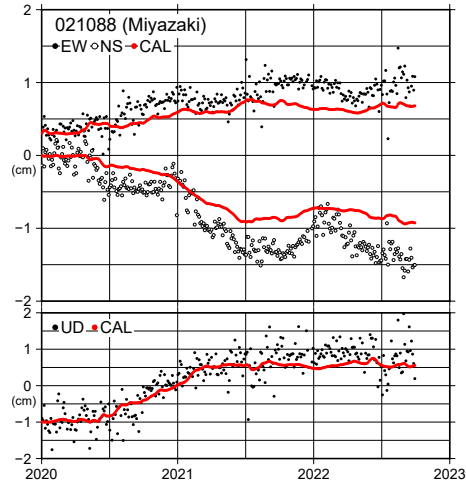
(3) 宮崎田野



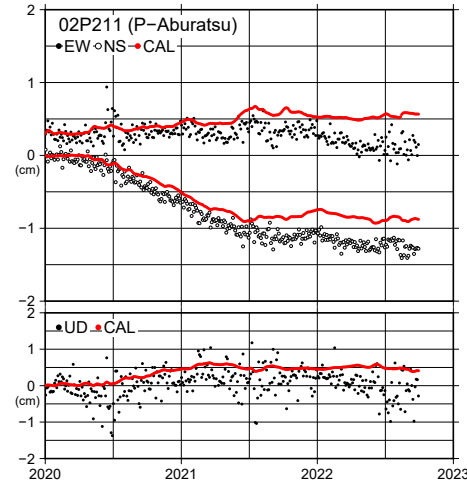
観測値（黒）と計算値（白）の比較



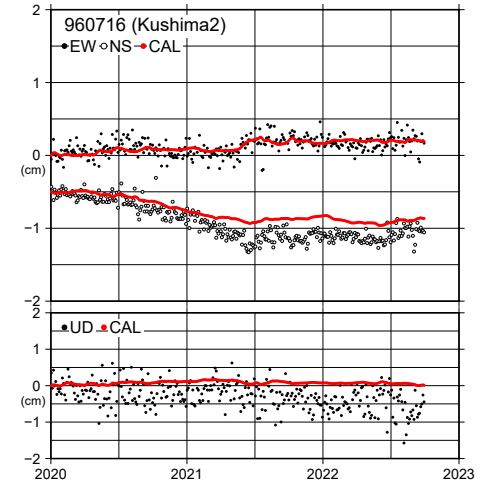
(4) 宮崎



(5) P油津



(6) 串間2

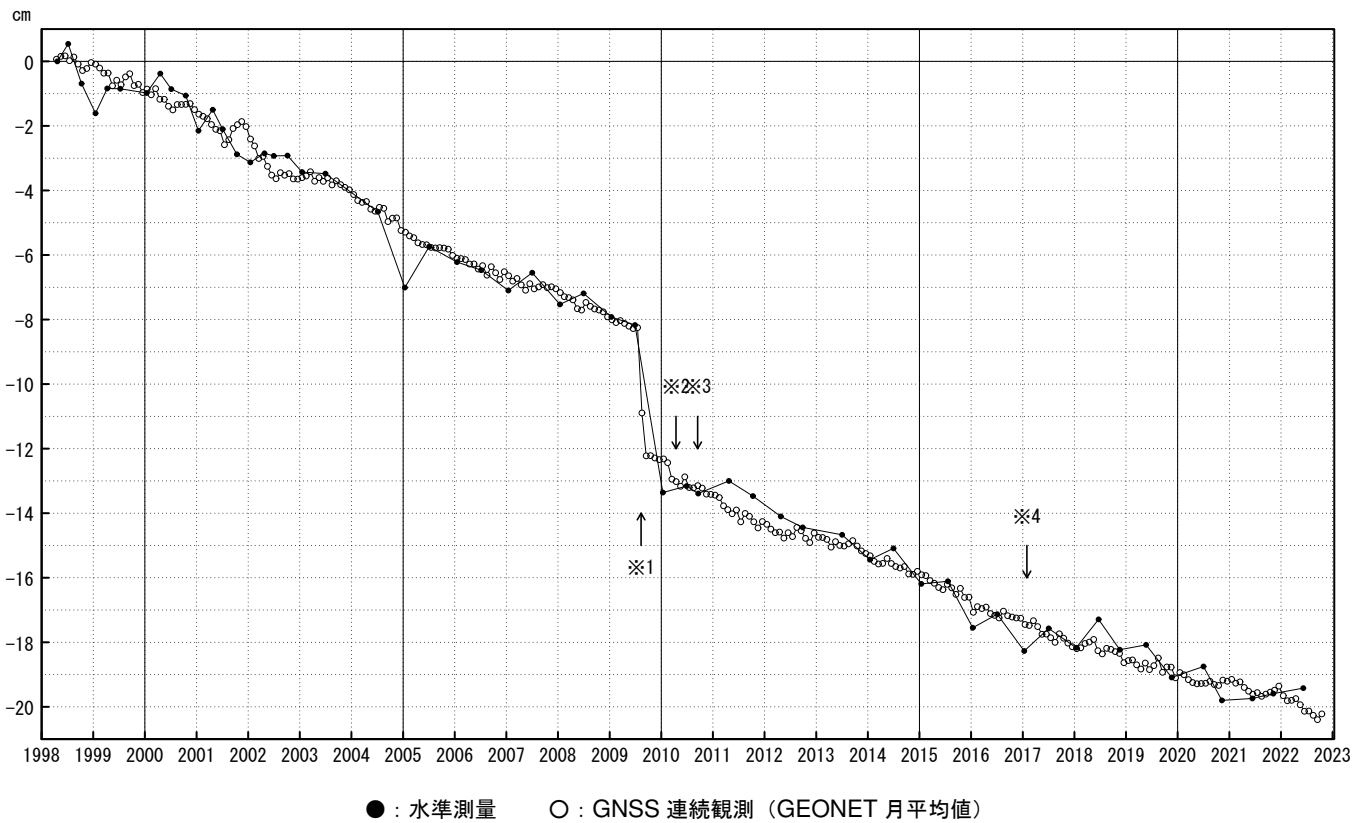


# 御前崎 電子基準点の上下変動

## 水準測量と GNSS 連続観測

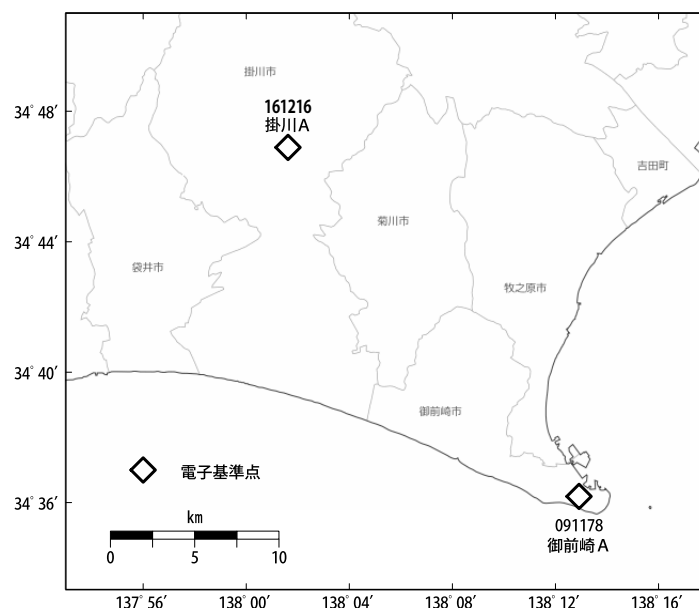
掛川に対して、御前崎が沈降する長期的な傾向が続いている。

掛川 A (161216) - 御前崎 A (091178)



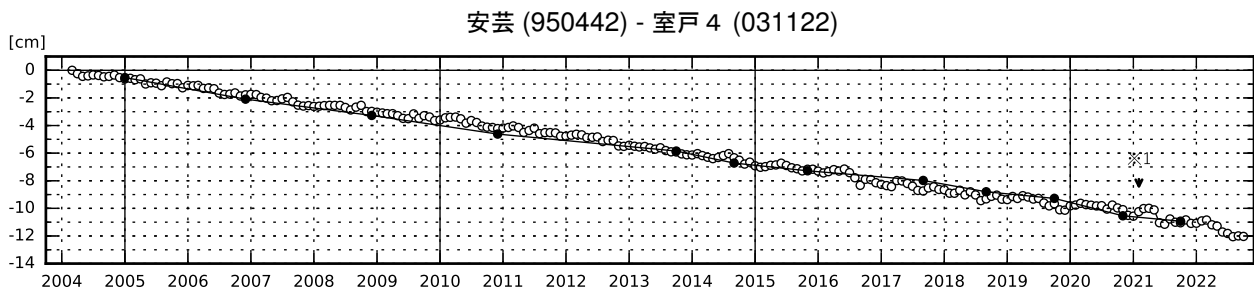
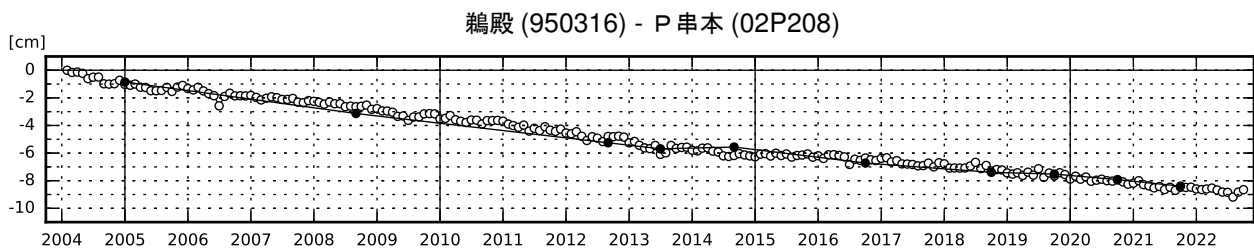
- ・ 水準測量による結果は、最初のプロット点の値を 0cm として描画している。
- ・ GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5 : 最終解) から計算した値の月平均値。最新のプロット点は 10/1~10/8 の平均。
- ・ GNSS 連続観測による結果については、水準測量の全期間との差が最小となるように描画している。

- ※1 電子基準点「御前崎」は 2009 年 8 月 11 日の駿河湾の地震 (M6.5) に伴い、地表付近の局所的な変動の影響を受けた。
- ※2 2010 年 4 月以降は、電子基準点「御前崎」をより地盤の安定している場所に移転し、電子基準点「御前崎 A」とした。上記グラフは電子基準点「御前崎」と電子基準点「御前崎 A」のデータを接続して表示している。
- ※3 水準測量の結果は移転後初めて変動量が計算できる 2010 年 9 月から表示している。
- ※4 2017 年 1 月 30 日以降は、電子基準点「掛川」は移転し、電子基準点「掛川 A」とした。上記グラフは電子基準点「掛川」と電子基準点「掛川 A」のデータを接続して表示している。



# 紀伊半島及び室戸岬周辺 電子基準点の上下変動

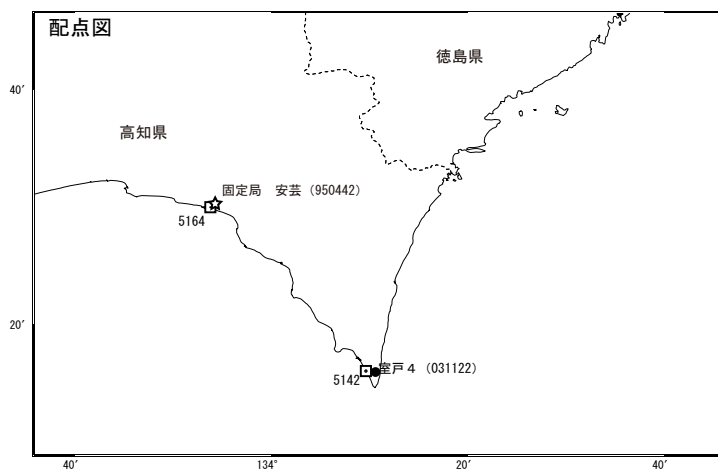
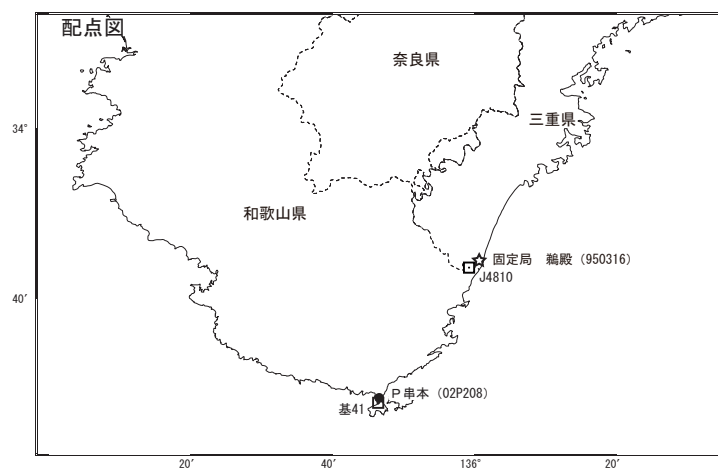
潮岬周辺及び室戸岬周辺の長期的な沈降傾向が続いている。



● : 水準測量    ○ : GNSS 連続観測 (GEONET 月平均値)

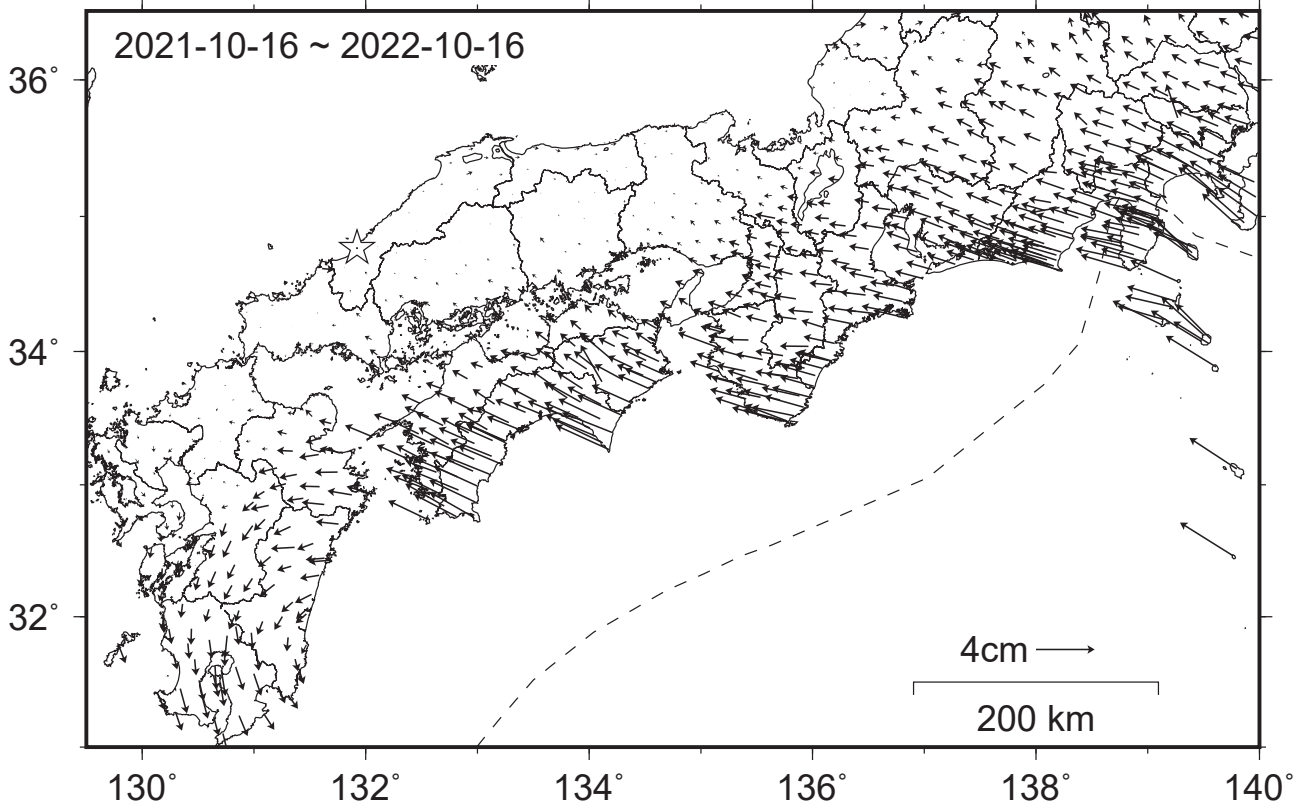
- ・ GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5: 最終解) から計算した値の月平均値である。(最新のプロット点: 10/1~10/8 の平均値)
- ・ 水準測量の結果は、最寄り的一等水準点の結果を表示しており、GNSS 連続観測の全期間の値との差が最小となるように描画している。
- ・ 水準測量による結果については、最寄り的一等水準点の結果を表示している。

※ 1 2021/2/2 に電子基準点「安芸」のアンテナ更新及びレドーム交換を実施した。

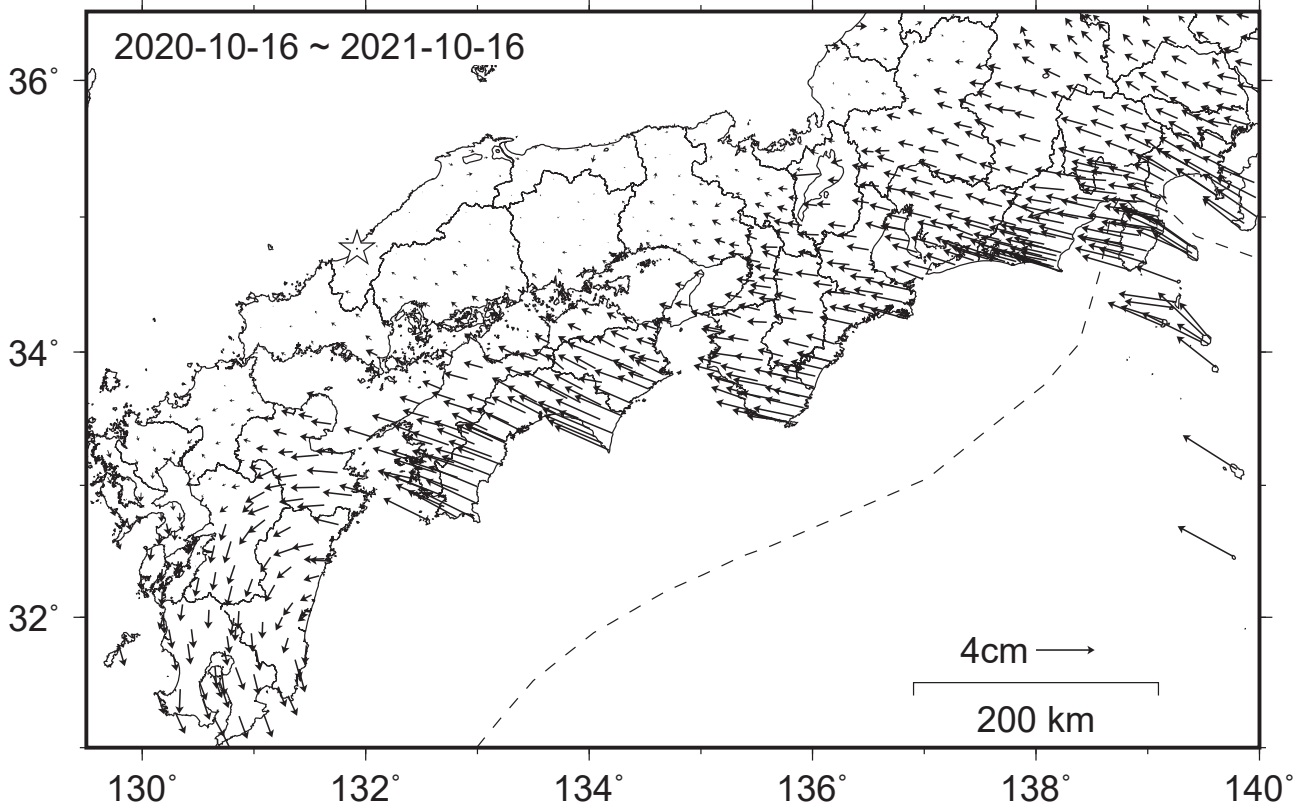


# 南海トラフ沿いの水平地殻変動【固定局：三隅】

【最近1年間】



【1年前の1年間】



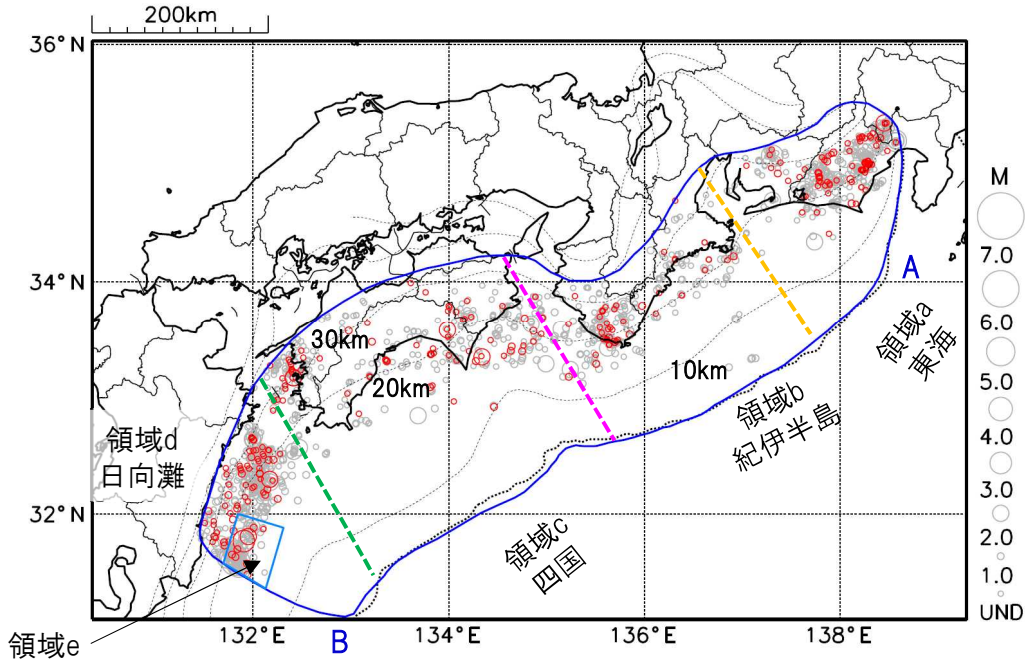
- ・GEONETによる日々の座標値（F5解、R5解）を使用している。
- ・各日付 ± 6日の計13日間の変動量の中央値をとり、その差から1年間の変動量を表示している。

# プレート境界とその周辺の地震活動

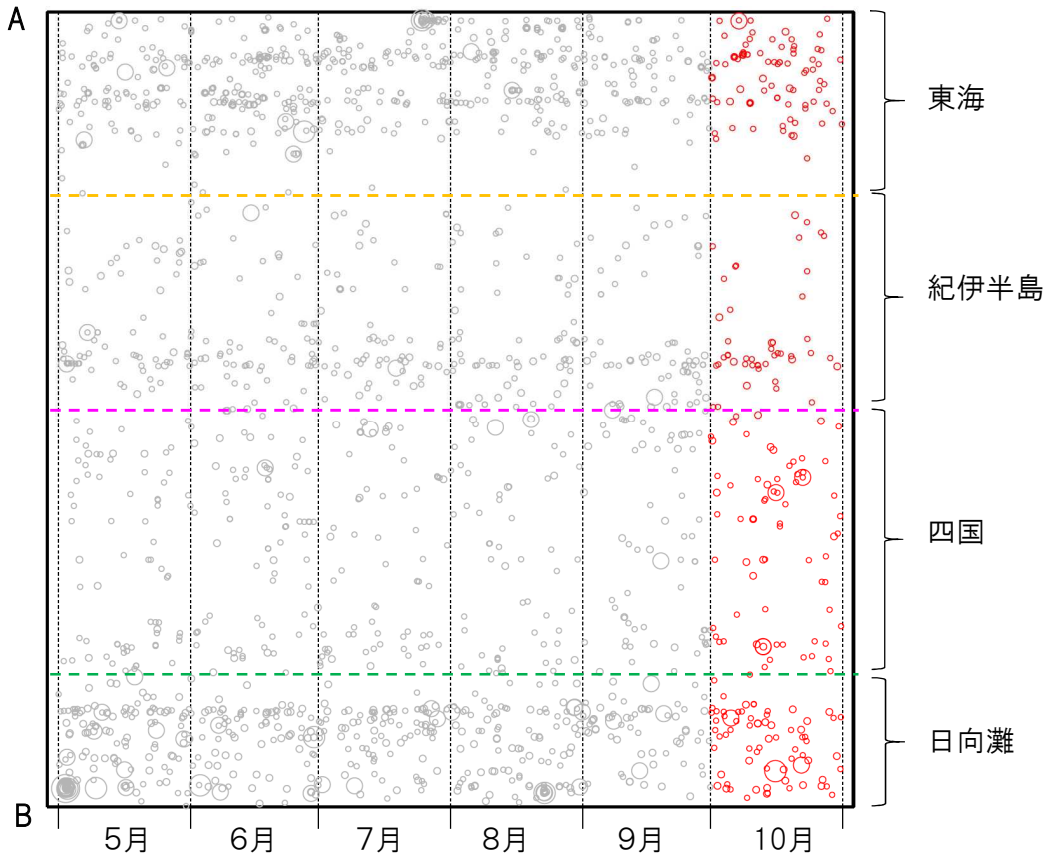
フィリピン海プレート上面の深さから±6km未満の地震を表示している。  
日向灘の領域e内のみ、深さ20km～30kmの地震を追加している。

震央分布図

(2022年5月1日～2022年10月31日、M全て、2022年10月の地震を赤く表示)



南海トラフ巨大地震の想定震源域内の時空間分布図(A-B投影)



- ・フィリピン海プレート上面の深さは、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。
- ・今期間の地震のうち、M3.2以上の地震で想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震に吹き出しを付している。吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差 (+は浅い、-は深い) を示す。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。

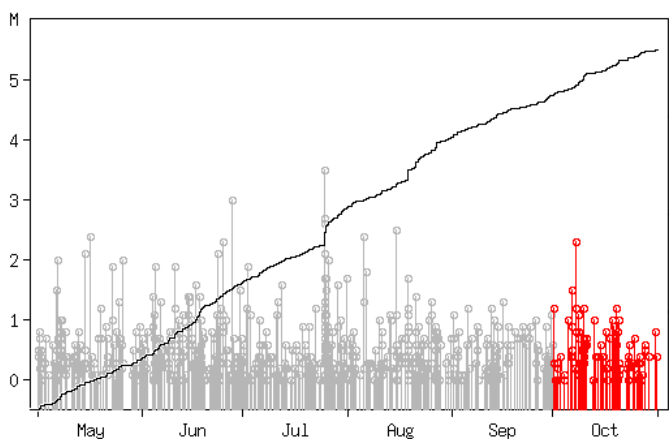
気象庁作成

# プレート境界とその周辺の地震活動

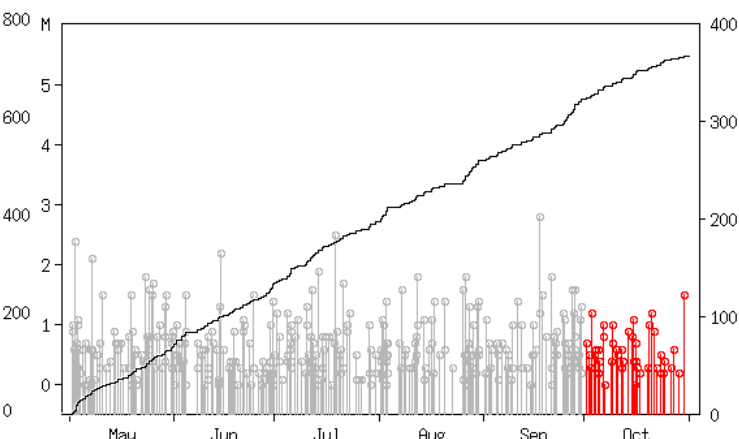
フィリピン海プレート上面の深さから±6km未満の地震を表示している。

震央分布図の各領域内のMT図・回数積算図  
(2022年5月1日～2022年10月31日、M全て、2022年10月の地震を赤く表示)

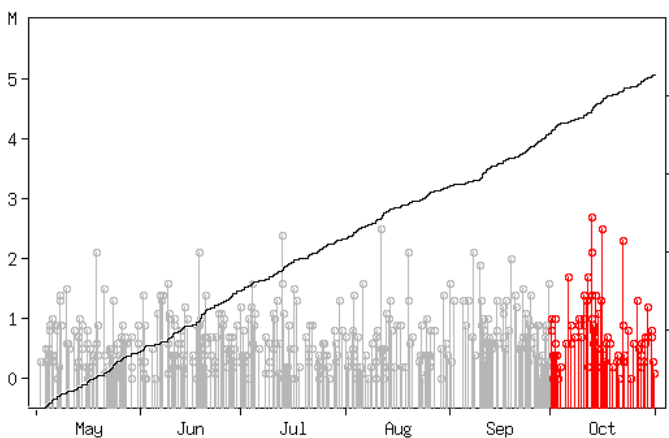
領域a内(東海)



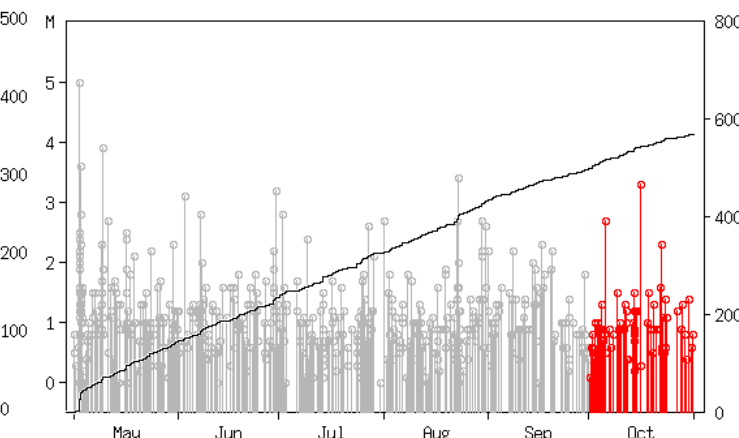
領域b内(紀伊半島)



領域c内(四国)



領域d内(日向灘)

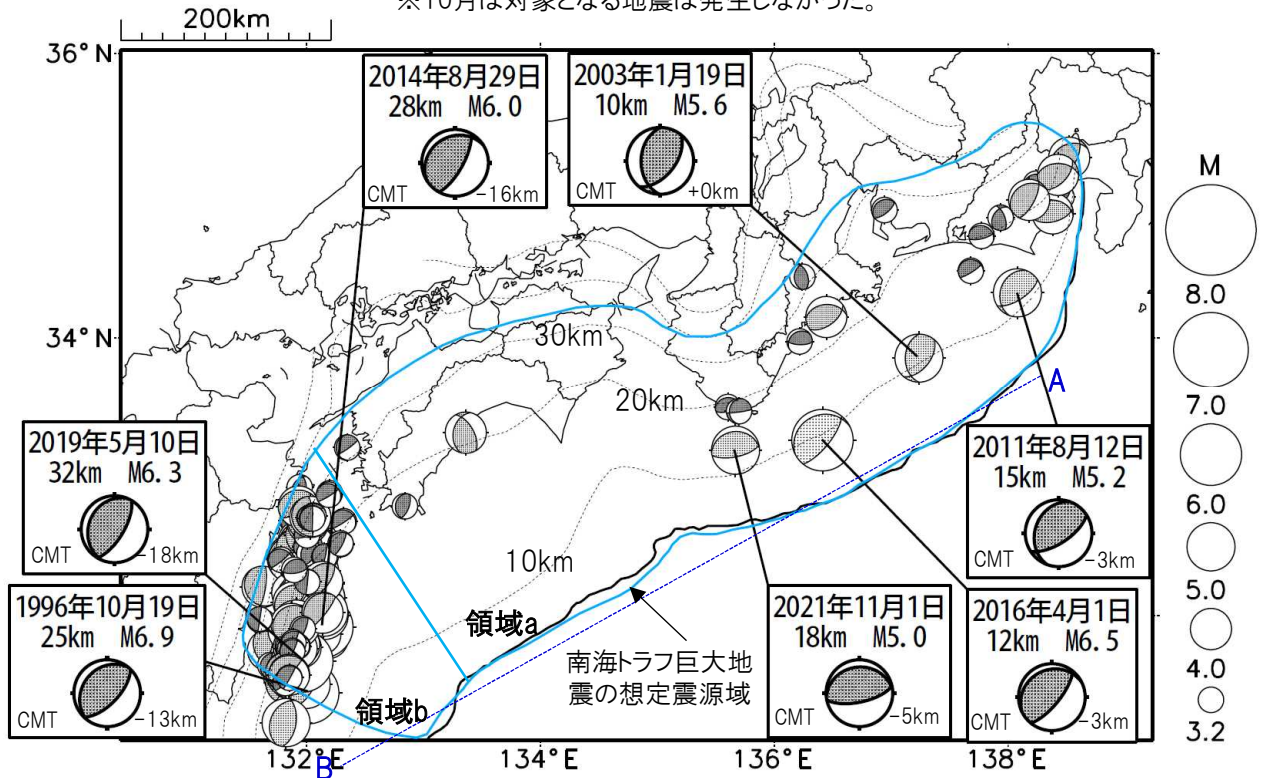


※M全ての地震を表示していることから、検知能力未満の地震も表示しているため、回数積算図は参考として表記している。

# 想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震

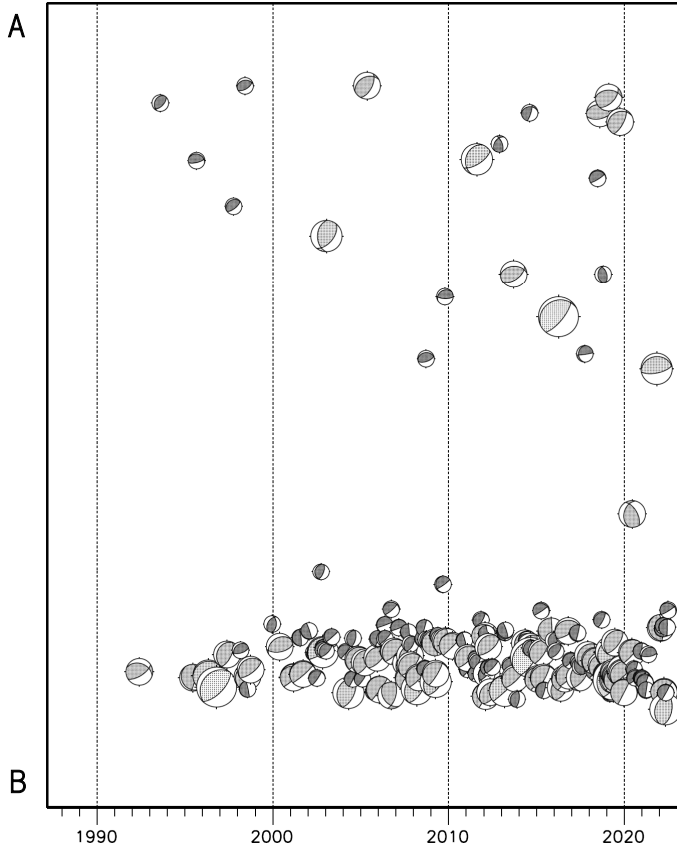
震央分布図(1987年9月1日～2022年10月31日、M $\geq$ 3.2、2022年10月の地震を赤く表示)

※10月は対象となる地震は発生しなかった。



- ・フィリピン海プレート上面の深さは、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。
- ・今期間に発生した地震(赤)、日向灘のM6.0以上、その他の地域のM5.0以上の地震に吹き出しを付けている。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。
- ・吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差を示す。+は浅い、-は深いことを示す。
- ・吹き出しに「CMT」と表記した地震は、発震機構解と深さはCMT解による。Mは気象庁マグニチュードを表記している。
- ・発震機構解の解析基準は、解析当時の観測網等に応じて変遷しているため一定ではない。

震央分布図内の時空間分布図



プレート境界型の地震と類似の型の発震機構解を持つ地震は以下の条件で抽出した。

**【抽出条件】**

- ・M3.2以上の地震
- ・領域a内(南海トラフの想定最大規模の想定震源域内)で発生した地震
- ・発震機構解が以下の条件を全て満たしたものを抽出した。
  - P軸の傾斜角が45度以下
  - P軸の方位角が65度以上180度以下(※)
  - T軸の傾斜角が45度以上
  - N軸の傾斜角が30度以下
- ※以外の条件は、東海地震と類似の型を抽出する条件と同様
- ・発震機構解は、CMT解と初動解の両方で検索をした。
- ・同一の地震で、CMT解と初動解の両方がある場合はCMT解を選択している。
- ・東海地方から四国地方(領域a)は、フィリピン海プレート上面の深さから±10km未満の地震のみ抽出した。日向灘(領域b)は、+10km～-20km未満の震源を抽出した。CMT解はセントロイドの深さを使用した。

気象庁作成

# 南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺の地震活動指数

2022年10月31日

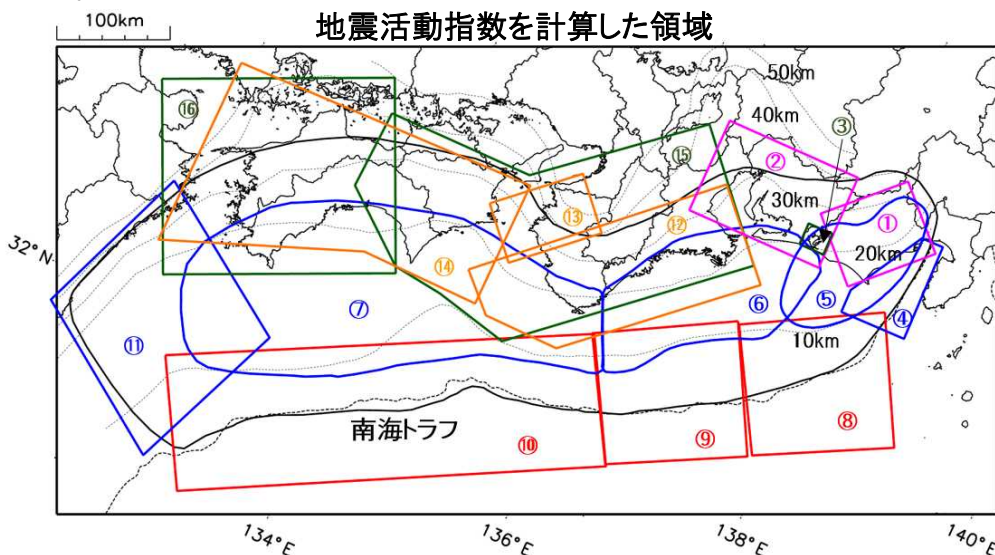
領域	①静岡県 中西部		②愛知県		③浜名湖 周辺	④駿河 湾	⑤ 東海	⑥東南 海	⑦南海
	地	プ	地	プ	プ	全	全	全	全
地震活動指数	3	0	6	4	4	3	2	6	6
平均回数	16.5	18.3	26.6	13.7	13.2	13.2	18.1	19.8	21.6
MLきい値	1.1		1.1		1.1	1.4	1.5	2.0	2.0
クラスタ 除去	距離	3km		3km		3km	10km	10km	10km
	日数	7日		7日		7日	10日	10日	10日
対象期間	60日	90日	60日	30日	360日	180日	90日	360日	90日
深さ	0~ 30km	0~ 60km	0~ 30km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 100km	0~ 100km

領域	南海トラフ沿い		⑪日向 灘	⑫紀伊 半島	⑬和歌 山	⑭四国	⑮紀伊半 島	⑯四国
	⑧東側	⑩西側	全	地	地	地	プ	プ
	全	全	全	地	地	地	プ	プ
地震活動指数	6	4	5	4	4	4	2	7
平均回数	12.6	14.5	20.7	22.9	41.6	30.9	27.8	28.2
MLきい値	2.5	2.5	2.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
クラスタ 除去	距離	10km	10km	10km	3km	3km	3km	3km
	日数	10日	10日	10日	7日	7日	7日	7日
対象期間	720日	360日	60日	120日	60日	90日	30日	30日
深さ	0~ 100km	0~ 100km	0~ 100km	0~ 20km	0~ 20km	0~ 20km	20~ 100km	20~ 100km

\* 基準期間は、全領域1997年10月1日～2022年10月31日

\* 領域欄の「地」は地殻内、「プ」はフィリピン海プレート内で発生した地震であることを示す。ただし、震源の深さから便宜的に分類しただけであり、厳密に分離できていない場合もある。「全」は浅い地震から深い地震まで全ての深さの地震を含む。

\* ⑨の領域(三重県南東沖)は、2004年9月5日以降の地震活動の影響で、地震活動指数を正確に計算できないため、掲載していない。



地震活動指数を計算した領域

地震活動指数と地震数

地震回数の指数化		
指数	確率 (%)	地震数
8	1	多い
7	4	
6	10	やや多い
5	15	
4	40	ほぼ平常
3	15	
2	10	やや少ない
1	4	
0	1	少ない

\* 黒色実線は、南海トラフ巨大地震の想定震源域を示す。

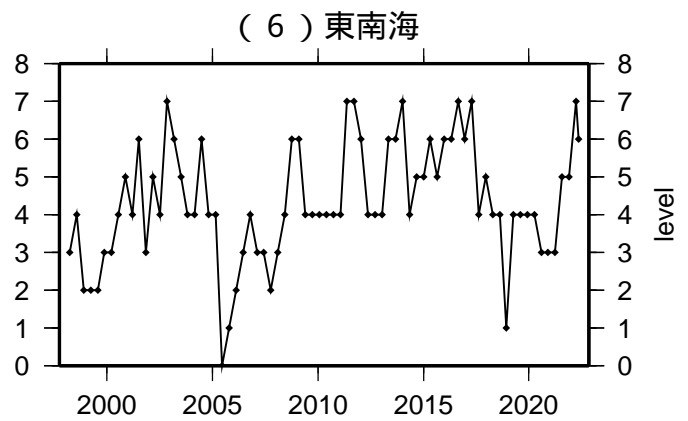
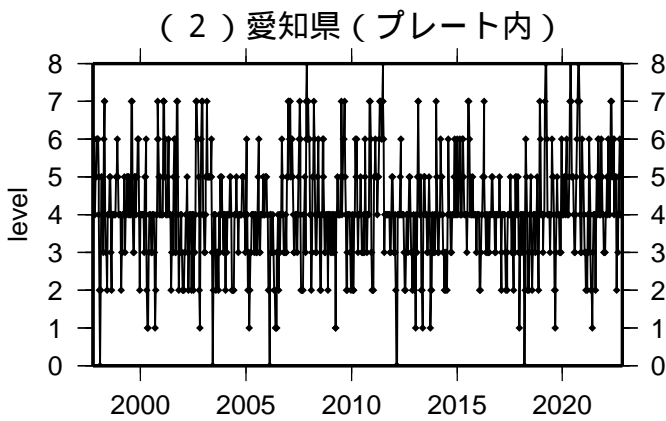
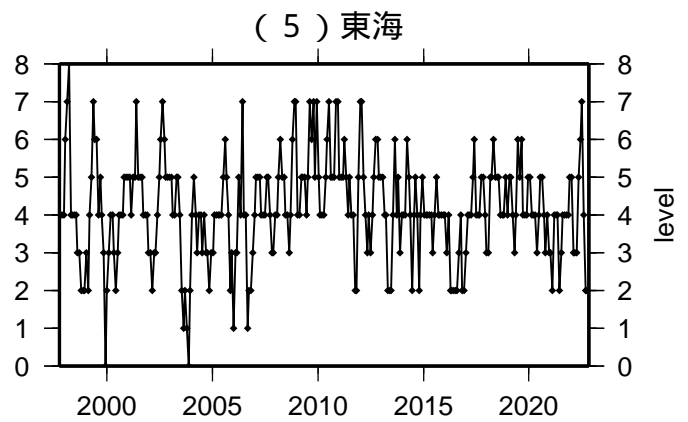
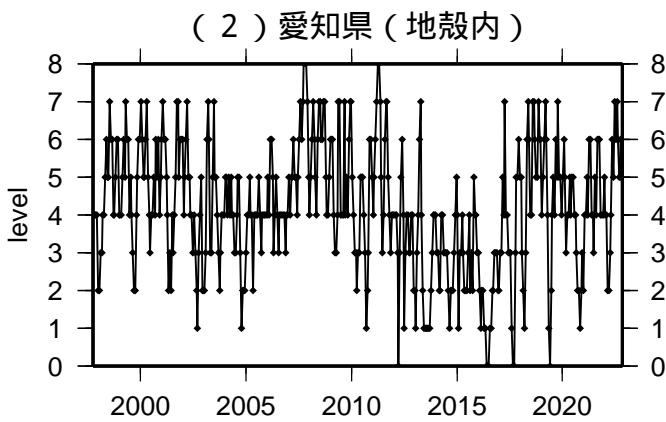
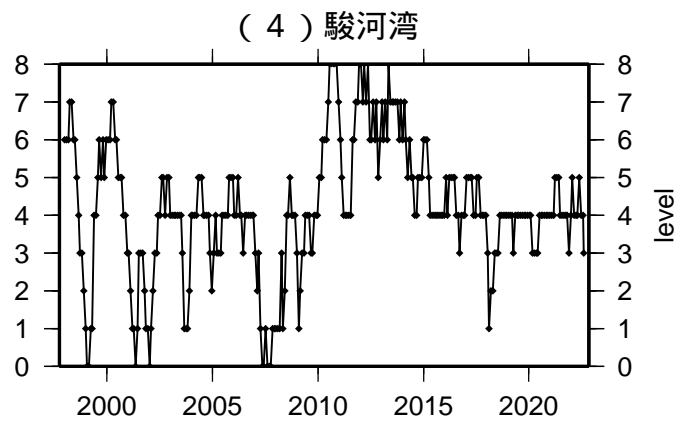
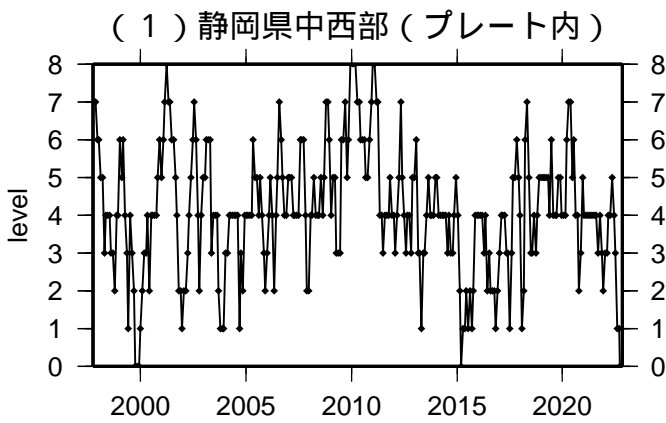
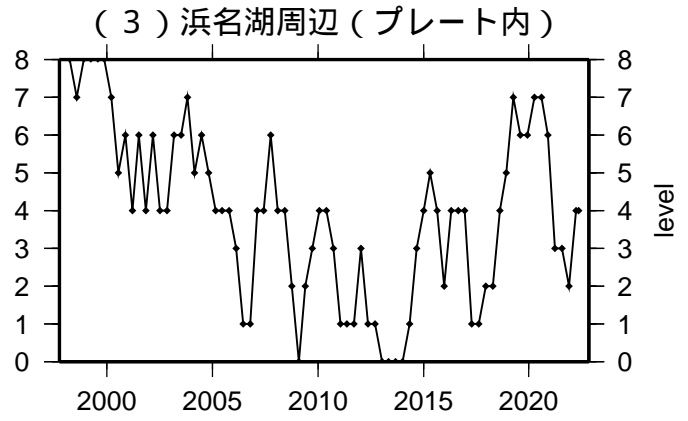
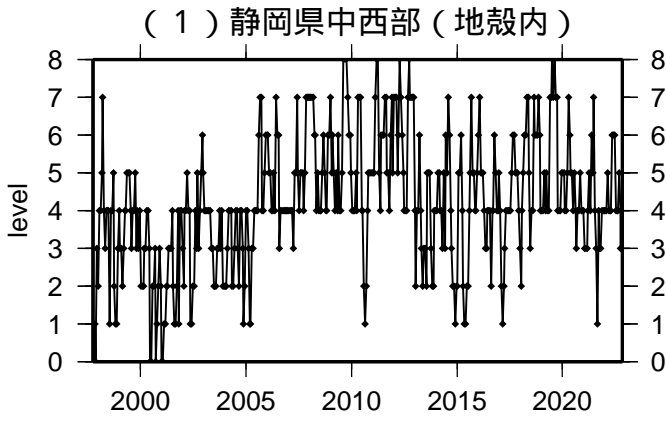
\* Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるプレート境界の等深線を破線で示す。

気象庁作成



# 地震活動指数一覧

2022年10月31日

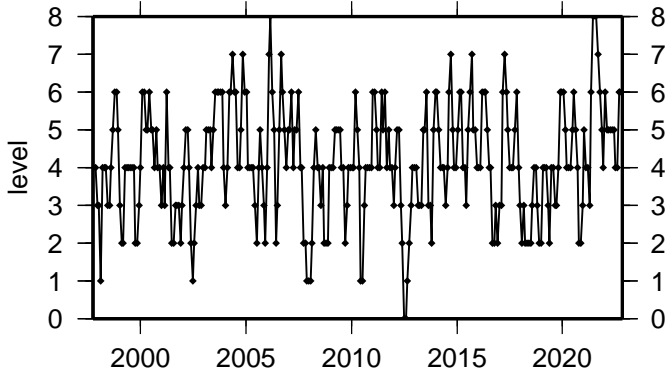


活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←		平常	→		多		

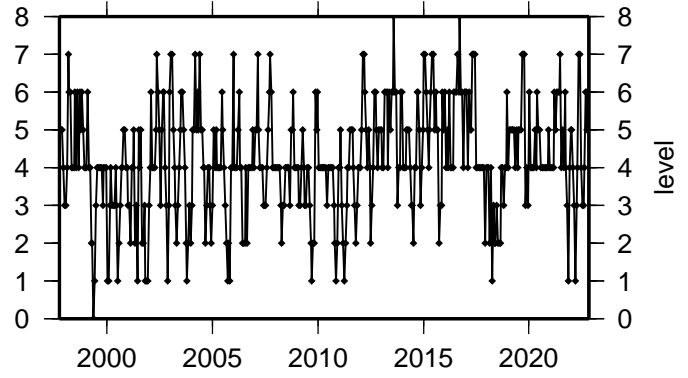
# 地震活動指数一覽

2022年10月31日

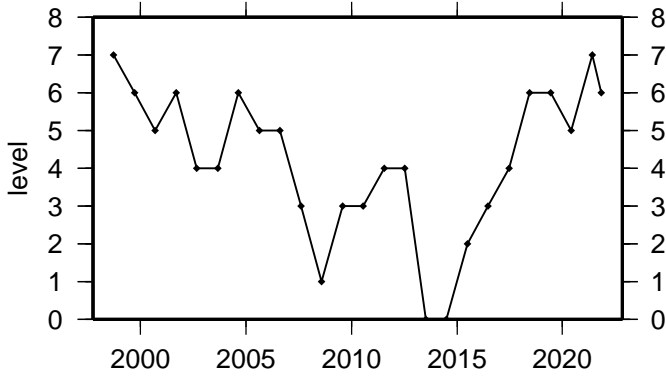
( 7 ) 南海



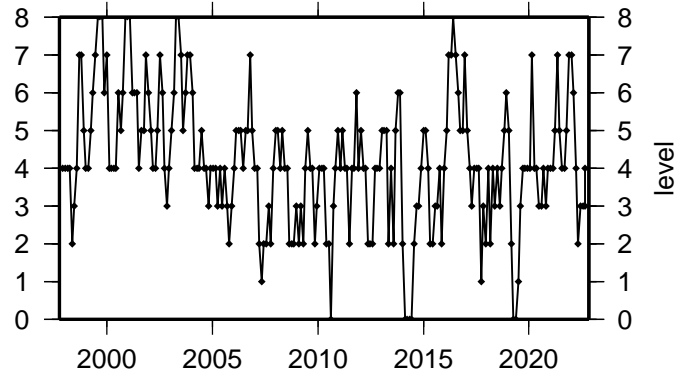
( 11 ) 日向灘



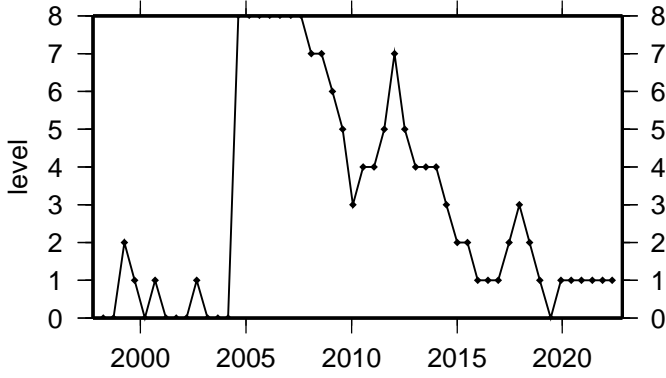
( 8 ) 南海トラフ沿い(東側)



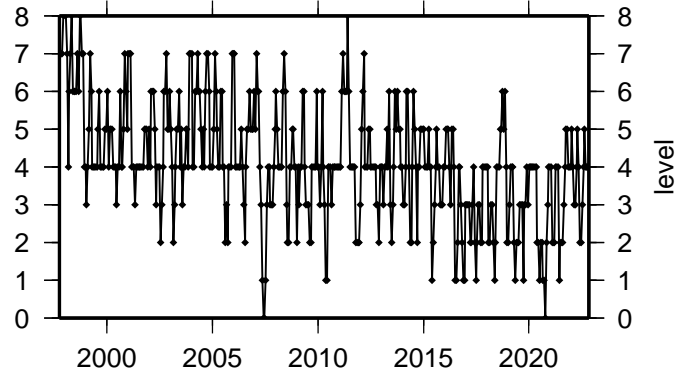
( 12 ) 紀伊半島(地殻内)



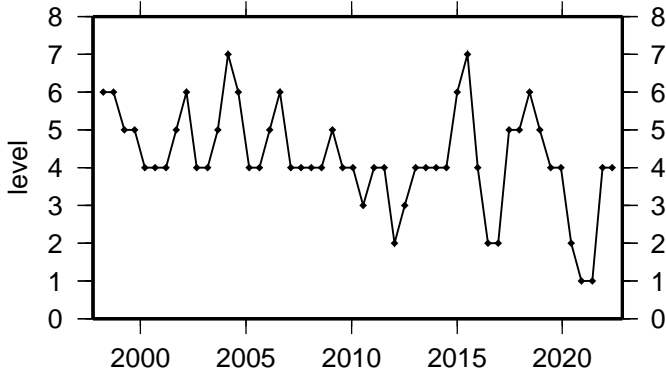
( 9 ) 南海トラフ沿い(三重県沖)



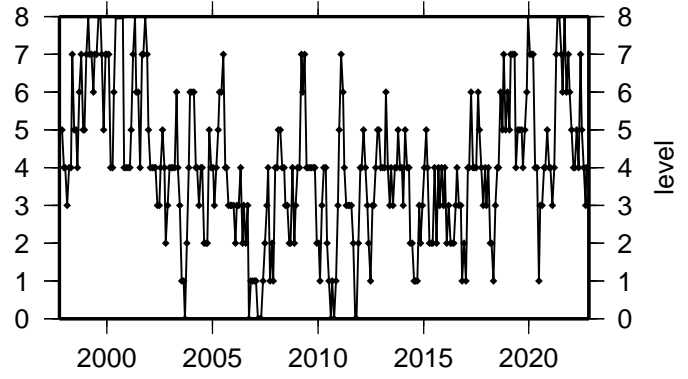
( 13 ) 和歌山(地殻内)



( 10 ) 南海トラフ沿い(西側)



( 14 ) 四国(地殻内)

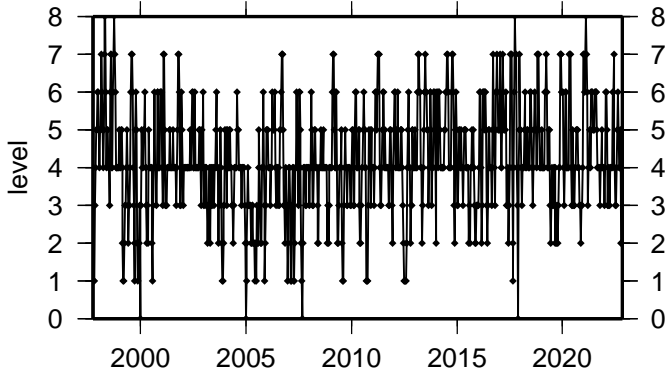


活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率(%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←	←	←	←	←	←	←	→

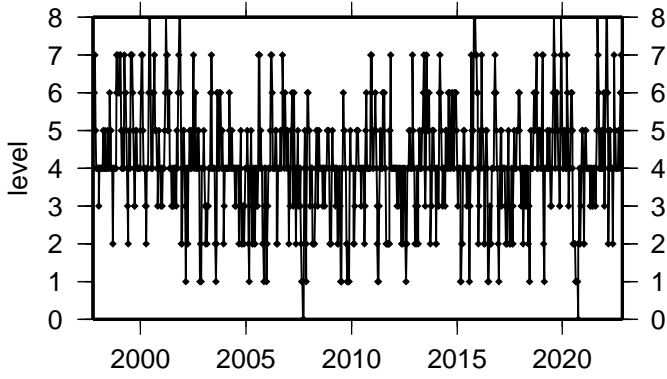
# 地震活動指数一覧

2022年10月31日

( 1 5 ) 紀伊半島 (プレート内)



( 1 6 ) 四国 (プレート内)



活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	← 平常		多					